

地域学研究大会概要

I、期 日：6月12日（土）

II、会 場：鳥取大学共通教育棟 A20 大講義室

参加者総数 213 名（教職員・学生・自治体等）

III、講演・シンポジウムプログラム

10:00 基調講演「地域学の未来－日本学術会議地域研究委員会からの提言－」

日本学術会議地域研究委員会副委員長 碓井照子（奈良大学文学部地理学科教授）

・講演資料

13:00 シンポジウム「大学に何ができるか～地域づくりと地域学」

（コーディネーター）鳥取大学地域学部教授 野田邦弘

（パネリスト）鳥取県企画部長 高橋謙司

智頭町長 寺谷誠一郎

NPO 法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会 長尾裕昭

米子「笑い通り商店街振興組合」 住田済三郎

（コメンテーター）鳥取大学地域学部准教授 家中茂

・パネリスト資料

2010.6.12(土)

鳥取大学 参加無料



講演会・シンポジウム

「地域づくりと地域学」

(第1回 地域学研究会大会)

鳥取大学地域学部棟
5160大講義室(5F)

基調講演

10:00~12:00

シンポジウム

13:00~15:00

講演会・シンポジウム

「地域づくりと地域学」

(第1回 地域学研究会大会)

鳥取大学

鳥取大学地域学部では、地域学の教育研究を推進する一方で各地域における地域づくり活動とも積極的に連携しつつあります。これは、地域づくりの実践活動を大学での教育研究活動に活かすとともに、地域づくり活動に大学として貢献するためです。この度、地域学の教育研究の一層の発展と地域づくり活動とのネットワークづくりのために、講演会とシンポジウムを企画しました。

第1部は、日本学術会議地域研究委員会から講師を招き、地域学の現状と今後の展望について講演を行います。第2部では、鳥取県の各地で地域づくりに関わっておられるキーパーソンを招いて、「地域」「地域学」「地域づくり」についてシンポジウムを開催します。この催しは、今年4月に改修工事が竣工した鳥取大学の新しい地域学部棟の県民へのお披露目も兼ねて地域学研究会第1回大会として開催するものです。多くのみなさんの参加をお待ちしています(参加無料)。

【主 催】鳥取大学

【会 場】鳥取大学鳥取キャンパス地域学部5160 大講義室(5階)

【日 時】2010年6月12日(土) 10:00~15:00

【内 容】基調講演 「地域学の未来 -日本学術会議地域研究委員会からの提言-」 10:00~12:00

日本学術会議地域研究委員会副委員長 碓井照子(奈良大学文学部地理学科教授)

シンポジウム 「大学に何ができるか ~地域づくりと地域学~」 13:00~15:00

《コーディネーター》 野田邦弘 (鳥取大学地域学部教授)

《パネリスト》 高橋謙司 (鳥取県企画部長)

寺谷誠一郎 (鳥取県智頭町長)

長尾裕昭 (NPO 法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会理事長)

住田清三郎 (米子「笑い通り商店街振興組合」理事長)

《コメンテーター》 家中茂 (鳥取大学地域学部准教授)

【問い合わせ】

鳥取大学地域学部事務室 0857-31-5973

同学部教授/野田邦弘 0857-31-5128 nomed@rstu.jp



第1回 鳥取大学地域学研究会大会

日 時 平成22年6月12日（土）

10:00～12:00

場 所 共A20講義室

○鳥取大学（渡部） 皆さん、おはようございます。

それでは、ただいまより鳥取大学地域学研究会の記念すべき第1回大会を開会いたします。

開会に当たりまして、主催者を代表して鳥取大学の能勢学長よりあいさつをいただきます。（拍手）

○鳥取大学（能勢） おはようございます。きのうからいろいろと御議論いただいているということで、まず、きょうは第1回の鳥取大学地域学研究会ということだそうです。きのうから第6回の地域学系、「系」という言葉が入っている、大学・学部等連携協議会の会をやっていただいています、全国からそれぞれ関係の皆様にお集まりいただいたことと、金沢大学の学生さん、それからうちの学生さんと、まさに将来を担う若い人たちも一緒に、この問題を検討してくれるということで大変喜んでおります。

鳥取大学も地域学部をつくりましてからしばらくたちました。当初は、地域学という学問があるかないかという話がありましたけれども、つくりましたときからその問題は起ころうなと思っておりますし、学という言葉にこだわる先生がたくさんおられまして、学問体系というのは自分のところのものしか学問ではないのだという、学問に対する定義というものがいろいろと錯綜するということでもありますけれども、地域学部をつくりましたときから科学そのものが学際的になると、こういうことを認識しておりました。

学際的というのは、今で言っております学域ですね、わかりやすい言葉で言えば学部ですけれども、学部を超えるということがなかなかこの大学もできないなと思っていました。法人化になりましてから各大学ともそれぞれの特徴を出そうということで、一般的に向かっておりますのは、学部の壁、学科の壁、研究科の壁を越えると。そういう新しい学問を創出するというので、きょうは碓井先生が後の特別講演でもっと皆さんにわかりやすくお話いただけたと思いますけれども、我々もなかなか混乱している中でこれをやってきました。

そのときに一番問題になりましたのが、今、学生さんがおられますけれども、学生さん

が入学するとき、大学を選ぶときにわかるだろうかということが気になりました。皆さんは入っておいでになっていますので、わかって入ったかわからずに入ったか、偏差値で入ったか知りませんが、そこに大学があるからだという人もおいでになる。だから大学のニーズというのも意外にわかったようなわからない話で、何のために大学があるのかということすら、ややもすると怪しくなるときがございます。そういう中を通りながら我々としては今日に至っておりまして、先ほど第6回ということを行いましたけれども、第1回をここでやりまして、既にそれだけの年限がたちました。ですので、だんだんと俗に言う市民権を得てきたと、皆様からの御理解をいただけるようになったということで、大学の知財と行政と、あるいは地域住民とが一緒に大学のキャンパスの中で物を考える。そして大学のキャンパスの外へ出て実習を行うということ、そして教育というものは自分の知財を伸ばすだけではなくて、自分のやることが地域の皆様のためにもなると。これが大学の今日置かれている位置であると、学長をやっていますとそういうことばかり考えていまして、学部の先生方に総スカンを食っているところですけども、大学の改革をやろうというわけであります。

そこで、アドミッションポリシーという形で入学のときの問題、そして、カリキュラムポリシーがまだうまくいっていません。なかなか自分の授業科目を消そうという先生がないのです。新しい授業科目をつくりましようと言うのですけれども、これにも抵抗がございます。それから昔あったのが消えた学問というのがある。例えば、文科系の学問というのは消えているのです。それを何とか取り戻そうとすると、一遍消えたものはなかなかもとに戻らないという話がありますけれども、難しい。

しかし、今、日本の教育の中で欠けているものは何か、そして今の若人を育てる、若い者を育てるときに何が一番重要なのかというときに、まさに消えた学問を再度復活していいのではないかとということで、それにもなかなかカリキュラムの中で実現はなかなか難しいと。全国の大学ともこの分野の改革を一生懸命されていますけれども、でき上がってくる名前が、一番典型的なのが片仮名学部であったり片仮名の学科であったり片仮名の専攻になりますといよいよわからないということで、私どもはできるだけ地域学という言葉わかりやすくしていくのに時間をかけながらもやっつけよう。

具体的には、うちの地域学部の学生さんたちは町の中に出ていったり、町村に出ていったり、過疎地に出ていったりして学びながら、最後はディプロマポリシーでございまして、大学としましては今まで教育して輩出するだけの立場から、やはり世の中で働ける場所を

つくっていくのも大学の使命と思っております。ですから、大学の先生方にも地域へ出て
いって、地域貢献と言っていますけれども、企業を興したり、あるいは自治体の中で、私
どもがこうしてつくっている地域学の知識を使って活躍できる場所をつくっていこうとい
う形で頑張っているところでございます。今の学生さんたちはその創成期におられます。
ですから、いつでも前には道が開けているわけではないということを考えていただいて、
ぜひ切り開いていただきたいと。高村光太郎の話になってしまいますけれども、本当に前
の道を開くことが皆さんに今、期待されているところでございます。地域学を学問として
いろいろ言いますが、大学の先生は英語がないといけないと言うのですね、ただリージョ
ナルサイエンスというのか、私どもは地域学をインターナショナルサイエンスというのか、
あるいはワールドサイエンスというのかというので、鳥取大学では世界の地域という言葉
がございしますが、そういう問題と、それからきょうもテーマに上がっておりますまちづく
りという言葉がありますが、このまちづくりがまた難しい。地域学も難しいですけれども、
まちづくりとは一体何かということで、シャッター通りになった店のシャッターをあける
のがまちづくりなのか、もっと違う観点から物を見た方がいいのか、そして過疎地、少子
化、いろんな社会現象の中で地域学の果たす役割というのがいろいろと出てくるだろうし、
それにはいろんな研究が要るだろうと。そういう意味で、この会がますます盛んになりま
して、新しい学問を創出していく、新しい体制を創出していく、新しい価値を創出してい
ければ、大学としてその機能を果たしたことになるだろうと思っております。

そういう意味で大変期待を申し上げますので、いろいろと御検討いただきますこ
とをお願い申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうご
ざいました。（拍手）

○鳥取大学（渡部） それでは、ここで本日の日程と資料を確認したいと思います。

皆さん方のテーブルの上に本日の午前と午後の資料一式が配られております。中にアン
ケート用紙がありますので、出していただければと思います。アンケート用紙の問い3の
ところに本日の日程にかわるものがありますけれども、まず午前中は記念講演会で「地域
学の未来」というテーマでお願いしております。午後は1時からシンポジウムで「大学に
何ができるか」ということです。シンポジウムが3時に終わりますけれども、しばらく休
憩を入れた後、鳥取大学や金沢大学の学生のポスターセッション、発表、それから地域連
携関係の紹介展示がございします。この紹介展示は、この部屋を出ましてトイレの横にあり
ます第2会議室というところで昼休みも行われておりますので、ぜひごらんになっていた

だきたいと思います。

それでは、基調講演のレジュメがA4判で1枚入っていると思いますので、そちらの方をお出してください。

ただいまより基調講演「地域学の未来－日本学術会議地域研究委員会からの提言」と題してお願いをいたします。

基調講演に先立ちまして、御講演者について鳥取大学地域学部の山下が御紹介を申し上げます。

○鳥取大学（山下） おはようございます。地域政策学科の山下です。今日、私たちの研究会のためにわざわざ奈良県からお越しいただきました碓井照子先生を御紹介させていただきます。

碓井先生は、お手元の資料にありますように、現在、奈良大学文学部地理学科の教授をされております。御専門は地理学で、主に地理情報システム、いろいろな地域情報をコンピューターなどを駆使して表示したりするような分野の先駆的な研究者であります。それとともに、そのGIS学会の会長も務められました。今日のお話は、そういった碓井先生の地理学者としての御専門とは別に、もう一つの大きなお仕事であります日本学術会議地域研究委員会副委員長として御活躍されている点からのお話をいただくことになっております。日本学術会議といいますと、新聞などで時々目にする組織ではありますが、なかなかなじみのないものだと思いますので、そちらの方も簡単に御紹介させていただきます。

日本学術会議は、全国に80万人いる研究者の国会という言い方もされます。全国から会員が200名出て、国の学術政策等にさまざまな提言をしていく役割があります。その中に30の研究分野があるわけですが、碓井先生はその中の地域研究委員会の副委員長をされております。この2010年4月に日本学術会議が、その資料にありますような日本の学術からの提言2010というものを公表したわけですが、その中の地域研究委員会からの提言の中心的な執筆者として、今回その内容を皆さんに御紹介いただくことになっております。

今日、お忙しい中、奈良から来ていただきまして、風邪を召されて声がかすれているということも伺っておりますが、いろいろな充実した内容をお聞きすることができると思いますので、最後までよろしくお願ひしたいと思います。（拍手）

○奈良大学（碓井） ただいま御紹介いただきました奈良大学の碓井です。ちょっと風邪を引いておりまして、非常に悪声になっておりますが、まことに申しわけございません。

それでは、「地域学の未来－日本学術会議地域研究委員会からの提言」ということで、2時間弱お話をさせていただきます。

日本学術会議は、ことしの4月でございますが、学術からの提言2010ということで、幾つかの提言を出させていただきました。その提言に関しましては、日本学術会議のホームページからダウンロードができますので、そこからダウンロードをしていただけたらなと思います。

それでは、私どもの提言は日本学術会議の提言のどの辺りに記載されているのかと申しますと、まず最初に日本学術会議全体としての提言があるわけでございます。その後、課題別に提言がつくられております。例えば、「21世紀の教養と教養教育」であるとか、「持続可能な世界の構築のために」という、日本学術会議の活動全体にかかわる重要なテーマに関する提言が作成されております。そしてそれと並行いたしまして、30の分野別委員会ごとにその分野に関する提言が作成されております。今回、私がお話をいたしますのは、日本学術会議の中にある30の分野別委員会のなかの地域研究委員会が作成した提言に関する内容でございます。日本学術会議の組織は、第1部、第2部、それから第3部に分かれております。第1部というのは人文・社会科学、それから第2部というのは生命科学、第3部は自然科学でございます。その中に30の分野別委員会というのがございまして、その中の一つに地域研究委員会というのがございます。その中で私どもがこの地域学を取り上げたということになります。

しかし、きょうの講演で最後のところでお話ししたいのは、この地域学という学問、あるいは学問の領域は、地域研究委員会よりもより大きなフレームワークになると考えていることでございます。しかしそれが現在、ないということは、まだまだこれから日本学術会議の学問に関する30の分野別委員会の構成が大きく変わっていかなければいけないということでございます。そういうことも含みまして、今回、私どもが出させていただきました地域学に関する提言を、詳しく紹介させていただきたいと思います。

地域学に関する提言の内容がインターネットからダウンロードできますし、きょうはこの提言に記載された文章をパワーポイントの方へコピーしてお話をしようと思っております。地域研究分野の展望では、9つの提言を出させていただきました。その中の地域学部に関係する提言は、主に私ども地理系のところで書かせていただきました。地域学は以前から非常に重要な学問分野であると認識しているわけでございますが、なかなかまだ新しい分野でもございますので、日本全体がそこまでまだ意識が向上しておりません。しかし、

逆に言いますと、ですから鳥取大学の場合はその最初のスタートとして日本における歴史的な意義というものは非常に大きいのではないかと感じておりますし、私も今回ここでこのようなお話をさせてもらうことが光栄なものであると感じているわけでございます。きょう、私の考えも伝えたいと思ひまして、少々、文章が長いスライドでございますが、聞いていただけたらと思います。地域学部に関する提言はこのように書かせていただきました。

まず、日本の国土のあり方は大きな転換期を迎えております。その一つは地方分権の推進、その中で地域の個性を重視する、地方行政を担う人材の育成が非常に重要になっております。日本の地方行政の歴史の中で非常に大きな転換期を今迎えているわけですが、その中で地域の現状を深く理解し、国際的な視野に立って、地域の活性化を推進できる政策立案能力を持った人材の育成、これが今、地域に求められているのではないかと。そして地方大学というのは、その拠点として地域に多大な貢献をしていく、その要にあるのではないかと。しかし一方で、地方大学は財政的にも非常に厳しくなり、本来、一番人材を育成しなければならないところが今、経済的に非常に厳しい状況になっているわけでございます。私も奈良という地方におりますので、そういう現実を非常に強く感じております。

ですから、地方の大学というものがもっと大きな力を持たなければいけないのではないかと。地域の政策、教育、文化、環境の視点から地域の諸課題に取り組める人材育成、これを目的としている地域学部というものをもっと全国で推進させなければならないのではないかと。思ひまして、このような提言の文章を書かせていただいたわけでございます。しかし、地域研究委員会の9つの提言すべてに地域学部のことを記述しているというのではございません。その中で地域学部に関係する提言のところは、地域の設定の考え方と方法というところに関係しております。

これはなぜかといいますと、この地域研究委員会が30の学問分野の一つとしてなぜ20期の日本学術会議に設置されたのかということにも関係いたします。地域研究委員会は、本来、地理学・エリアスタディ・文化人類学の複合領域であるということで、他の分野別委員会である例えば社会学委員会、歴史学委員会、経済学委員会、経営学委員会などの単一の学問分野の分野別委員会とは、ちょっと異質であることをお話ししたいと思います。地域研究委員会の中で私が関係しております地理学、これも非常に重要な学問分野でありながら今まで、学問の人文社会科学と自然科学という二分法の中で文理融合の学問としての

地理学が、少し低く評価されていたところがあるのではないかと思います。私は、今、地理学が必要な時代が来ていますよということをここで申し上げたいと思っているわけがあります。キーワードといたしましては地域の多様性、地域づくり、地域政策、地域情報、地域教育ということでございます。

ですから、このような認識を持っておりましたので、地域研究委員会の中に私ども地理学の会員が選出されましたときに、私は地域研究委員会の中の分科会である人文・経済地理分科会に地域教育も含めることにしました。この地域教育というものに関しましては余りにも大きくて、ここの中だけではちょっと分類し切れない、非常に大きなものを持っております。そういうことも含めまして、提言の中でお話したことを少しずつ御紹介していきたいと思います。

まず、提言作成の背景でございますが、地域研究というもの、これが複合領域であります。では、この地域研究と地域学というのはどのような関係になるのかでございますが、私は地域研究より地域学の方が大きな枠組みではないかなと思っております。地域研究といますと、新しい分野ではございますが……。

○奈良大学（碓井） 地域研究と地域学の違いですか。

まず、地域研究というのは、学問のくくりとしてまだ新しいものでございます。ですから、その中で例えば民の立場に立つとか、それから後からも申しますが、住民をベースにした学問という視点が必ずしもすべてのこの地域研究の中にあるかという、必ずしもそうではありません。その辺の話をこれから少しお話していきたいなと思っています。地域研究という枠組みも新しい学問分野のくくりとして試みとして日本学術会議に20期からつくられたわけでありまして。地域学という学問のくくりは、現在の日本学術会議の30の分野別委員会の中にはまだありません。ですから私としては、むしろ地域学という大きな枠組みの中に地理学が入った方が自然ではないかなという話をきょうさせていただくわけがあります。

その地域研究の中に張っている学問分野というのはどういうものかと申しますと、まず現在の世界が非常に多くの点で世界史的転換期に直面しております。その中で国民国家中心的なモデルに固執するのではなくて、もっと新しい形で、その国民国家にかわるような枠組みとして地域というものを考えていこうというのがまず一つ根底にあります。ですから、国家というものからもう少し地域という、これはイスラム圏の地域だとか、もう少し大きい意味での地域でございますが、地域でもいろいろスケールがありますので、非常に

大きな地域の枠組みと考えていただけたらいいのですけれども、そういう大きな枠組みの中で、とりあえず学問領域として入りましたのがエリアスタディーズです。それから人文・経済地理学、それから人類学、国際地域開発学、地域情報学の、この地域この分野で地域研究が構成されているのでございます。当初、地域研究として研究を一つのディシプリン {学問} にしようという動きもありましたが、いろいろ討論をしていくと、やはりディシプリンというものではない。一つのフレームワークではないかということになりました。学際性をベースにした特性があるということで、この報告書を出しましたときには複合分野という形でこれらの学問領域をくくる一つのフレームワークと考えたわけであります。

そのときに、ではこの地域研究が共通に持っている枠組みは何なのかということをしてディスカッションいたしまして、そのときは地域を対象にしているということが一つございます。それから、フィールドワークを非常に重視している。地域調査でございます。それから、非常に学際的な方法である。さらに、文と理の協働的アプローチ、この中の地理学は文理融合なのですが、文系と理系、それをジョイントしているところのアプローチに特色があるのではないかと。このようなスキームで現代の世界や社会が直面する難問の解決に取り組んでいく必要があるのではないかと。この提言を作成したわけであります。その中で私は人文・経済地理学・地域教育分科会の委員長としてこれに参画していったわけでございます。

それを少しわかりやすいように図示をしてみました。地域研究というのはエリアスタディーズ、後から話が出てきますけれども、これは主に外国の地域研究であります。それから人類学、それから人文・経済地理学、もう一つ地理学というのは地域研究の中にもおさまらなくて、地球惑星科学という自然科学の中に自然地理学というのを持っております。地理学は、こことリンクをしておりますので、私は学術会議の中のメンバーで地域研究には属しておりますが、地球惑星科学のメンバーでもあります。このように地理学というのはもともと文理融合でありますから、現在の学問体制の中では少し分断されてしまうという特性を持っております。地域情報学、これは情報科学とリンクいたしまして、主にはGISでございますが、地理学から発達したものでございますが、現在は非常に大きな研究分野として発展してきております。もう一つ、政治学、経済学、特にエリアスタディーズというのは政策学、いわゆる政治学との関係も深く、国際地域開発学というふうな分野がございます。ですから、この地域研究分野というのは最初から複合領域であって、地域学

と非常によく似た特性を持っているわけでございます。先ほど申しましたように地域研究というのと地域学がどう違うかというのをこれからお話ししていくわけでございます。学術会議の中で新しい学問分野として20期でこのようにくぐられました。しかし、その中で喧々囂々と討論をしましたが、やはりディシプリンとして一つの研究対象に絞ることはできない。それぞれの学問分野がある。地理学はどこに位置するのかといいますと、このように人文系でもあり理系でもあるというところに地理学が入ってまいります。地域研究は複合領域であり、一つのディシプリンにするには非常に難しいという結論が我々の中で得られたわけでございます。

では、日本学術会議はどのようになっているのかということで、学問の体系でございますが、まず第一部に人文・社会科学というのがございます。人文社会系です。その中に地域研究委員会が入っております。もう一つは生命科学（第2部）大薮があり、理工学の自然科学（第3部）がございます。自然科学の中には地球惑星科学委員会というのがありまして、地理学はここにも入っております。地域研究委員会の中には、このスライドのように8個の分科会がございます。それぞれ最初にどのような分科会をつくろうかということで、私どもは人文・経済地理と地域教育分科会というのをつくりました。そして、そのあといろいろな分科会ができ、最近、地理教育分科会というのを第1部（人文社会科学）と第3部（自然科学）を横断した分科会としてつくりました。多文化共生、紛争解決・災害復興のための国際貢献という分科会もございます。そして、第3部の地球惑星科学委員会の中、この中にはまだ沢山の分科会があるわけですが、地理学が属している地球・惑星圏分科会ほか幾つかの分科会がございますが、その中で地理系は地理教育分科会と地球・人間圏分科会、さらに、国際地理学連合分科会（IGU分科会）等を持っております。そして、地理教育分科会というのは私が会員活動の中で提案しつくったわけでございますが、そのときには、この日本学術会議の3部制（人文社会科学、生命科学、自然科学）という縦割り組織の中で人文社会科学と自然科学の両方に関係するのであるから、合同でつくってくれということをかなり申しまして、初めてそういう形で地理教育分科会ができ上がりました。

つまり、日本学術会議の体系というのは日本の学問体系をあらわしておりますが、非常に縦割りの的であって、学問の対象を中心に分かれているわけでございます。ですから、研究対象が人文、社会現象であれば人文社会科学というふうな分類になっておりますので、例えば政策科学をどこに位置づけていったらいいのか、行動科学はどこに位置づけていっ

たらしいのかということは、この中では消えてしまってわからなくなるという特性を持っております。私は最初から学術会議が3部制をとっているのであれば、新しいそのような学問の枠組みというのを複合領域としてどこかにつくらなければいけないのではないですかと言うのですが、なかなかそういう意見も十分反映されないまま来ております。しかし日本学術会議は意見を言いますと、それは何らかの形で反映されるという民主的な組織でありますので、私は言い続けまして、文理融合の教育、地理教育はそうでございますので、文の方も理の方にも合同でつくっていただきました。現在、4つの小委員会を中心に研究をしております。そういう意味では、日本学術会議にいろいろと意見を言って行動を起こすことによって変えていけるということは、当然考えられるわけでございます。私はこの3部制の中で4部をつくったらどうかということを言っているわけですが、縦割りの事務処理の関係で、それはなかなか難しいということでございます。後お話をいたしますが、地域学、それから地理学もそうですが、地域に関係する学問というのは従来の枠組みの中ではとらえられないものと思っておりますので、そこをもっと重視する必要があるのではないかなと思っているわけでございます。取りあえず、地域研究委員会のこの5分野について、少しお話をしながら我々の提言の意味を御理解いただけたらと思います。

エリアスタディー、人文・経済地理、人類、国際開発、地域情報学、これらの5分野は、まず地域を研究対象としております。ですから、地域研究ということでございますが、その地域観というものは非常に多様でございます。ですから、研究対象でもって地域を分けていくと地域学というのは非常に学際的になってしまって、その特性というところが少しわかりにくくなってくる可能性はあるのではないかなと思っております。

例えば、エリアスタディーというのはどんな学問かということをこの報告書の中から見ていただきますと、現代を中心とする世界の諸地域を対象にしております。そしてフィールドワークや学際的方法を駆使して、各地域、これは世界の各地域ですが、特性を総合的に研究する学問であります。もともと、大航海時代以降の西欧における植民地学、東洋学の系譜を踏んでおりまして、第一次世界大戦以降、米国におけるエリア・スタディーズの系譜につながるものでございます。もう一つの流れは、日本を中心に発展してまいりましたけれども、人文科学に重点を置いた基礎学的性格を持ったものとして、社会科学を中心に政策学的な性格が強い、そのような傾向を持ったものでございます。

このエリア・スタディーズ、それから、このエリア・スタディーズの地域観というのはどんなものなのかということを考えてみますと、まず主に外国の諸地域を対象としており

ます。米国や中国などの一国単位の場合もあれば、東南アジアや中東などと広領域に及ぶ場合もあります。また、EUとか東南アジア諸国連合など、特定の地域、これは世界レベルであります。新たな共同体を形成していく、その地域統合体、それをあらかず場合があります。その場合の地域を実体的な地域としてつかむときもございまして、地球上の机上のいわゆる地域の枠組みとして単なる地域区分でとる場合もありますが、その地域そのものには今言いましたような実態としての地域概念も入りながら、非常に重要な意味合いを持っております。これが地域研究の学問分野の一つでございまして。

では、文化人類学はどうかということでございまして、文化人類学は、ある地域における集団の生活様式や思考様式、これに非常にウェイトを置きます。そして、非常に詳細な調査をいたします。そしてその分析結果を比較して、人類の文化に関する理解を深め、さらに理論生成を行う分野である。これはその中で書いているわけですが、日本では、この民俗学というドイツから輸入されて開始されましたが、イギリス流の社会人類学、米国流の文化人類学が導入されるとともに、生態学から文明史観を展開するなど独自の発展を見せてきました。文化人類学の中におきましては地域というものも非常に重要でございまして、そこは人が中心になっておりまして、非常に細かな文化までも扱う、そういう詳細なフィールド調査をする、そこに地域というものが生きているわけでございます。

では、文化人類学の地域観は、この報告書から説明いたしますと、非常に小さな地域、例えば、ある村のある家族に入って、そしてずっと調査をするというフィールド調査が中心になっております。これは、文化人類学の方が書かれた文章なのですが、地域はそれ自体が最終的な研究目的ではなく、人類の普遍的な生活を解明するための手がかりと位置づけられているということで、文化人類学が持っている地域観というのはここにあるわけです。

次に国際地域開発学分野というのがあります。ここも地域研究の一つの分野として学術会議の中で言っているのですが、これは開発途上国の開発と開発協力にかかわる諸問題を研究する研究領域であるということで、その後、ここにもありますように開発社会学、開発人類学などの分野名称が用いられ、政治学、地理学、教育学とともに開発問題、開発教育となりますが、開発問題として研究がされてきました。

地域開発学の地域観というのをここにまとめさせていただきましたが、もともと経済学の一分野である開発経済学が主動して発展してきたが、実際の事例研究では現地の言語や文化、そういうものをいろいろ調べているわけでございます。他の人文・社会科学がとも

すると自明のように設定してきた近代国民国家の枠組みを、地域を設定することで相対化して考えるという知的特徴を持っている、というふうに、我々この展望の中でまとめているわけであります。

つまり、ここでいう地域というのはどういうものかという、いわゆる近代国民国家を超える新しい枠組みとしての地域という考え方がその根底にあるわけでございます。まず、地域研究のこの3つの分野は我々ディスカッションした中で国民国家の枠組みを超えるフレームとしての地域の視点の重要性、これをかなり前面に出しているわけであります。

それでは地理学というのはどうなのか。ちょっとこれらの地域観とはまた違う一つの特徴を持っています。では、私が関係しております地理学の地域観というのは何なのかということですが、地理学ではその性格上、伝統的に地域の実態調査、フィールド調査による実証的研究を非常に重視いたします。これは一面でエリア・スタディーズ、文化人類学、国際開発学とも関係があるのですが、その目的や分析方法は異なり、独自の発展を遂げてきたと言われています。我々はそれをこの展望の中でまとめているのですけれども。

そして、私どもが一番親近感を感じるのが地域学でございます。地域学部を構成する学問分野として、この鳥取大学も地理の先生がおられますけれども、地理学というのは文理融合でございますので、理学部、文学部、経済学部、地域学部、教育学部、今、工学部も入っておりますが、いろんなところに入っております。海外では地理学部という学部もありますが、日本ではそういうものはございません。地理学は文理融合の総合科学として人材育成をやっておりますが、御承知のように地理学は今、高校では必修になっておりません。ですから、このような文理融合的な教育というものが今、少し弱っているのではないかと思います。この地域学部、地域学部の中に地理学が入っていることは確かでございます。非常に親近感を感じている。では、なぜだろうかということを経験学部の定義と含めまして、少しお話をしていきたいと思っております。

これはグーグルアースです。地域が見えます。地理学はもともとギリシャ時代にさかのぼる非常に古い学問でございます。そして地理学の大きなテーマは人間と自然の関係についての意識を土台にしております。つまり、人間活動の舞台としての地表空間、これを地理学はその研究対象にしてきたということになります。そしてそれを地図という空間的な表現手法を用いまして、そしてその内容を記述することによって、地域地誌というふうなものをつくってまいりました。次に、地理学は人間活動の舞台としての地表空間、これをずっと学問の対象にしてまいりました。ですから、地域学というときに地域の概念として

地理学から得られた情報は非常に多いものではないかなと思います。そして、それが地域である。つまり地域というのは何なのかといいますと、人間活動が関係していないと地域というものは存在しない。地域というときには必ず地理学的には人間活動が何らか関係して舞台となした地表空間、これを地域と言っているわけであります。ですから、私が地域学と非常に親和性が高いというのは、私の理解が間違っていなければ地域学というのもこの人間と自然とのかかわりの中で、ある場所ででき上がってきたそういう総体、これを地域としてとらえますから、地理学と非常に近いわけでございます。

科学としての地理学は19世紀初頭のドイツで発達し、まず地域、そういう空間を対象にするということで地表にあらわれた形態を総合的に分析する学問、さらにフランス学派では環境という言葉を入れまして、環境に適応し、それを改変する人間とさまざまなスケールで地域を記載する学問というふうに、地理学もギリシャ時代からやはり古くからありますが、近代科学としては、学問の対象というものを非常に明確にし、さらにその方法のところにこだわるという形でこのような近代科学としての地理学の定義がなされているわけであります。現代の地理学は地域分析とそれに支えられた地域記述としての地誌をその中に持つとともに、自然地理学、これは地形学、水文学、気候学というものがありますし、それから人文・経済地理学、ここでは農業、工業、流通、都市、いろいろなものが出てまいります。そして、それらは系統地理と呼ばれますけれども、地図学、そして最近ではGISを含む文理融合の学問であるわけでございます。

このスライドは私がGISを使って奈良町のところの三次元をつくったわけですが、地理学にとってはこのように見える地域景観というのを非常に重視いたします。なぜこれがつくられたのか、その中における人間のかかわり、これを重視するわけであります。それをこのように表現する地図であるとかGISというのは地理学の技術生まれしました。地図学ではなく地図そのものは、人類の誕生期からあるとも言われていますので地理学よりふるいかもしれません。地理学は、地表にあらわれた形態を総合的に分析する学問であるということ、環境に適応し、それを改変する人間とさまざまなスケールの地域を記載する学問であること。その中のキーワードは土地利用であったり、気候の中でも都市気候であったり、単なる気候ではなくてヒートアイランドなどの都市気候であったり、あるいは災害であるとか都市化という何らかの形で人間がかかわっている事象、それを対象にしてまいりました。それを地域の記述・記載、地誌という形で表現したり、その中で地域の個性、それを地域性、ここが問題なのですが、それを何らかの形で記述し、地図として

表現する学問、地域学と大きく違うのはここから余り出てないというところがございますが。その地理学がGISを生み出したわけでございます。

そして、もう一つ地理学の大きな特徴は、空間を扱う分析手法、コンピュータマッピングを融合させたGISを発展させてきたということでございます。私はこのGISを日本で初期の段階からずっとやってきました。GISというのは、今はいろいろな学問の技術のベースにあり、工学もすべて環境学も皆使いますけれども、もともと地図を電子化するところから始まりましたが、その大きな目的は空間分析手法をどのようにしてコンピュータの中で実現するかということでございました。このGISというものが地理学の中で生まれていく中で、次第に地理学自体が変化してきたわけでございます。それは後からお話をいたしますが、政策科学としての特性も強化させ、地域政策分野でも地理学的な知見というものが重要になってまいりました。その点で、私は地域学というものに非常に関心を持ったということがございます。

人文・経済地理・地域教育分科会の地域観と地域学でございますが、まず地域の多様性と地域づくり、地域政策の立案という項目がございます。これはこの12ページでございますけれども、この中でグローバル化の過程で深刻化している地域問題、特に日本の地域問題に取り組んでいくことは、日本の展望の上では避けて通れない課題であります。ここでは地域が人間の自然への働きかけと関連しているという観点を取り入れて、さらに今後の日本の地域変化に影響を与える幾つかの制約を考慮して、日本の地域問題の解決と望まれる地域発展への方策を示してみました。これは地域学と非常によく似ているわけでございます。

それで、このスライドもその文章の中でございますが、人間が自然に働きかけて生存する過程でつくられてきたさまざまな農村、都市、大都市圏などの地域は非常に多様な性格を持つ。地域はさまざまなスケールを持ち、相互に重層的な関連を持つ。我々は地理学を習うとこういうことを痛いほど教え込まれるわけですが、同時にそれぞれの地域は多様な自然の中で人々が築いてきた歴史、生活様式ということを非常に重視しております。あるいは文化の違いで独特の地域的個性を持つ。これを我々は地域性と言うわけですが、これを記載する学問が地誌ということになります。その地誌をコンピュータベースにしたのがGISでございます。このような地域はそれを取り巻く自然への対応によって政治的な状況によって変化していきますが、その結果、地域内部の問題、あるいは地域そのものの存亡にかかわるような地域問題を生じる。これは我々が書いたわけでございます。

人間がつくり出してきた地域という考え方。地域は常に人間がつくり出す創成するという考え方。地域づくりは地域概念の根底にある人間と自然とのかかわりの行為の成果であるという考え方は、地理学がギリシャ時代からずっと長く培ってきたものでもございます。

その中で多様な地域諸課題がある。例えば地域の経済格差の問題、環境問題としての地域問題、大都市圏のひずみ等々、地理学でよく言われるものでございますが、特に中心市街地の空洞化、鉱工業の衰退・空洞化、限界集落の問題、このような地域的課題、これをどのように考えていったらいいのかというときに、地理学は社会経済システムの3つの変化というとらえ方を我々はいたしました。日本及び地域規模で大きく変わるエネルギー、これに対する考え方が変わってくる。それからもう一つは持続可能な社会経済システムが必要になるということと、もう一つは、地球レベルでの人口増加から人口減少への大きな転換であるということ。

以上のような地域問題を取り巻くいろいろな制約があります。それを受けて今後の日本の地域の方向とその向かうべき方策をどのようにしたらいいのかということを書いているわけでございます。今後はということですね。地方の拠点的な都市圏を中心とした地方分権的な地域経済の発展への方向が強まるであろう。地方分権への政策を実行していくと同時に、エネルギー利用の転換を見据えた地域イノベーションを推し進めていく地域主体の生産・生活の枠組みを形成していくことが大切であると。これは我々地理学者が求めたわけであります。

そして第2、それは地域再生と地域づくりであるということで、このスライドありますように中山間農村、ここで大事なことは、長い間に培ってきたその立地の優位性、その地域のあり方というものは、それは資源でありますから、それを認めつつ、そして大きな経済の枠組みの中で地域をどのように再生したらいいのか、そこに地域づくりというものがあるのではないかと考えております。

さらに3つ目には、住民の参加と協働による地域づくりで、具体的な地域問題を解決するためには政府、地方自治体だけでなく、民間や地域住民の参加や協働による地域づくり、それらに支えられた地域間のネットワーク化と連携、非常に必要であると。基本的には地域イノベーションが可能な地方の都市を中心に、周辺農村との経済的社会的連関のもとに地域の発展を進めていくことが重要である。

では、そのためにどうしたらいいのかということで、私どもは地域学、地元学というものを持っている重要性というものを痛感しているわけでございます。地理学と地域学、地

元学がどうかと言われまして、地理学というのは昔から研究対象は地域にやってきた学問でありますから、全く一緒というものではありませんが、大きなフレームワークの中では非常によく似た、あるいは親和性を持っている学問分野であるということと言えます。さらにもう一つ、文理融合というものを持ちつつ、いつも日本では、少し干されてきた学問でもあるということが言えます。そういう意味で、例えば世界史必修化の中で地理というものは要らないということで現在、地理の教員はどんどん減っておりますが、逆にそのことが地域嫌いの子供たちをつくっているということを我々、提言でもさせていただきました。つまり、地域調査をするという能力を持たない学校の先生方が地域調査を子供たちに教えることができない。つまり、子供達が地域を知るためには、高校の地歴科教育の中で地理の必修化が必要であると。

それで、今までは地理学の立場からどんどん申し上げたわけですが、私はこれをまとめる中で地域学部、その中の地域教育を、全部調べました。親近感を非常に感じるといいますか、ああ、これだということを感じたわけでありました。その地域学部が鳥取大学にあるということで、全国の地方大学、東京都も含めまして大学に地域学部ができる必要があるのではないか、そういう問題意識からこの提言書を書かせていただきました。つまり、地域学というもの、これは私もちょっと勉強させていただきました。鳥取大学のいろんな論文も読ませていただきました。そして私どもが各提言を書いて、そしてある意味でよく似たところがあるのかもしれませんが、地域学、地元学というものは一体何なのだろうか、その本質はどこだろうかというところ、やはり住民参加型の実践学という特性を有しているところではないかという結論に達したわけでございます。つまり、地元学、四日市学であるとかいろいろな水俣学とかございますが、地域から学ぶ住民主体の実践的学問ではないか。この学問の形というのは従来にはなかったもの。もちろん地理学もありましたが、地理学はこの実践というところは余り強くなかったわけでありました。もっとこの実践というふうなものがどんどん出てきた。地理学もそういうふうになっていかなければいけないと思っているわけですが、そういう意味でまず私はこの提言の中ではこのような実践学という特性を持っている地域学に関する提言をかかせていただきました。

私は、最近こういうことを考えております。つまり、地域学の未来とIT技術ということで、きょうの講演は地域学の未来なのですが、では、地理学は地域学にどのような貢献ができるであろうかということを以前から考えておりました。その中で私の専門といたしますのが、地理空間情報技術を扱うGISでございますが、この地理空間情報社会という

ものが現在、到来しており、地域をいろいろな形で見える化している。そしてその地域を身近に住民のものにするような技術というものが非常に進んでいるわけであります。一つはグーグルアースでありますし、電子国土でありますし、後からお話いたします・ジオグラフィーの世界でございます。

もう一つは、住民参加型GISと言われるものと地域学との関係でございます。これはいわゆる実際の社会、リアルワールドに対してサイバー空間という、いわゆる電子化されたリアルワールドをGISでつくりまして、その中の一つ一つの構成要素を地物（Feature：フューチャー）と考えます。例えば地物とは、道路であるとか建物というものですが、この地物をデジタル化しながらコンピューター上で現実とサイバースペースの間を行き来するわけでございます。GISとは、そういうことを可能にする技術でございます。

これは私がこの講演をする前に、まず鳥取県、これを統計GISのところから町丁目別に人口のデータをダウンロードし、GISで高齢者分布図をちょちょこっとつくったわけでございます。そうしますと、鳥取県というのは非常に海岸部に長くて、山間部というのはそれほど広くはないのだなという地形の特色とともに山間部におきましては65歳以上の高齢化比率が相当高いということが瞬時にわかるわけでございます。そしてさらに14歳以下の人口比率、これも数分でできちゃいますが、GISを使いまして具体的に地域がどうなっているのか、町丁目別に調べてみました。そうすると、やはり中心都市的なところには高いなということがわかりますが……。

それを今度はグーグルアースに重ねてみました。現在のGISのソフトはグーグルアースに重ねるKMLファイルを瞬時に変換して作成いたしますので、これを重ねてみました。そして、例えば山間部において今、問題になっている郵便局だとか、そういう基本的な機能というのは今後どうなるのだろうかということも含めて、では、郵便局がどうなのかということもGISで郵便局の分布図を作成し調べてみました。

これは先ほど言いました子供手当に関係する14歳以下の人口比率を計算し分布図にしたものです。これは先ほどの高齢者人口比率の分布図に少し透過をかけてグーグルの上に乗せました。これが郵便局であります。この赤っぽいところ、これはまだ高齢者人口比率が低いところですが、この黒っぽいところは高齢者人口比率が高くて、かなり人口が少なくなっている。そうするとこういう郵便局、今後どうなるのだろうかということが考えられます。このように、私は奈良において鳥取県からは離れておりますが、グーグルアースの上にこれらの分布図を重ね置くだけで何となく予想がついてくる。つまり、地域が抱え

ている大きないろいろな問題が見えてくるわけであります。こういう技術は非常に今、進んでおります。かといって、この地域が今、人口の減少という視点から見ると、非常に高齢化率は高いけれども、この地域から発信するような情報をこの中につけてクリックすると、そこに生き生きとした集落が見えてくる。あるいはここでつくられている特産物が見えてくるとなりますと、この地域の諸相というのはどんと変わるわけであります。つまり、私どもはITの技術を使いまして、このような地域が発信するすべというものを現在持っております。従来ですとなかなか地域からの声というものをつかむことができませんでしたが、こういうものを使いますと地域から発信ができ、それを遠隔地にいる私どもも使うことができるわけであります。そのようなものを世界レベルで今やっていますのがグーグルアースでございます。

このグーグルアースというのはデジタルアース構想ということで、ゴア副大統領のときに大きな政策として出たわけでございますが、その後、クリントン政権が交代してブッシュ政権になってそのGISの企業が少し傾くわけですね。そのときにグーグルはそれを買収いたします。それがグーグルアースに発展していくわけでございますが、そのグーグルアースが出てからどんなことが言われたかといいますと、ネオ・ジオという言葉が言われるようになっております。これはネオ・ジオグラフィー(Neo Geography)の略で、新しい地図のことを意味します。国や民族、どこにも属さない浮遊する台地であって、そこでは世界のすべてを受容し、互いに認め合い、尊重し合うこれをネオ・ジオ、ネオ・ジオグラフィーというのですね。これは坂本龍一さんのオリジナルアルバムの中に書いているわけですが、要するにネオ・ジオグラフィーというのは芸術家にも使用されるほど自由に活発なボランティア的な市民活動というふうなものを意味しております。そして、世界中に拡大する電子地図や電子地球、市民ベースの参加型の地図ベースの活動を意味しているわけでございます。

では、アメリカにおいてこのネオ・ジオグラフィーと従来のジオグラフィーはどうかといいますと、このネオ・ジオグラフィーというのは従来の地理学よりは、新しい地理学という意味ではなく、新しい考え方の地理というものであります。新しい地理学の体系ができたという大げさな意味ではありません。ボランティアド・ジオグラフィック・インフォメーション、という意味です。従来、地図は、政府や専門家が作成しましたが、地図を住民ベースで作成しようという考え方が強いわけです。勿論、地形図のようなベースマップまでボランティアで作成するというものではありません。その背景には、国土空間データ基

盤という政府が作成した国土の電子地図のプラットフォームがあって、その上に国民が自由、闊達にボランティアにより様々な情報を載せ、住民ベースの地図を作ろうという考え方です。ジオスペシャルウェブ（Geo Spatial Web）とかジオアウェアネスウェブ（Geo Awareness Web）だとか、そしてユーザーが自主的に参加して、そしてオープンで自由に闊達な、そういうコミュニケーションのプラットフォームというものです。つまり、そういう意味をあらわすものとして広がる参加型地図の世界という言い方がございますし、それからコラボレーティブマッピング（Corroboration Map）とかサイバークルトグラフィー（Cyber Cartography）とかいう、いわゆる従来のカルトグラフィー（地図学）というふうなものが住民ベースの、つまり参加型のという地図学に今、大きく変わっているわけがあります。地理学自体も我々が習ったときのオーソドックスな地理学から、今、次第に変わりつつあります。そのときに地域学という、この参加型の考え方というのは非常に重要なものを持っているわけでありまして。ボランティアド・ジオグラフィック・インフォメーションと申します。

これは国土地理院がつくっている電子国土でございます。それぞれのサーバーの中に自分の好きなデータを入れておきますと、国土地理院が提供するこの電子国土サイトを使いまして、別に地図は買わなくても自分の情報を発信することができます。今度、今、このスライドでは、ベースマップは、2万5,000分の1に相当する2万5,000レベルの電子地図が出ておりますが、今後数年の間に、2,500レベルで市町村が表示されるようになります。さらに、基盤地図情報というのは道路などに関しましては500レベルになってまいりました。例えば豊中市などの場合は最初から500レベルの地図が、電子国土で表示されています。

要するに地図の中にいろいろな情報を入れていくという、つまり地図がコミュニケーションの基盤に変化しているわけでありまして。つまり、住民参加を応援するようなツール、その技術というものがいろいろとところで開発されてきております。これは国土空間データ基盤として作成されている位置の基盤情報としての基盤地図情報、国のインフラとしてつくられている地図を、あらわしております。2007年に制定された地理空間情報活用推進基本法の中で、全国の地方自治体と国が連携いたしまして、基盤地図に関しましては2,500レベルより精度のいいものを作成しております。現在、国は2万5,000レベルの電子地図を国土全域作成し無料配信サービスをしていますが、近い将来には2,500レベルの非常にいい精度の基盤地図情報がつくられ、それが全部インターネットで無料で

配信されるわけであります。

ことしの9月のG-EXP0で、この基盤地図情報がマイクロソフトのエクスプローラーに入ることに関するシンポジウムがあります。つまり、パソコンを開くとそこに地図が出てくるといふ時代が来ているわけであります。そうしますと地図を通して地域というものが生々しく見えてまいります。さらにそれが三次元地図になって表現できるし、そこにあるデータ自体はインターネットから自由にダウンロードできる。それを使いながら地域のいろいろなことを解析し、そして地域政策につなげていこうという時代が変わっていくわけでございます。

参加型の地図の利用に関しましては、ウェブGISの発達ということで従来からございます。これをPP-GISと言うわけでございますが、よくあるのが、このような子供たちの危ない箇所を地図にかいて、そしてこれを共用することによって、行政にこの場所にガードレールをつけていただきたい、あるいは街灯をつけていただきたいということをや るわけであります。これも何が重要かという、子供たちが地域を回って地域のいろいろな問題点を見つけてきます。それを地図上にクリックして情報を配信するだけで行政の方がそれをつかまえてくれるという、これはいろいろなところでされている参加型GISでございますが、もともとはカキコまっぷから発展してきたものでございます。1990年代後半に開発され、現在はこれが地域調査であるとか都市計画であるとかいろいろなところに入ってきておりますが、考え方の大事なところは住民がみずからの地域を知ることによって、それにGIS上でXY座標を付加することによりそれが行政の方へダイレクトに行くという仕組みができ上がってきたということであります。これは地域参加の一つのあり方であり、子供たちがこのことを学ぶことによって地域のいろいろな問題点をもっと理解していけば、地域の実情をよく理解していくことができるわけでございます。そのような技術もGIS、電子地図、さらにそのインフラとしての基盤地図情報の地図の整備によって、現在はかなり可能になってきております。

ですから、この地図というものが一つのプラットフォームとして地域というものを見える化させてくれます。その中で我々はいろいろそれにアクセスする技術ができてきたということでございます。その一つが安心安全マップというものでございます。

特に、日本は1995年の阪神淡路大震災後から国土空間データ基盤政策というGIS政策は始まるわけですが、アメリカでは1993年に電子政府政策というのが始まります。e-ガバメント政策であります。このe-ガバメント政策の中に国土情報基盤と

いうインターネットの整備とその上のコンテンツ整備というのがあります。それが1994年、NSDIという形で、国土空間データ基盤の整備が始まるわけであります。日本でもこの国土空間データ基盤の整備、つまり電子国土の基盤でございますが、それが1995年、阪神・淡路大震災以降、広がってくるわけであります。そういう中でデジタル地球であるとかデジタル地域社会政策というのが出てまいりまして、ITを使って新しい市民参加型社会をつくろうという大きなうねりがアメリカを中心におこります。そしてこの政策の考え方が日本にもそれが入ってくるわけであります。しかし、なかなか進まなくて、現在でもまだまだその途上段階ではございますけれども、既にその1996年から米国のGISの国立センターではPP-GISワーキングが行われ、都市計画グループウェアに関するシンポジウムが1998年に行われております。

つまり、これはどういうことをあらわしているかといいますと、もともとGISというのは地図の電子化の技術から発展してきたわけでございますが、このウェブ技術とつながることによって、それは参加型のツールへと大きく変化してきたわけでございます。現在どうなっているかと言いますと、地図がコミュニケーションの基盤へと進化しております。その一つがデジタルアースであり、デジタルジャパンというものでございますし、その背景には地理空間情報技術の大きな発展があるわけでございます。GIS、ウェブGIS、GPS、リモートセンシングという大きな技術の発展があつて、これをさらにどのように使っていくかということが現在、大きなテーマになってきております。

私は何を申したいかといいますと、地域学において住民参加型のツールというものが、地図をプラットフォームとするようなそういう新しい動きが、もうどんどん出てきている。その中で地域が見える化してきていますから、いろいろなものが参画しやすくなっている。そのような新しい流れの中で地域学というのは大きなフレームワークとして非常に重要ではないかと思っているわけであります。

このスライドは私が奈良町、奈良の小さな町でございますが、その奈良町のところで電子地図情報とリンクした景観のスキャニングを行いました但那時に作成した奈良町の3次元マップです。

これはどのようにして作成したかといいますと、車に360度回転のスキャニングの機械をくっつけまして、地図と景観とが同方向でリンクできるような、そういうものをつくっております。これは単なる映像ではなくて、高さがはかれます。大きさも計測できます。完全な計測空間でありますから、景観をある意味で数値化しているとも言えるわけござ

います。個人情報の問題ありますが、やはりバーチャルで景観を把握することができる。このような方法ももっと使い方がいろいろあるだろうと思うわけでございます。

これはDEM (DEM)と言われるものでございまして、10 m間隔の標高点データでございますが、これはX、Y、Z、のデータで標高をちょっと立ち上げているだけであります。この上でこのように詳細な断面図が瞬時にできます。

ということで、これからどうなるかといいますと、いわゆる工事設計というものもこの上でやってしまうことになっております。そのために今、何が考えられているかといいますと、都市部におきましては5 mのX、Y、Zの基盤地図情報がインターネットから無料で入手できるわけであります。それらをGISに入れると、例えばその地形モデルがすぐできますから、どこがどれぐらいの傾斜を持っているかということもわかるわけでございます。

このスライドは、北海道で、私が講演に行ったときに使用したのですが、今この崩れたところですが、GISを利用して崩壊地形を3次元で復元しています。土木分野では、GISを使ってアセットマネジメントというのが進んでおります。今現在GISというのは土木工学の中でかなり入ってきているわけでありましたが、このように現場そのものをスキャンして計測してしまいます。そして、これを数値化して立体モデルをつくり、その地形解析を行う。そしていろいろと計測をしたり対策をとったりする。それはどういうことかといいますと、地域に対して何か働きかけをしようとするとき、我々はこういうツールを持ちましたからシミュレーションをしたり、コンピューターの中である程度、試行錯誤をしておいてから地域政策として実現するということが可能になっているわけであります。つまり、地域のサイバー実験室のようなものを持ってきたということになります。

このスライドは、道路のわだちの計測をやっているものでございますが、GISを使ってすぐ三次元で表現できる。これは建物、あるいは景観そのものをコンピューターで取り込むという技術でございます。まだまだ使いにくいところもちろんございますけれども、こういう技術というものは我々に新しい流れをもたらしているわけであります。これはモバイルコンピューター、モバイルマッピングシステム、これは大体1台1億ぐらいするのですけれども、これですっと走行しながらその地域全体をスキャンで撮ってしまいます。このモバイルマッピングの技術は、例えば自動車のワイパーが動いているとき、そこにセンサーをつけておきますと、ある地域のどこで雨が降ったかということ自動的にモニタリングするとか、地域の情報をいろいろな形で取り込むことができるようになってい

るわけです。そのような時代に我々は、地域住民、あるいは私たちの生活をよくするためにこれを有効に使っていかなければいけないことになります。

それでGISを含めましてその地理学がどのように変わってきたかということですが、当初はこのようにGISというのはツールか科学かとかいう形で、主に行政業務効率化、空間分析の意思決定支援システムでございましたが、現在ではこれが社会情報基盤になり、さらに世界、地球情報のプラットフォームに変わってきているわけであります。

このスライドは、先ほど言いました豊中市の地図を基盤地図情報サイトからダウンロードいたしましたものであります。私は今、GISを奈良大学で教えておりますけれども、基盤地図情報はしょっちゅう使います。従来ですと、これぐらいの地図ですと、地方自治体は作成に莫大な経費がかかり、一般国民が入手することは難しかったわけですが、今これはただ無料で国民に提供されております。そしてこれを使ってNPOが、地域計画とか、いろいろなものにこれを使って地域住民の生活を向上させ、地域を活性化してくださいということが地理空間情報活用推進基本法の中で書かれております。こういうものを使いながらどのようにして地域をよくしていくかということを考えていく必要があるのではないかなと思います。

つまり、進化する地図、地域の見方を変える。地理空間情報活用推進基本法ができました、このようにインフラとして地域が見える化する技術、あるいは地域を把握する、地域の情報をとるという技術は非常に整備されつつあります。それを有効に使いながら地域発展のために使っていくことが非常に重要ではないかなと思います。繰り返しになりますけれども、米国ではこういう形で地域政策が進んできました。

その中で地図も変わったわけであります。私は最初に地理学も変わってきたと言いましたが、地図も変化しております。何が変わったかということ、紙地図から電子地図に変わっただけで縮尺という概念はなくなりました。そして、2,500分の1という地図は2,500レベルの情報という表現に変わってきております。そしてさらにもう一つ大きく変化したのは、地物というふうな考え方が出てきたことです。まだ中・高等学校の教科書では地物については教えておりませんが、こういうものをきっちりと指導していかなければいけないのではないかなと思います。例えば道路だとか河川だとか建物、行政界、筆界というふうなもの、これは地球上に位置をもって存在している地域を構成している要素であります。それ以外に地震であるとか台風とか交通事故、大気汚染、これも地物であります。つまり、地域に起こっている位置情報を有しているものを地物と言います。

いろんなものを地物の単位を中心にしてそれらを全部コンピューターの中に取り組んでいく、そのときの一番、小さな要素、これを地物といいます。そして、その地物はそれぞれ入力精度が違いますので、基盤という考え方が必要になり、基盤地図情報というものが出てきたわけであります。

それと同時に、地図作成の考え方も大きく変わってきました。以前は地図を作成するときには、例えば道路は道路だけ、建物は建物だけというふうにレイヤーに分けて、そしてそれをこのように分けて重ね合わせて地図にしてコンピューターで表現したわけですが、最近オブジェクト指向に変わってきております。どういうことかといいますと、建物や道路や水系を地図のレイヤーとして考えるだけではなく、それをオブジェクトとしてとらえて、その建物と道路間の関係も含めたような、このような関連性の定義をしていくという形で、地図自体を完全なオブジェクトとして定義するようになってきたわけであります。地図学も非常に変わりました。では、こういうふうなものを我々地理学ももっと使わなければいけないということになるのですが、残念ながらまだ地理学は十分これが使いこなせていません。むしろ地理学に限らずこれからの学問というのはこういうインフラをいかに使っていくのかということが非常に重要になるのではないかなと思います。

そして、私はこういう地物モデルを研究しているものですが、現実世界にあるものはすべて関係を持って存在しています。つまり、人間が営んでいるこの地域というものは関連してないものはございません。それをコンピューターの中に入れるときに地物という考え方を使いながら、その関連性をオブジェクトモデルで定義づけて、そしてコンピューターの中にほうり込んでいこうという考え方が出てまいりました。それは私の専門であります地理情報の標準化の考え方ですが、これを一般地物モデルといいまして、これが地域そのものをあらわしております。つまり、地域というふうなものをどのようにしてデジタル化しようかというとき、地域の中にあるそれぞれの単位を地物と考え、その関連性を全部つけて、そしてモデルとしてデータ化していこうという動きに現在はなっております。それをちょっと難しいのですが、UMLというクラス図を使って、それを表現するわけがございます。このようなモデル論が背景にございまして、そして現実のこの地理空間、我々は地域社会と言いますが、それをどのようにしてコンピューターの中に入れていったらいいのか、その時に一般地物モデルというような考え方が出てきたのです。これ説明すると相当時間がかかりますので、こういう新しい地理空間の考え方があるとご理解ください。

そして道路、地図も従来のような電子地図ではなくて、このように一つ一つクラスに分

かれています。道路区間というものは橋とかトンネルとか覆いから成っているというふうな、親と子の関係でデータが作成されています。全体としてこの地域空間といいますか、地域にある構成物があるがままコンピューターの中にほうり込むという技術は、非常に発展してきているわけであります。これを使うことによって、私どもはまた新しい地域学といいますか、社会貢献ができるのではないかなと思っています。

では一体、地理空間情報社会というものが出ることによって、何が変わったのかということですが、まず、完全な国土の電子化が今、進んでおります。そして国土の管理も含めまして、安心安全な社会、もちろんそうでございますが、もう一つは皆さん方の土地・建物、これの簡便な電子化が進んでおります。先日も講演に行きましたが、登記業務の電子化が進んでおります。皆さん方、町を歩いていただきましたら、こういう基準点が200メートルに1点の間隔（街区基準点）で埋め込まれていることに気付かれていますでしょうか。それはこの土地、地籍情報の完全な電子化をするために政府がわざわざ3年間かけて埋め込んだものでございます。それと電子地図とをリンクさせるという形ですね。さらに、そこにありますように地方分権時代の新しい中央と地方の関係、この地理空間情報、特に基盤地図情報というのは、国だけがつくるということは一切書いてないのです。地方と連携してつくるとなっています。ベースは地方なのです。なぜかという、非常に大縮尺な地図ですから、自治体の日常業務の中で道路だとか建物だとかというのはつぶれたり壊れたりしているわけですから、その自治体の日常業務の中でつくられてきた地図を国は集めて全国にシームレスにして発信するという考え方になっています。以前ですと、飛行機を飛ばして国がつくりますという感覚だった。そうになっておりません。この考え方は地方と国が連携してつくりましょう。つまり、効率よくつくるといいですか、税金をむだに使わないためには地方というものをすごく重視しているわけでございます。

最後になりましたが、20世紀と21世紀で何が変わるのかということでございますが、このようなリアルワールドに対してサイバー空間というものができます。そしてそれができることによって、従来社会科学は実践の学問と言われておりました。その実践を失敗すると、何か公害が起こったりしたわけでございます。つまり、政策も実践ですから失策も起こったわけでございますが、そういうことが起こる前にサイバー空間の中でいろいろなシミュレーションをし、住民の声を聞き、政策リスクを下げることができるようになってきました。つまり、デジタルな電子国土等ができることによって、地域政策を考えるときに我々は幾つも実験ができるツールを持つことができるようになったわけであります。そ

のこと自体は政策リスクを少なくしますし、政策科学自体が非常に大きなツールを持ったということになるわけでありす。

G I Sはアメリカではどう言われているかといいますと、民主主義のツールだと言われております。G I Sを国・地方自治体で推進させるには、縦割り組織から横断的な組織を必要といたします。つまり組織全体が見えるわけで、道路をやっている人と河川をやっている人、同じ地図上にありますと見えるわけです。するとちょっと文句も言いたくなるということで、やっぱり見えるということは非常に重要だということになるわけでありす。業務の効率化はもちろん可能ですし、住民参加型の政策決定意思支援システムとしてこれから受容されていくのではないかなと思います。しかし、このようなG I S、まだまだ大学では講義も少なく、もっともっと勉強していかないといけないというところがございます。

ここで地域づくりと地域学について、私なりにまとめてみました。人間が自然に働きかけ、地域の英知により創造されてきた地域という考え方、地域学は実践の学問であるということ、地域学は本質的に人間参加型、住民参加型の学問であるということ。G I Sや地理空間情報技術は参加型学問としての地域学の未来を拓いていこうということ。

そして、まとめとして幾つかお話をしたいと思います。

まず、地域学の重要性は一体どこにあるのだろうかということでございます。実践の学として地域をよくし我々の生活をよくするという大きな目的がございますが、私は学問再編の大きなフレームワークになるのではないかなと思っております。鳥取大学地域学部の試みとして2008年に出されました論文を読ませていただきますと、地域学の定義がございます。これはなるほど私も非常に勉強させられましたが、この個人を出発点として一人一人の生の充実、生活の質の向上を地域という共同性との関係で考え、その実現を目指すものと書いておられます。まさに地域学そのものを端的にあらわしているのではないかと思います。そのときに大事な共同性を地域文化、地理学の場合はこれを地域性と言ってしまうわけですが、地域文化が重要です。そして、地域学の使命は、地域はどうあるのか、地域はどうあるべきか、地域をつくる、この3点であるということ。私も確かにそうであると思います。

さらにもう一つは、地域学というのは人間社会、自然社会の本質を空間に落として見ていく学問であると定義がされております。まさにこれも私もそうだと思います。地域学を担う主体は非常に多様性を持つ。それから、研究対象へのアプローチが非常に多様である

こと。地域観、社会の見方ですが、それぞれの考え方で確立し、相互交流して共有化する実践学と書かれていました。地域学は文理の視点が必要であると。地域学は本質的に政策学、それになるほどそうだと、全く一緒でございます。ですから、地域学の定義をすることになれば、やはりこういう定義というものが大きく出てくるのではないかなと思います。

さらにもう一つ、地域学部創設が国立大学でなされたことは、民間学へ、官学から地域学へという大きな流れをつくると。これも私は確かにそうだと思います。そして、住民の生活の質を重視し、地域の個性を尊重する社会発展、これを国民国家の枠組みを超えた地域の枠組みの中でやっていこうという地域学は、これから新しい学問の枠組みとして、大きなフレームワークとして非常に重要ではないのかと感じたわけでございます。

また、地域研究分野の方へ戻りますが、このときはどういうわけか地域研究とは書いてなくて、引用しているのですが地域学と書いてあるのですね。だから地域研究も地域学もごちゃごちゃになっているのだと思いますけれども、地域学の方が広いと私は理解していますが、地域学の構築は、学術の新たな体系化ということが書かれております。そして、文理協働的なアプローチ、地理は文理融合なのですけれども。

地理学と地域学とのかかわりをもう一度まとめてみますと、やはり地域概念というものは地理学がギリシャ以来長く持ってきたものでございます。それが地域学にやはり何らかの影響を与えていることは、私は確かであると思います。そして、その考え方というのは地域が自然と人間のかかわりで人間の活動のもとに創世されてきた地域の本質という点にあります。つまり地域というものは常につくられ続けなければいけない、そしてその中の存在である人間が常にかかわっていかなければいけない、そういうものであると。さらに、文理融合の学問という、そういうところを非常に地理学と地域学というのは非常に似ていると思いました。

そういう意味で、最後でございますけれども、人文・社会科学や自然科学の枠組みを超えて、地域学というのは文理融合の学問であり、人文・社会科学、自然科学という2分法では分類できない新学問領域を大きくくくることができるのではないかな。そして地域学のキーワードは、実践であったり住民であったり民学であったり住民参加であったり、国民・住民主体という思想があるのではないかな。地理学はここのところがちょっと弱かったということが言えると思いますが、最近は地域学の中で変わっていくのではないかなと思います。

私は最後に提案したいのですが、地理学もそうでございますが、日本学術会議の学問体系はどうしても対象別に縦割りになっています。その中に第4部の枠組みをつくって、ここに地域学的な大きなフレームワークを置くことによって、先ほど言いました上にあります実践、住民、民学、住民参加、国民主体という思想が息づいた学問体系というのが出てくるのではないかと思います。

私は地理の立場でございますが、ぜひこの鳥取大学の地域学、さらに全国の各大学に地域学部がつくられて、そしてその地域が地域の人材を育成しながら、地域がよくなっていく、そしてそれで日本がよくなっていくという道につながっていくことを期待いたしまして、私の講演はこれで終わらせていただきたいと思います。（拍手）

○鳥取大学（渡部） どうもありがとうございました。

30分ほど時間がありますので、先生お疲れとは思いますが、質疑応答の時間をとらせていただきますが、先生におかれましては少しお休みいただくか、卓上の方に水差しもございますので、どうぞのどを潤していただきたいと思います。

最初に、少しまとめて御質問等をいただきまして、先生の方から後でまとめてお答えをと思います。その際にできるだけたくさんの方に御発言いただきたいと思いますので、お一人大体一、二分でお願いできたらと思っております。それから、質問の冒頭には少し自己紹介なり、この大会への期待とか地域学へのかかわりのようなものを少し御紹介いただけたらと思います。きょうはこのフロアには鳥取大学の関係者はもちろんですが、全国の地域学と関連しました大学学部7つのところからの御参加もありますし、それから地域学に関心を抱いております住民、市民の方も多数参加と思います。

それでは、時間が短いので、早速質疑の方に入りたいと思います。どなたかございますでしょうか。

○会場発言 今、高校で地理とかないのですか。

○鳥取大学（渡部） しばらくお待ちください。

そのほかにもございますか。

では、会場係の方がマイクをお持ちしますので、今お二人挙がっておりますけれども、あと数人は可能だと思いますので、よろしくお願いいたします。

2番目に参りますので、ちょっとお待ちください。

○会場発言 はい、どうぞ。

○金沢大学（佐川） こんにちは。私、金沢大学から参りました佐川と申します。専門は

地理学ではございません。

地域学の可能性について、地理学、特に先生の御専門の地理情報ですね、ここから説明していただいて、非常にわかりやすうございました。ありがとうございました。

それで、お話を聞きながら次のようなことをどんどん感じていったのですね。正直に質問をいたしますが、1つはきょうは先生が地理の専門ということで、地域学と特に地理とのかかわりということでの御説明で、それ以外のところからの地理学へのという部分はなかったのですが、どこまで説明できるのかといったときに、幸福というものです、ハピネスというところに地域学がどのようにかかわるのだろうかということを感じながら聞いておりました。特に、地域情報、あるいはGISそのものが発展していく中で、そこに幸福みたいなものが地域の中の人々の暮らしとか生活とかそういうものが、どのように乗っけられていくのだろうか、乗せられる可能性があるだろうかと思いながら、同時に乗せられないものがあって、そのことの中に実は大事にしなければいけないものがあるのではないかと感じたのですね。質問でいうと、この地理情報というものがどんどん発展していく中で、大変いろんな可能性が広がっていくということは非常によくわかったのですが、同時に、実はGISが発展していくことによって失われていくものがあるのではないかと何か見落としてはいけないようなものもあるのではないかとこの疑問を持ちながら、正直聞いたのです。もしそういうことについて学術会議なり先生の立場から感じていらっしゃることがあれば、少し教えてほしいと感じました。

○鳥取大学（渡部） それでは、ほかにはどうでしょうか。では、後ろの方でございます。

○会場発言 済みません、西浦といいます。鳥取市鹿野町に住んでいるのですけれども、地理学と民俗学というのですか、関係みたいなものを深めて知りたいなと思ったのですけれども、先ほどの金沢大学の方も言われましたが、幸福ということの追求の中に宮本常一さんとか柳田國男さんがされてきた歴史的なものの発掘とか民族的なもの、土着性というのですか、そういうものの中から将来を見据えたような地域づくりなり地理から出てきた歴史郷土的な郷土の風俗というのですか、そういうものから見えてくるものというのとは何かないのかなと、つながりはどういう格好で伝わっていくのかなということを教えてもらえたらと思います。

○鳥取大学（渡部） あと一、二いただいたところで一度切りたいと思います。

前の方にお一人おられます。

○会場発言 私は、質問ではないのですけれども、実はこの鳥取大学にある湖山町の自治

会でまちづくり委員をやっている植山といいます。

鳥取市が市全体でまちづくりの計画をつくろうということできずずっと活動し始めていて、我々もきょうは5年、10年先の町づくりをどうするかということを考え始めているのです。ここ鳥取大学に地域学部というのがあるのは前から知っていました。ただ、私は地域学というのは何をやる学部か、はっきり言ってわかりませんでしたけれども、きょういろいろ先生から聞いてこれが非常に頭に残っているのですが、住民参加型の実践学という地域学部がある鳥取大学を持っている我々町内会として、これから町づくりをするに当たって、まさに今から具体的にやっついこうとする今、きょうこの講演を聞いたのは非常にありがたいと思っています。ということは、これから我々町内会は大学にもコンタクトさせていただいて、どういう形で大学が町づくり、具体的な町づくりに入っていけるのか、まだわからない部分がある、私自身もちょっとよくわからないのですが、しかし今、国立大学で地域学部はそれほどないと聞いています。そういういい環境にあるということを今、改めて認識しましたので、これからはちょっとどんどん働きかけていきたいなど。その結果、何が生まれてくるか、ちょっと答えはすぐ出ないかもしれませんが、楽しみだなと思いました。これは質問ではないのですが感想です。（拍手）

○鳥取大学（渡部） きょうの午後につながるような、また御発言でもありました。

そのほかにはございますか。

後ろの中段のところにお一人ございます。もう一度手を挙げてみてください。このあたりで、では一度切りたいと思いますので、よろしいでしょうか。

○会場発言 鳥取城北高校の福本と申します。

高校というよりも小中高という分野でお話しさせていただきたいと思います。地域学というものについて非常に興味、関心を抱いたわけですが、大学という部分だけではなくて小学校、中学校、高校という分野でどのように地域学発展のためにアプローチができるか。そういう手段が何かあれば教えていただきたいなと思います。

○鳥取大学（渡部） どうもありがとうございました。

では、先生、お願いいたします。

○奈良大学（碓井） それぞれ難しいテーマですので、どれぐらい答えられるかわからないのですが。幸福の問題というのは、これは学問の本質にかかわる問題だと私は思っています。私が社会科学を勉強いたしましたのは、自由論、人間の行動の自由の問題、これをどのようにしたらいいかというところから社会科学に入りました。そういう意味で、幸福

というのは学問の究極の目的であり、例えば地域を我々習いましたときには村落共同体的な地域で、個人がどのようにその地域的な束縛から自由になれるのかと、あるいはそれが社会とそれから個人の関係はどうかということは、我々が大学時代から大きなテーマになり、私自身が今でも人間の行動を自由にするとところに学問の本質があるのだといつも感じております。そういう意味からいうと、非常に漠然としていて答えにはならないと思うのですけれども、では、GISというのが、が進んでくることによって、そういう人間の温かさとかいうのですか、それから生々しさというのですか、それがどうしても情報化という中で消えていくのではないかと、あるいは取捨選択されてしまって、情報のないところに関しましては、そこはもう取り残されていくのではないかと、いろいろなことがあると思います。

ですから、やはりGISというのは一つのツールでございますので、それを扱う方の人間がどういう価値規範を持ってそれを扱うのかということが非常に重要なのではないかなと思っております。ですから、やっぱりすべて幸福の問題を、やっぱりその背後に哲学であるとか倫理学であるとか宗教学であるとかという、人文学と言われる分野ですが、その意味は非常に大きいのではないかと。

しかし、私どもがやっております地域だとかそういう地理学というのは、どちらかというとすべて客観的に何でもデータ化したいという、客観性をすごく追求するところでございます。しかし、それを判断するときにはいろいろな価値規範がありますので、やはりそこは人文学とそれから社会科学といいますか、それが協働してやっていかなければいけない。そのときにGISがどういうメリットがあるかという、これはよく言われたのですが、ある自治体でその人は都市計画の人ではなかったのですけれども、地図をGISに入れていくうちにだんだん見えてきたというのですね。隣が見えてきた。この見えるというところが非常に重要。つまり見えてくるから、これはおかしいのではないのと言ったと。そこで縦割りでしたから、問題があつて干されたと言っていましたけれども、その見えてくるというところが非常に重要なのではないかと。それを意図しなくても見えるような技術になっているというところが私は、GISの一つのよさではないかなと思います。

私も今の問題、幸福の問題は一番重要な問題ですので、それが答えになっているかどうか分かりませんが、やはり哲学であるとかそういうことが重要だと思います。ちなみに私の主人は哲学をやっております、やっぱり今、教養で哲学がなくなっているというのは物すごく問題が多いなといつも思っております。憲法もなくなっていますね。前のときは

必ず憲法を習いましたが、何か知らないけれども、教養教育が非常に少なくなっているのではないかな。逆に答えとしては、もう一度教養教育を復活させていただきたいなというのが私の一つの答えでもございます。

それから、いじめの問題がございました。これは非常に難しいといえますか、地理学はこういうところが今まで一番弱かったのですが、なぜかという、いじめの問題にしてもどこで何が起きているかわからないということがあったのですが、いじめられている者が、あるいは虐げられている人たちが何か発信する手段を持つということは非常に重要ではないかと。

○会場発言 聞いてあげたらいいのですよ、傾聴で。

○奈良大学（碓井） 聞いたらいいいですね、そうですね。

ですからGISが、ウェブGIS等で評価が高かったのは、自分が発信するツールを自分が持ったということだと言われています。それは地図を通してこうですよという形で、それは位置情報がついているだけなのですが、それを発信することによって情報の共有化ができていく、そのところがGISの大きなあれだと言われているのです。

ですから、虐げられたり、いじめられたりした人たちが何らかの形でそれを発信し、そしてそれをマップでも何でもいいのですが、そこに置くことによってたくさんのものが入ってきますよね、そうすると見えてくるわけですよね。公害などでも、あれマップから始まりましたよね。あれは見えたわけですよね。なぜだろうと。そういうところが非常にあるのではないか。これも答えになっているかどうかわからない。きょうは難しい本質的な質問ばかりなので、もうそれには全部私では答えられないのですけれども。

それから民俗学ですが、地理と民俗学は非常に近いです。民俗学はどちらかというと、にんべんの方ですよ。にんべんの民俗学ですよ。これも例えば方言のことにしても、いろいろな道具にしても、それをヒアリングしながら語り部として聞くということ、これも一つですが、我々の場合はそれを地図に起こしてみても、どのように地域的な違いがあるのかということを見ているわけですね。方言地図であるとかいろいろつくるわけですが、そういう空間に一度それを落としてみることによって、もう一度民俗学のよさといえますか、その地域性というものがわかってくるというところでは、地理学と民俗学は非常に近いと思いますし、残念ながら私、学術会議の中に民俗学の分科会がないというのが、歴史の方にあるのですかね、もっと大きくあっていいと私は思っているのです。ですから、そういう足りないといえますか、本来ならもっと勢力多くあるべき学問分野がど

ういうわけか小さくなっているというところは現在あると思います。そういう意味ではそれは直していかないといけないなとも思っております。

それからもう一つ、高校は何でしたか。地域学発展のアプローチ、あとはよかったのですかね、私、最近、年とりましたので……。

○鳥取大学（渡部） 先生、この地域の地元の湖山の方の御発言と、それから高校の先生からは小中高の教育の中でどのようなというのがございました。

○奈良大学（碓井） はいはい。まず小中高の問題でございますが、地域を見るということとは、地域を調査するというのは地域を歩いて、少なくとも自分の目で足で確認することがまず原点にあるわけですね。そういう地域調査と言われたりフィールドワークと言われたりしますけれども、それが苦手な先生が今ふえているのですね。それはなぜかということを見ると、やっぱり私どもは昔、地図の読み方を高校地理で習ったのですね。皆さん方、ブラタモリをよく御存じだと思いますが、タモリさんの番組を見ていますと、ここは昔、旧家はどうか、扇状地だったとかということがぽっぽぽっぽ出てくるわけですが、その横にいる若い女の人はそれ何ですかといつも言うのですよね。習っていないのですよね。ですから、やっぱり必要な科目、地理も含めまして、世界史も日本史もこれは必修にすべきだなというのを痛感しております。ですから、地理がそういう意味で非常に選択者が少なくなったので、小学校の先生の地域調査の力量が大分落ちているのではないかということは、理科嫌いも含めまして社会的問題になっています。

○会場発言 昔はだから学校で工場見学とかどここの遠足とかでもするでしょう、それ今ないのですか、それ。

○奈良大学（碓井） 今、何かだんだん難しくなっているみたいなのですね。ですから、やっぱりこの地域調査というのですか、地域を歩くということと地域を見るということがもう原点なのですね。これは島根県でやっているのですけれども、限界集落とか、あるいは病院を閉じるとかいろいろありますね、そのときに従来はコンサルタント会社にやらせていた地域調査、これを住民ベースでやるという方向が今、出てきているのです。そうすることによって地域が抱えている課題なり疑問なり問題を住民が理解すると。そのことによって意思決定のところに判断が出てくるだろうと言われていています。そのときもGISは使われているわけですが、地域を調査するというのは原点ではないかなと思いますので、そういうことを地域調査の中心に据えて教育していただきたいなと、これは提言にも書かせていただきました。地域を見る、地域を調査するという教育をもっと進めるべ

きだということ。

それから、町づくりでございますが、これはこれから大いに鳥取大学が地域活性化のために、この地域学部のをさをフル活動して皆様方と一緒にされていくと思います。私はその地域学部のプレートがございますよね、あの前で写真を撮りたいなと思っているのですが、地域学部というのはここに初めてできたのですね。これはものすごく画期的なことで、さっきも申しましたけれども、日本の大きな学問の体系の中でも一つのスタートとして非常に重要なものであります。それを皆様方が一緒になって大きく育てていかれるということは私も期待しておりますし、私の大学にもつくりたいぐらいです。今後、期待しておりますので、頑張ってください。（拍手）

○鳥取大学（渡部） どうもありがとうございました。先生にはお風邪を引いておられまして、それから熱心な地域学のファンの方からの歌舞伎公演のような声援もありましたけれども、本当に難しいコンディションの中、いろいろありがとうございました。

きょうの御講演は、記念すべき第1回大会にふさわしい基調講演になったと思います。皆さん方にはぜひアンケートの中に質問とか感想とか、さらにお書きいただければと思います。会場の方々はまた後で午後の少しアナウンスをしたいと思いますので、ここで先生の方には御退席をということで、もう一度盛大な拍手でお送りいただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

では、どうもありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

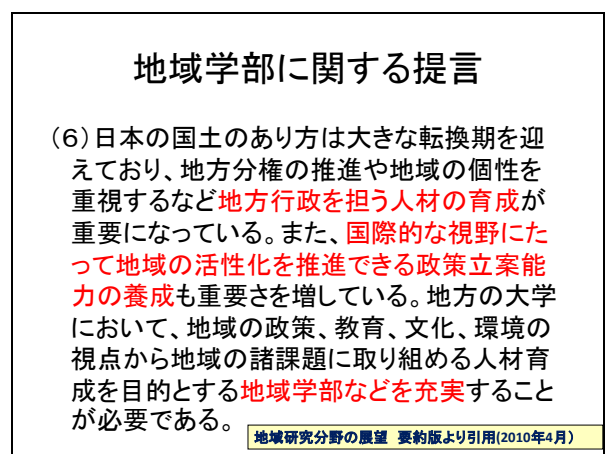
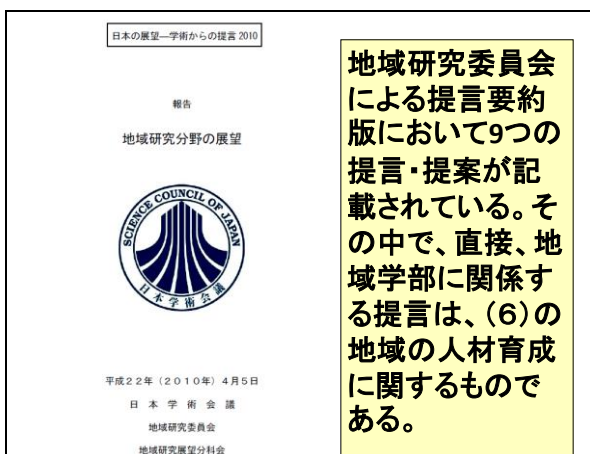
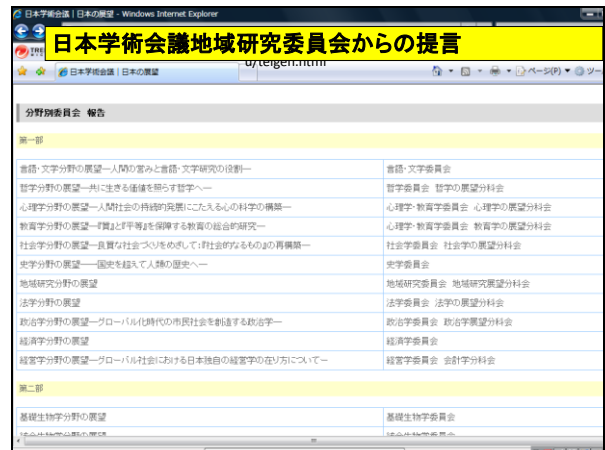
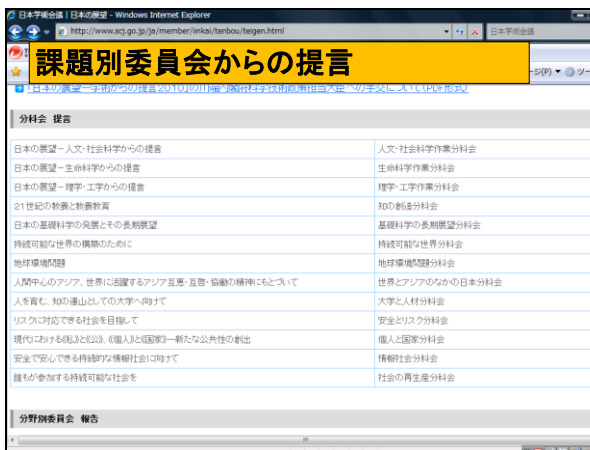
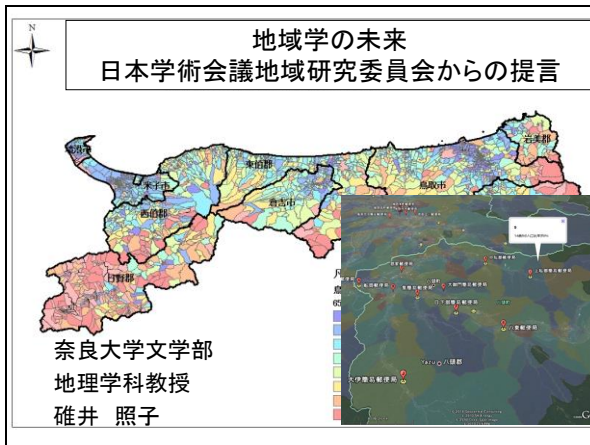
それでは、ここで少しアナウンスをさせていただきます。先ほども案内しましたように昼休み中に展示をしております。この2階、出ていただきまして真っすぐ行きましたところに第2会議室というのがありまして、地域連携活動等に関連した展示や3時15分からあります学生のポスターなども展示されておりますので、ぜひごらんいただきたいと思います。

それから午後ですけれども、午後は午前中よりもさらに参加者がふえて混雑が予想されます。できるだけ早目に会場の方にお越しくください。1時からですけれども、5分前ぐらいには御着席いただけたらと思います。その際、スタッフの誘導に従っていただければありがたいと思います。

3つ目ですけれども、配付されている資料は午後も使うものが含まれておりますので、午後も御持参いただければと思います。午後の席は改めて資料等が置いていない、あいて

いるところでしたら自由に座っていただいたり、今、座っているところでお座りいただいでよろしいかと思います。

最後ですけれども、アンケート用紙が入っております。午前中だけの参加、それから昼休みに展示を見ていただいておりますお帰りになられる方については、ぜひアンケートに御記入いただきまして、受付のところにありますアンケート回収箱の方に入れていただけたらと思います。それでは、午後の方もぜひお集まりいただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

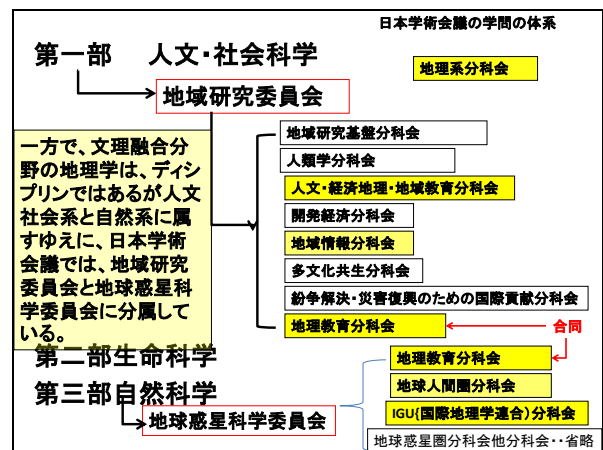
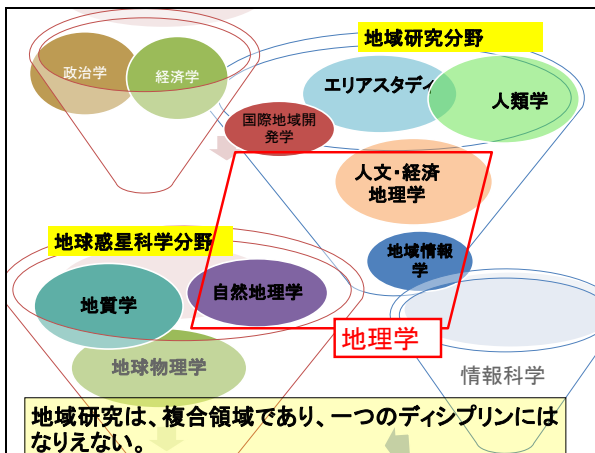


1	はじめに	1	地域学・地域学部・地域教育に関係が深い箇所
2	複合領域としての地域研究の現状	3	
(1)	関連学会の現状	3	
(2)	各分野におけるこれまでの取り組み	3	
(3)	エリア・スタディーズ分野	3	
(4)	人文・経済地理学分野	4	
(5)	文化人類学分野	5	
(6)	国際地域開発学分野	6	
(7)	地域情報学分野	6	
(8)	地域研究委員会関連分野の共通性と研究課題	7	
(9)	「地域」設定の考え方	7	
(10)	学際的特徴	8	
(11)	文理協働・融合的特徴	8	
3	地域研究の社会的・国際的課題	9	
(1)	日本社会への貢献	10	
(2)	日本の国際理解の推進	10	
(3)	日本社会の多文化共生の促進	11	
(4)	地域の多様性と地域づくり・地域政策の立案	12	
(5)	地域情報の蓄積と共有化	14	
(6)	地域教育の促進	15	
(7)	国際社会への貢献	16	
(8)	世界的文化遺産・史資料の保存・活用	16	
(9)	地域研究に基づく紛争研究・災害復興研究の推進	18	
(10)	国際研究協力への日本の貢献	18	
(11)	持続可能な発展と地域・文化の多様性・共存	21	
(12)	若手養成の課題	23	
4	議員	25	
<参考文献>		26	
	地域研究分野の展望	目次より引用(2010年4月)	

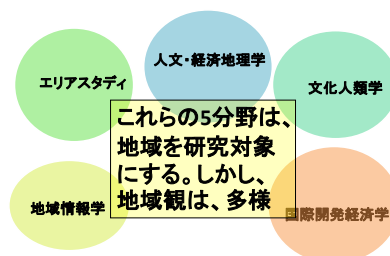
提言作成の背景と複合領域としての地域研究

現在の世界は、地球環境の危機、国際的金融危機、グローバル化に伴う国内外での格差拡大、地域紛争やテロ活動の頻発、ひとの国際移動の活発化にともなう「多文化共生社会」の模索など、**多くの点で世界史的転換期に直面**している。しかし、日本における学術の現状は依然として西洋中心で、**国民国家中心的モデルに固執し、新しい課題に十分対応しきれていない**。それ故、**エリア・スタディーズ、人文・経済地理学、人類学、国際地域開発学、地域情報学の複合分野である地域研究は、様々なレベルの「地域」を対象としてフィールドワークや学際的方法、文理協働的アプローチを駆使することによって、現代の世界や社会が直面する難問の解決に取り組む必要がある**。

地域研究分野の展望 要約版より引用(2010年4月)



- ・ 地域研究の5分野は、すべて地域を研究対象としている。しかし、その地域観は、それぞれに異なる。



エリアスタディーズ

- ・ エリア・スタディーズは、現代を中心とする**世界の諸地域を対象**としてフィールドワークや学際的方法を駆使して**各地域の特性を総合的に研究する学問**である。元来、この分野の発展には、大航海時代以降の西欧における**植民地学**や**東洋学の系譜**と、第一次世界大戦以降の米国における**エリア・スタディーズの系譜**という、二つの流れが存在した。また、方法論的な面に注目すると、語学・文学・歴史学などの人文科学に重点をおいた「基礎学」的性格が強いものと、社会科学を中心とする「政策学」的性格が強い傾向の二傾向も存在してきた。

地域研究分野の展望 pp.3-4より引用

エリアスタディーズの地域観

- まずエリア・スタディーズの場合は、主として外国の諸地域を対象とするが、米国や中国などの一国単位の場合もあれば、東南アジアや中東など広領域に及ぶ場合もある。また、ヨーロッパ連合(EU)や東南アジア諸国連合(ASEAN)などのように特定の地域を基盤として新たな「共同体」を結成してゆく地域統合(Regional Integration)の場合もある。さらに、「地域」を実体概念と捉えるケースもあるが、分析上の操作概念と捉えるケースもあって、「地域」概念には多様性がみられる

地域研究分野の展望 pp.3-4より引用

文化人類学とは、

- 文化人類学は、ある地域における集団の生活様式や思考様式について現地の人々の立場に即して詳細に調査し、その分析結果をさらに比較することによって、人類の文化に関する理解を深める、理論生成を行う分野である。
- 日本では、当初、民族学という名でドイツから輸入されて開始されたが、戦後、イギリス流の社会人類学や米国流の文化人類学が導入されるとともに、生態学から文明史観を展開するなど独自の発展を見せた

地域研究分野の展望 p.5より引用

文化人類学の地域観

- 人類学では、参与観察が可能となる「極小地域」に長期にわたるフィールドワークを行って対象住民の生活慣習や文化などを非文献資料を駆使して解明する特徴がある。しかも、調査対象の「地域」はそれ自体が最終的な研究目的ではなく、人類の普遍的な特性を解明するための手がかりと位置づけられる。

地域研究分野の展望 p.7より引用

国際地域開発学分野

- 開発研究(または開発学、Development Studies)は、開発途上国の開発と開発協力にかかわる諸問題を研究する研究領域である。英米では第二次大戦後の南北問題の出現と開発援助の開始を契機として始まった。
- 、その他の専門においても、開発社会学、開発人類学などの分野名称が用いられる他、政治学、地理学、教育学においても開発問題と開発協力を対象とした研究が行われている。

地域研究分野の展望 pp.6-7より引用

国際地域開発学の地域観

- 国際地域開発学の場合は、元来、経済学の一分野である開発経済学が主導して発展してきたが、実際の事例研究では現地の言語や文化、歴史に通暁したエリア・スタディーズ研究者と共同で進めるケースが多い。
- 他の人文・社会科学がともすると自明のように設定してきた「近代国民国家」の枠組みを、「地域」を設定することで相対化して考える知的特徴をもっている

地域研究分野の展望 pp.6-7より引用

エリアスタディーズ・文化人類学・国際地域開発学

- 他の人文・社会科学がともすると自明のように設定してきた「近代国民国家」の枠組みを、「地域」を設定することで相対化して考える知的特徴をもっている。



国民国家の枠組みを超えるフレームとしての地域の視点の重要性

地域研究分野の展望 p.8より引用

地理学の地域観

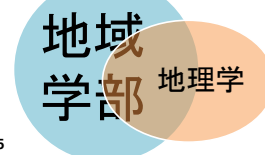
- 地理学では、その性格上、伝統的に地域の
実態調査(フィールド調査)による実証的研究
が盛んで、これは一面でエリア・スタディーズ
、文化人類学、あるいは国際開発学とも関連
があるが、**その目的や分析手法は異なり、独
自の発展が遂げられてきた。**

地域研究分野の展望 p.8より引用

地域学部を構成する学問分野とし ての地理学

- 大学などの研究機関においては、理学部、文
学部、経済学部、**地域学部**、教育学部に所属
している場合が多い。しかし、海外では「地理
学部」という学部も多く、地理学は文理融合
の総合科学として人材育成を担っている。

地理学は、地域学部だけでは
ないが、地域学部を構成する
学問分野の一つである。



地域研究分野からの提言 pp.4-5

- 地理学の源流はギリシア時代に遡り、**人間と自然
の関係についての意識を土台にして、人間活動の
舞台としての地表空間**に展開される自然、経済、
社会、文化等の側面を地域ごとに地図なども使用
して記述する地誌と、地形、海洋や気候など地球
科学的な研究の萌芽を内包していた。



- 科学としての地理学は、19世紀初頭のドイツで、
地表にあらわれた形態を総合的に分析する学問
として、そしてやや遅れてフランスで、**環境に適応
し、それを改変する人間とさまざまなスケールで
の地域を記載する学問**として発達した。現代の地
理学は、地域分析とそれに支えられた地域記述
としての地誌をその中にもつとともに、**自然地理
学**(地形学、水文学、気候学、植生地理学、地域
環境学など)と**人文・経済地理学**(研究対象では
農業、工業、流通・サービス、都市などの地理学、
研究手法では社会地理学、歴史地理学、計量地
理学等)の系統地理学および**地図学**、
GIS(Geographic Information System)を含む**文理融
合の学問**である

地域研究分野からの提言 pp.4-5

地表にあらわれた形態を総合的に分析する学
問(地形、集落形態・都市形態 地図, GIS・・

環境に適応し、それを改変する人間とさまざ
まなスケールでの地域を記載する学問
(土地利用、都市気候、災害、都市化・・・)

地域の記述・記載(地誌)

地域性、地域の個性を客観的に記述し、地
図として表現する学問

- また、**空間分析手法とコンピュータマッピングを
融合させたGIS**は、1990年代から地理情報学
(地理空間情報学ともいう)に進化し、全世界で
は、国土空間データ基盤という社会情報基盤を
支える技術として発展しており、日本では、2007
年に地理空間情報活用推進基本法が制定され
た。GISは、人文・経済地理学に**政策科学として
の特性も強化**させ、人文・経済地理学は、地域
政策分野でもその重要性が高まっている。

地域研究分野の展望 p.8より引用

人文・経済地理・地域教育分科会 の地域観と地域学

③ 地域の多様性と地域づくり・地域政策の立案

- グローバル化の過程で深刻化している**地域問題**、特に日本の地域問題に取り組んでいくことは、「日本の展望」を考える上で避けて通ることのできない課題である。ここでは、地域が人間の自然への働きかけと関連しているという観点を取り入れて、さらに今後の日本の地域変化に影響を与えるいくつかの制約を考慮して、**日本の地域問題の解決と望まれる地域発展への方策**を示してみたい。

地域研究分野の展望 p.12より引用

- 人間が自然に働きかけて**生存する過程で作り上げてきた**さまざまな農村、都市、大都市圏などの地域は、多様な性格をもつ。また、地域はさまざまなスケールをもち、相互に重層的な関連をもつ。
- 同時に、それぞれの地域は、多様な自然のなかで人々が築いてきた歴史、生活様式、あるいは文化の違いで、**独特の地域的個性**をもつ。このような地域は、それを取り巻く自然への対応、経済社会的なあるいは政治的な状況によって変化してゆくが、その結果、**地域内部の問題あるいは地域そのものの存亡に関わる地域問題も生じる。**

人間が創り出してきた地域(地域は、常に人間が作り出すもの)地域づくりは、地域概念の根底にある人間と自然とのかわりの行為の**成果**地域研究分野の展望 p.12より引用

多様な地域の諸課題

- 例えば、最近のグローバル化の過程で東京大都市圏の一極集中化の進展とその他の**地域との経済格差の問題**が顕著になってきている。
- 人口規模が大で密度の高い大都市では伝染病流行の危険が大きく、ゴミ問題、大気汚染、騒音、ヒートアイランド現象等の**環境問題としての地域問題**も重大である。
- 大都市圏の発展と超少子化が進み、大都市圏郊外地域の高齢化と人口減少も拡大している。

地域研究分野の展望 p.12より引用

多様な地域の諸課題

- 一方、多くの地方都市では**中心市街地の空洞化や鉱工業の衰退・空洞化**が進み、都市の存亡に関わる危機的な状況に追い込まれている。農村では中山間地域における人口流出と農地や森林の荒廃、それに**限界集落の増加**がみられる。また、合併等による住民サービスの低下に悩む広域市町村も同様の問題を抱える。

地域研究分野の展望 p.12より引用

社会経済システムの3つの変化と 地域問題

- 最近になって、これら地域問題に影響を与える基本的な状況や社会経済システムの在り方が日本および地球規模で大きく変わりつつある。第一にエネルギー利用を中心とした資源・環境問題が深刻になり、石油等の非更新資源利用増加の限界と太陽エネルギーなどの**更新資源利用増加への移行**が迫りつつある。

社会経済システムの3つの変化と 地域問題

- 第二に、このようなエネルギー利用の変化に対応した**持続可能な社会経済システム**が必要になる。
- 第三に、日本の人口減少は、少なくとも今後30年以上続き、人口高齢化はますます進展していく。また、大部分の開発途上国の人口爆発も終焉し、地球全体での少子高齢化がそう遠くない将来にやってくる。**地球レベルでの人口増加から人口減少への大転換**である。

地域研究分野の展望 p.12より引用

- 以上のような地域問題を取り巻く制約がある中で、**今後の日本の地域の方角とそれに向かうべき方策**がいくつか考えられる。第一に、今後の経済、人口およびエネルギー利用の変化を前提とした場合、現在の一極集中的な東京大都市圏がさらに拡大していくことは困難であろう。今後は、地方の拠点的な都市圏を中心とした地方分権的な地域経済の発展への方角が強まるであろう。**地方分権への政策**を実行していくと同時に、**エネルギー利用の転換を見据えた地域イノベーション**を推し進めていく**地域主体の生産・生活の枠組みを形成**していくことが大切である。

地域研究分野の展望 p.12より引用

地域再生と地域づくり

- 第二に、今まで人びとが営々と築いてきた個々の地方の都市や町、それに農村部、特に中山間地農村は、**それぞれ長い間に培ってきた立地の優位性や自然との共存を含めた存在理由と魅力**を持っている。それらを経済的理由のみで無に帰すことは、それこそ膨大なエネルギーと資源の無駄使いになる。これら**地域を再生すること、そのための地域づくり**が焦眉の課題である。

地域研究分野の展望 p.13より引用

住民の参加と協働による地域づくり

- 第三に、具体的な地域問題の解決と地域づくりには、すでに一部取り組みが始まっているが、政府、地方自治体だけでなく、**民間や地域住民の参加や協働による地域づくり**、そしてそれらに支えられた**地域間のネットワーク化と連携**が必要である。例えば、農林業と非農林業が雇用の面でも生産の面でも協業できるような地域づくりが求められるとともに、基本的には**地域イノベーションが可能な地方の都市を中心**にして、周辺農村地域との経済的社会的連関のもとに地域の発展を進めていくことが重要である。

地域研究分野の展望 p.13より引用

地域学・地元学そして地域学部の重要性

- 第四に、イノベーションを地域から巻き起こすには、その担い手の育成が必要である。そのために、**初等中等教育における地域学習を重視**した地理教育と歴史教育の連携を推進しなければならない。また、大学の研究・教育においては地域調査や地域分析を重視し、GISを活用できる人材の育成、**地域学・地元学**(じもとがく、水俣病問題解決のための水俣学が最初といわれており、地域を知り、地域から学ぶ住民主体の実践的学問)への**関心や理解**をたかめ、地域に愛着を持って**地域行政に参画できる人材育成**など継続的かつ実践的な取り組みが重要である。

地域研究分野の展望 p.13より引用

地域学部における地域での人材育成の重要性

地域学的重要性

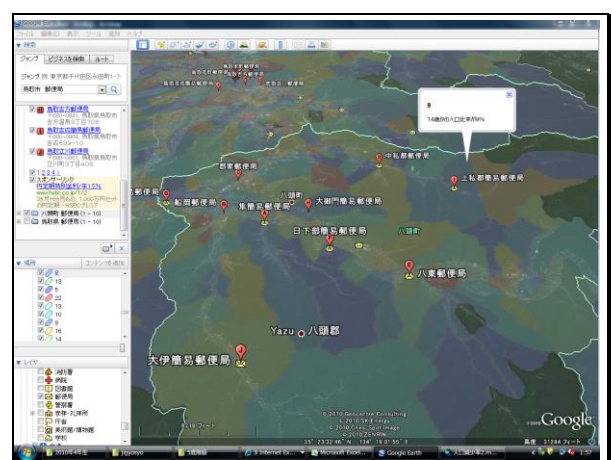
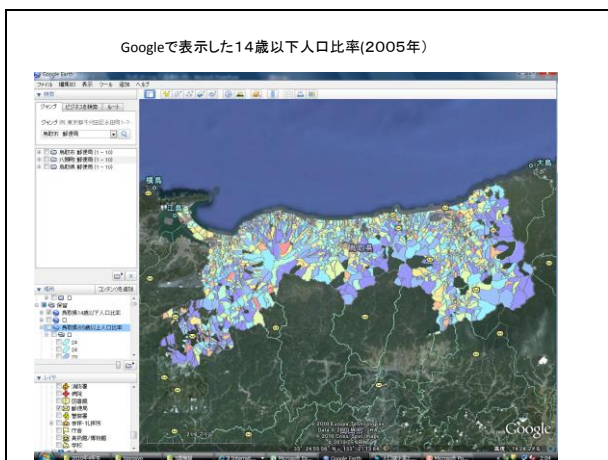
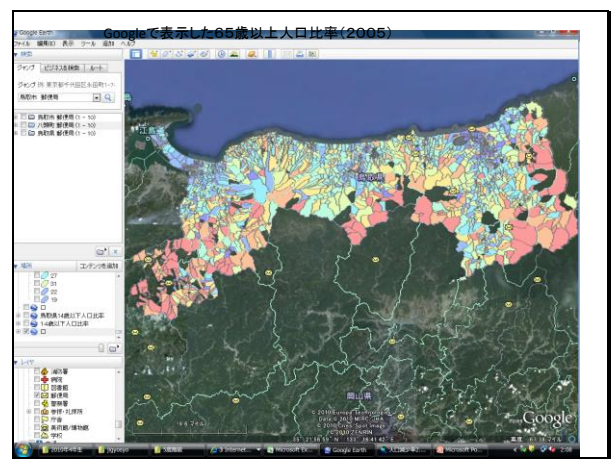
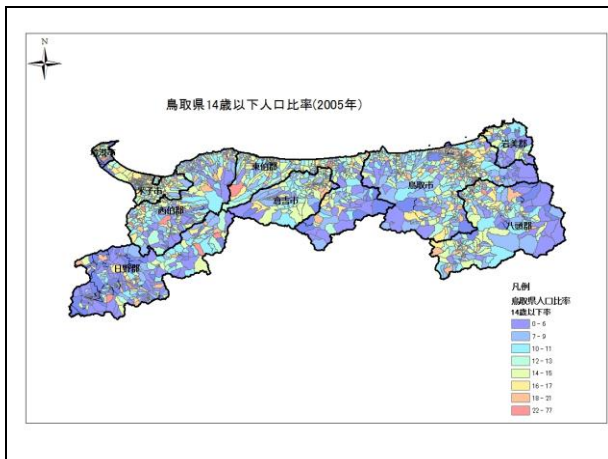
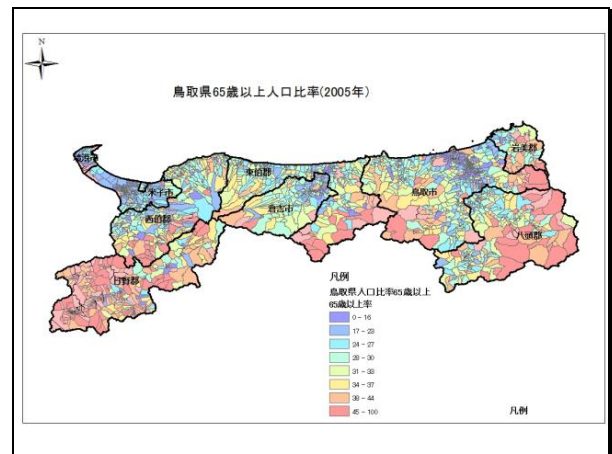
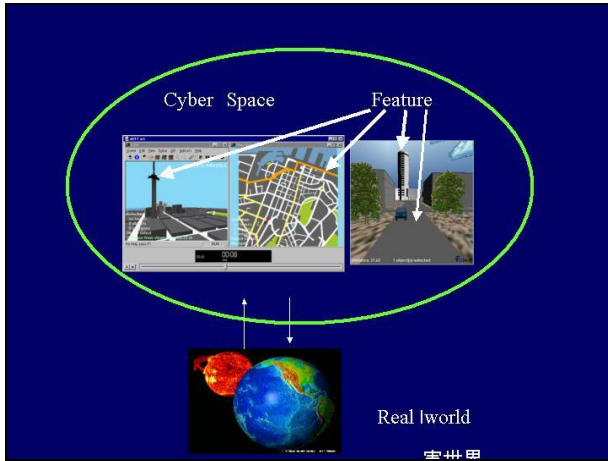
地元学(地域から学ぶ住民主体の実践的学問)



地域学・地元学は、住民参加型の実践学という特性を有す。

2. 地域学の未来とIT技術

- 地理空間情報社会の到来と地域の見える化
- GoogleEarthや電子国土
Neo Geoの世界
- 住民参加型GISと地域学





電子地図の世界とNeo Geographyの世界

NEO GEOとはNeo Geographyの略で「新しい地図」のことを意味する。国や民族などどこにも属さない、浮遊する大地であり、そこでは世界のすべてを受容し、互いに認め合い、尊重しあう世界。(ネオ・ジオ (Neo Geo)とは、1991年7月1日に発表された坂本龍一の7作目のオリジナルアルバムのことでもある) Wikipediaより)

NEOGEOは、芸術家にも使用されるほど自由で活発なボランティア的な市民的活動も意味している。

世界中に拡大する電子地図や電子地球市民ベースの参加型の地図ベースの活動を意味する。

- Mike Goodchild^[4] have expressed strong reservations about the term "neogeography". They say that geography is an established scientific discipline; uses such as mashups and tags in Google Earth are not scientific works, but are better described as Volunteered Geographic Information

geospatial Web"
geoaware Web" (both 2005)
[Web 2.0の世界](#)

➡ ユーザー自主的参加型
オープン
自由な
関連な

Neo Geography

Traditional cartography vs. neo-geography and GIS

Save This Signal

Help forecast the future of science and technology with 175 members of the international community

Laptop as earthquake sensor

個人がさまざまな地域情報をGoogleEarthに入力している。ユーザー参加型の情報提供と情報交換

Collaborative mapping
Cybercartography
Volunteered Geographic Information

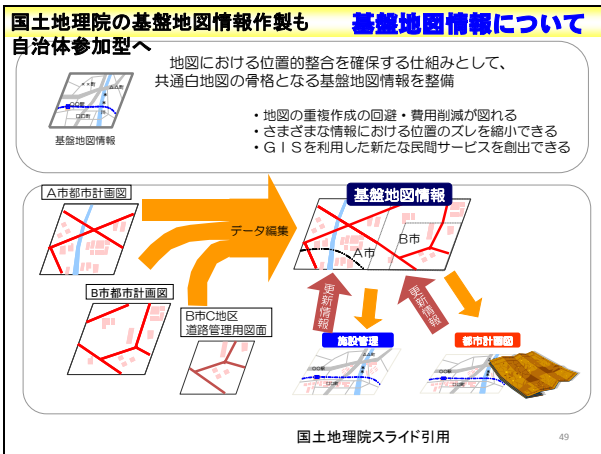
国土地理院の電子国土ポータルも参加型地図サイト

電子国土ポータル

地図の上に国民が個人の情報を掲載可能

道案内の選ファイルを電子メールで送信し情報を共有

地図がコミュニケーションの基盤に変化



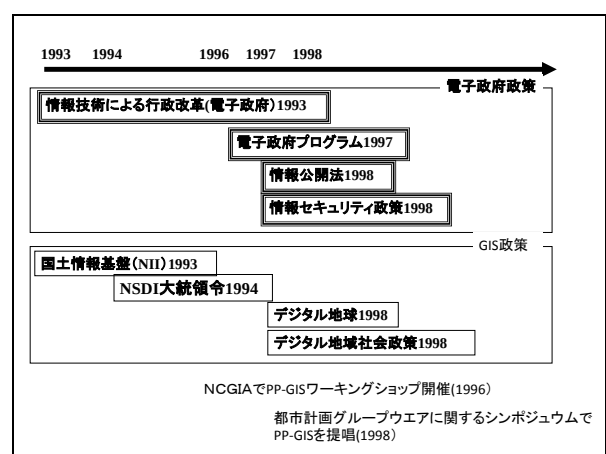
参加型の地図利用

- WebGISの発達 から市民参加型GIS(PP-GIS)の発達へ

PP-GIS Public Participation GIS (PPGIS)

市民参加型GIS (米国で1996年以降発達)

- 日本では、カキコマップなどが1990年代後半に開発され、まちづくりに電子地図を利用した住民参加型GISが利活用される。
- これらのGISは、非常にシンプルなものであったが、住民の意見[位置情報付き]を電子地図をプラットフォームにして共有化し、行政が住民意見を把握しやすくなったという特性がある。
- その後、安心安全マップへと発展する。



地図がコミュニケーションの基盤へと進化している

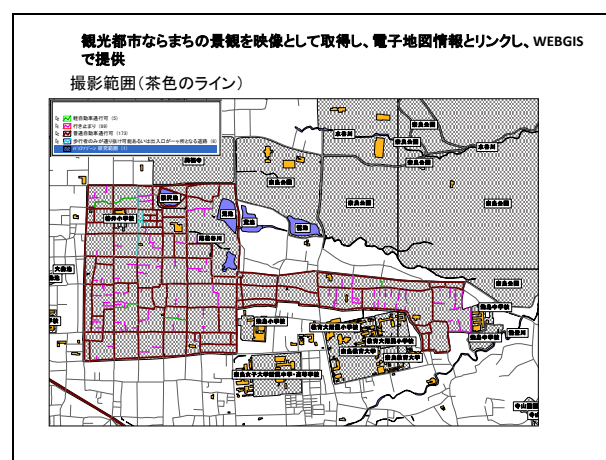
- 背景にある地理空間情報技術の発達
GIS WebGIS GPS リモートセンシング
モバイルマッピング

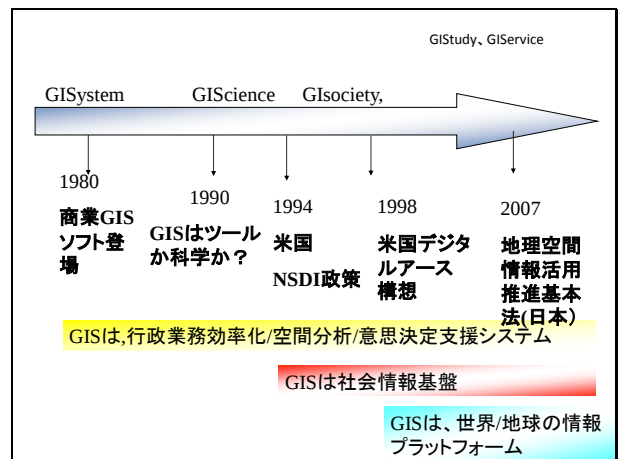
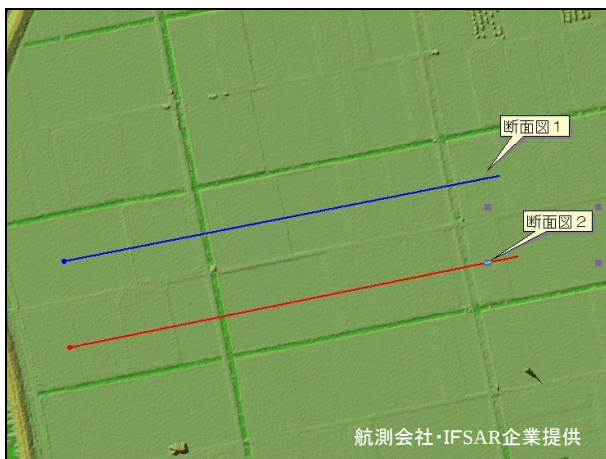
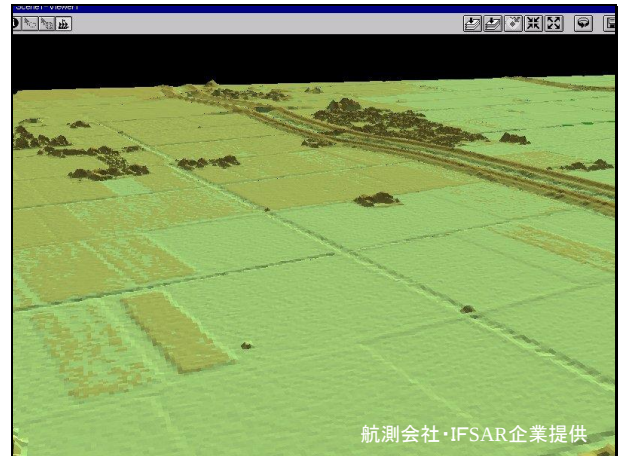
↓

Digital Earth Digital Japan

↓

社会情報基盤、プラットフォームとしての地図の世界





進化する地図、地域の見方を変える。

地理空間情報活用推進基本法的重要性

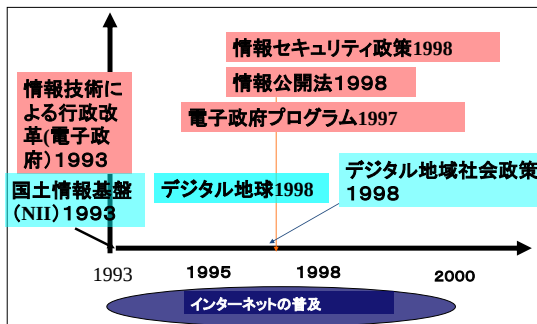
愛称は **NSDI法**

(National Spatial Data Infrastructure; 国土空間データ基盤法)

この法律は、**NSDIをいかに恒常的に国家として整備し、更新し、そして国民の豊かな生活と安心・安全な生活を実現するために活用するかという21世紀の国家の社会基盤整備の基本を示したものである。**

米国の電子政府と国土空間データ基盤整備

IT産業.GIS産業の育成



地図の進化 (社会基盤情報への発展)

紙地図から 電子地図へ

何が変わるのか。

縮尺から入力精度へ

1/2500 から 2500レベルの位置精度

法令による基準の明示(測量の精度)
地物という考え方(地理情報標準)

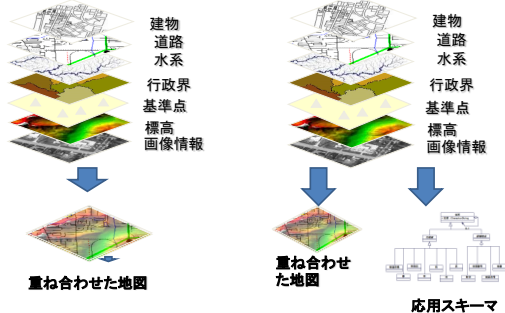
道路、河川、建物、行政区、筆界...

地震、台風、交通事故、大気汚染...

基盤という考え方(NSDI、基盤地図情報...)

オブジェクト指向と一般地物モデルの考え方

レイヤー構造モデルから一般地物モデルへの変化



現実世界にあるものは、すべて関係をもって存在している。

この現実世界(地球上:地理空間)にあるものを「地物」と考え、地物間の関係を定義可能にするオブジェクト指向モデルをGISに導入したのが、ISO/TC211による地理情報の標準化であった。(一般地物モデル)

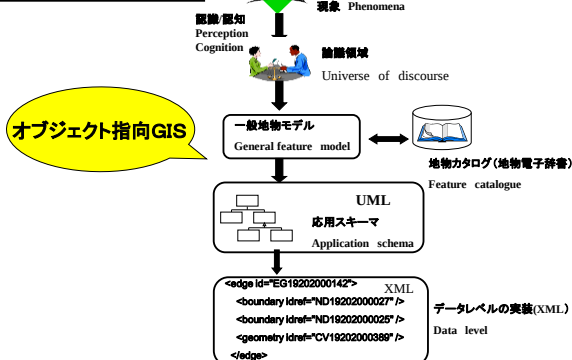
1、この考え方は、まず、何のためにGISを利用するのか。

(業務の内容と目的は何かなど)から始まる。

2、次にその業務で必要な地物の定義と地物間の関係をモデル(UMIクラス図)として表現する。(応用スキーマとして表現する。)

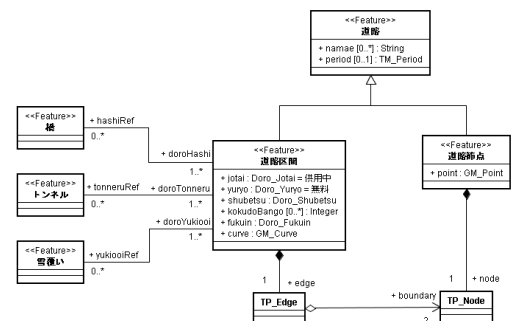
地物の入力精度などは、業務の内容(法律などに影響される)

地理情報標準における地物ベースの考え方



地物ベースのGIS-UMLモデル(地理情報標準)

数値地図25000の道路の応用スキーマ



地理空間情報社会の本質は何か。

20世紀とは異なる21世紀の社会情報基盤

1. 完全な国土の電子化

国土の管理と国土計画の基盤
安心安全な社会への基盤

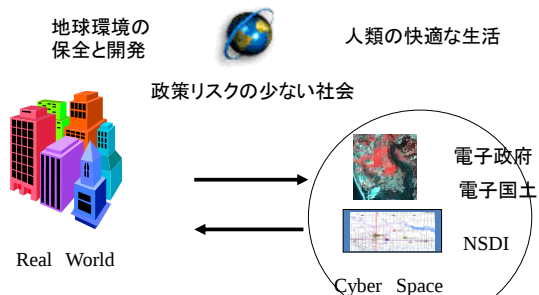
2. 資本主義社会の私有財産制度の電子化

土地・建物のGISによる管理

3. 地方分権時代における新しい中央と地方の関係

地理空間情報活用推進基本法の理念
住民参加型行政とPP-GIS

20世紀と21世紀で何が異なるのか。



地図/GISの本質と地域住民参加型行政へ

- 地図/GISは民主主義のツール
- 地図/GISは縦割り組織から横断的な組織を必要とする。
- 地図/GISは業務効率化に寄与する。
- 地図/GISは、住民参加型行政を実現させる。
- 地図/GISは、政策決定意志支援をサポートし、住民サービスの向上に寄与する。
- 地図/GISは地元産業を活性化させる。

地域づくりと地域学

- 人間が自然に働きかけ、人間の英知により創造されてきた地域。
- 地域学は、実践の学問
- 地域学は、本質的に人間参加型・住民参加型の学問であること。
- GISや地理空間情報技術は、参加型学問としての地域学の未来を拓く

3. まとめ

地域学の重要性: 学問再編のフレームワーク

鳥取大学地域学部の試み(2008)

地域学とは、「自己」(個人)を出発点としてひとりひとりの「生の充実」、「生活の質の向上」を「地域」という「共同性」との関係で考え、その実現を目指すもの : 個と共同性(地域文化)

- ①. 地域は、どうあるのか。
- ②. 地域は、どうあるべきか。
- ③. 地域を創る。

地域学の
使命

鳥取大学地域学部地域学論集(2008)より

鳥取大学地域学部の試み(2008)

- 地域学とは、人間社会、自然社会の本質を空間に落してみたい学問である。
地域学を担う主体は多様性を持つ
研究対象へのアプローチの多様性
地域観(社会の見方)をそれぞれの考え方で確立し、相互交流して共有化する
実践学
地域学は、文理の視点が必要
地域学は、本質的に政策学

鳥取大学地域学部地域学論集(2008)より

鳥取大学地域学部の試み(2008)

「地域学部」創設の歴史的意義

国家を前提とした学問から
民間学へ（官学から地域学へ）

住民の生活の質を重視し、地域の個性
を尊重する社会発展

国民国家の枠組みを超えた地域の枠組み

鳥取大学地域学部地域学論集(2008)より

「地域に根ざした知識(area-based knowledge)」の
開発は今日なお重要な意義をもっている。

「小は個人の生存の立脚点あるいは『場』としての
個人の内面から、大は地球あるいは地球を取り
巻く宇宙空間に至るまでの幅で、**伸び縮みする多
様な地域の諸局面**のおおのについて、**時間・
空間・主体という座標軸**を組み合わせた視点から
の比較作業を通じて統合的・俯瞰的に既述し把
握する**地域学の構築は、学術の新たな体系化を
促すことへと導くはずである。**」

「地域に根ざした知識」は当然、地域研究を人文・社会科
学だけでなく、自然科学との「融合」へと導くもので、地域
研究は「**文理協働的**」な**アプローチ**をも重要な特性

地域研究分野の展望 p.8より引用

鳥取大学地域学部の試み(2008)

• 地理学と地域学

地域概念(地域の本質)を研究してきた地理学

「地域が、自然と人間のかかわりで人間活
動のもとに創世されてきたことを地域の本質と
する。」

文理融合の学問としての地理学と地域学

地理学から生まれたGISは、住民参加型のIT
ツール

鳥取大学地域学部地域学論集(2008)より

人文・社会科学、自然科学の枠組み を超えて

- 地域学は、文理融合の学問であり、人文・社会
科学、自然科学という2分法では分類できない
新学問分野・領域
- 地域学のキーワードは、実践学、住民学、民学:
住民参加、国民・住民主体の思想がある。
- 日本学術会議の学問の体系(第1部 人文社会
科学、第2部生命科学 第3部自然科学)におけ
る第4の枠組みが地域学といえるのではないか
。

第1回 鳥取大学地域学研究会大会

日 時 平成22年6月12日（土）

13:00～15:15

場 所 共A20講義室

○鳥取大学（渡部） 皆さん、こんにちは。それでは、鳥取大学地域学研究会の記念すべき第1回大会、午後の部の方に入りたいと思います。

午後は、御案内のようにシンポジウムです。シンポジウムのタイトルは、「大学に何ができるか」ということでございますけれども、開会に先立ちまして資料の方を少し説明させていただきます。午後からお越しの方は、前列に資料が一式整っておりますので、資料のある席に御着席ください。午前中の方につきましては午前中と同じ資料ですので、資料がない後席の方にお座りいただけると幸いです。それと、中にアンケートが入っておりますので、また感想とか御意見等を寄せていただけたらと思います。なお、学生の皆さんで補講にかえるということでアンケートに名前、を記入して出欠と当初言っていましたけれども、今回は無記名で出していただいたので結構です。それぞれの授業のところでまた指示をいたしますので、その指示を待ってください。

それから、一般の御参加の皆様方には連続講演会「地域を創る」という案内が、A4判のものでございますけれども、入っていると思います。これは鳥取大学の地域学部の必修の授業で、1年生の授業で地域学入門というのがあり、3年生の授業で地域学総説という授業がございます。その入門、総説の授業ではさまざまな特別講師の方をお招きしてお話を伺っております。その特別講師部分は、「地域を創る」という公開講座となっておりますので、御関心のある方は参加いただきたいと思います。

それでは、午後のシンポジウムにつきましては、鳥取大学地域学部の野田教授にコーディネートをお願いしておりますので、よろしくお願いいたします。

では、シンポジストの方々もどうぞ御登壇ください。

○鳥取大学（野田） お待たせいたしました。それでは、ただいまからシンポジウムを始めたいと思います。

私は、今御紹介いただきました鳥取大学地域学部の野田と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

先ほど案内の中で記念すべきという言葉がありまして、実は地域学研究会という地域学部の全教員で組織する研究会があります。ここは、とにかく学科の縦割りになりがちな大学の研究、教育、地域連携活動を、学科を超えて先へ進めていこうということで、いわば地域学部のエンジンとしてつくられております。そこでいろんな活動をやっておるのですが、大会というのをやろうと言っていて、なかなかできてこなかったのですが、今回、第1回大会をやることになりました。

地域学研究会の大会ですから、教員だけ集まって、地域学とは何かということをいろいろ議論するというやり方もあるのですが、地域学ということについては午前中の碓井先生のお話でもありましたように、すぐれて実践の学ということもありますので、私たちはぜひ鳥取県の各地域で地域づくりにそれぞれのお立場で頑張っておられる方々に来ていただいて、大学の中で一緒になって、学生もそれから県民も一緒になって議論をしようと、そういうことで今回企画をさせていただきました。

きょう、呼びましたのは、鳥取県の東中西、東部からは智頭町長をお呼びしております。それから、中部は、中部と言えるかどうかですが鹿野町から長尾さん、さらに西部からは住田さんに米子から来ていただきました。

それぞれどういう活動をされているかということは、最初の1ラウンド目のときに御自身からお話をいただきます。さらに最後に、鳥取県の企画部長、高橋さんにも来ていただきました。県の立場からそれぞれの地域づくり活動や、今大学が取り組もうとしている地域学ということについてコメントもいただきながら一緒に議論していきたいと思っています。

最後に、私ども地域学部の家中准教授がおります。家中先生は社会学が御専門ですが、県内のいろんな地域に入って、地域づくり活動、まさにフィールドワークをなさっております。そういった点で、今回のシンポジウムのコメンテーターということでお願いをしてあります。

そういうことで、きょうは大体2時間弱の時間ですけれども、最後には皆さんからもいろいろと御質問を承ったり、討論をフロアともやっていきたいと思っていますので、話を聞いていただいた上で、ぜひ積極的に御意見、御質問などをいただければありがたいと思います。

では早速ですけれども、東中西と言いました、東部から行きたいと思います。大体10分間ぐらいの時間で、最初に寺谷町長からお話をいただきたいと思います。

では、寺谷さんよろしくお願いします。（拍手）

○智頭町（寺谷） 皆さん、こんにちは。智頭町長の寺谷でございます。

10分ということですので、ちょっと口早に智頭町の今やっている町づくり戦略をお聞きいただきたいと思います。

皆さんのおうちにも表札があるように、町にも必ず表札がなければいけないということで、智頭町は「みどりの風が吹く疎開のまち智頭」という、あえて「疎開」というテーマに挑戦いたしております。

疎開という名前をつけたときに、年配者からいいかげんにしろと、もう戦争を思い出すからこんなの嫌だという方が結構いましたけれども、戦争から逃げるのではなくて今、世の中では今ストレスがたまって、それでみんないらいらしてくる。新聞を読んでもテレビを見ても、いらいらが高じて若い親が我が子を床にたたきつけるような、そういう時代になってしまいました。ですから、日本に一つぐらいエスケープできる町があってもいいのではないか、ストレスを解消するためにこの小さい町にいらっしゃいということですね、そういう疎開であります。

では、智頭町に来たら何があるのということになりますが、智頭町というのは93%が実は森であります。杉の町です。森であります。智頭町というのは以前は非常に豊かな町でございました。断トツに裕福な町でありましたが、残念ながら山の木の価格が暴落して、50年かけて育てた木が大根1本ぐらいの値段にしかならない。そうしますと、みんな嫌気が差して、もうおしりを向けているわけですね。もう山を見るのも嫌だぜという、そういう感じなのですが、そこで行政もそうだなということになりますと、ますます山が荒れてくる。山が荒れるとどうということになるかというと、山に入らないと風通しが悪くなって暗くなる。暗くなると下に草が生えない。草が生えないと動物の食べる物がなくなってしまう。そして、おじいちゃん、おばあちゃんが田んぼに捨てた野菜の残りをあさりに出してくる。田んぼを荒らす。そういう悪循環になるわけであります。

そこで、あえてそのみんなが嫌がることに挑戦しようではないかということで、軸足は、農業、林業を徹底してやるという戦略を実はとっております。では、林業を最終的には商いですね。しかし、今智頭だけが杉の木を高くしようと思っても、これは世界的な経済の流れの中で、今、材もあっぷあっぷしているわけですからそうはいかない。では、今のうちにみんなで目を向かせようということになります。今までおしりをむけたのをみんなで目を向かせよう。

1つ戦略をとったのが森のようちえんであります。保育園児を今、タヌキやキツネさんがおらの山だといって暴れ回っていますから、君たちちょっとバックしてくれと。我が家の保育園児も放し飼いにするから一緒に遊んでやってくれと、そういうイメージで森の保育園というのを開校いたしました。

ところが、信じられないような、いわゆる京阪神から、あるいは四国から一体どういう教育なのかと、これすごいではないかという問い合わせが殺到しまして、もう既に自分の子供はこういう田舎の山の中で育てたいという、そういう若いお母さんたちが申し込み、いわゆる智頭に住んでという方もいらっしゃいます。それから、鳥取市からも今、10人ぐらい毎朝森に通っているわけですね。もう泥んこになるわけですね、朝から晩まで。もう雨が降ろうが雪が降ろうが、要するに森に行かせる。そして、1日泥んこで遊ぶということなのですね。

もう一つは、智頭町に高速道路姫鳥線がつきますので、京阪神と智頭病院をリンクしたいということで、ストレスで疲れた方たち、いらっしゃいと。病院で少し検査をして、そして森林セラピー、森に入ってくださいということです。今回、智頭町が森林セラピー基地ということで認定をしていただきました。そして、山に入ってストレス解消。1日でさよならでは意味がないということで、それでは3泊4日ぐらいで泊まってもらわなければいけないのではないかとということで、集落を丸ごと民泊にしてみようという部会といいますか、それをつくって今一生懸命、我が家も民泊をするという方たちに集まってもらって、ごちそうは何がいいか。田舎にステーキを食べに来る人はいませんから、芋、豆、菜っぱ、要するに本物の野菜をつくろう。では、土からやり直しだということで、いわゆる農業のやり直しですね。本物をつくろうということです。

それから、農業の方ですが、ごく最近こういうことがありました。ある若いお母さんが私のところに見えて、私は長野からお嫁に来ました。子供が4人おります。しかし、私は政治がわからない。日本という国は変な国ですね。お米をつくってはだめ、いわゆる減反ですね。お米をつくってはだめと言いながら外国からお米を買って、それが事故米だったら集めて火をつけて燃してしまった。何かよくわからない。しかし、私の4人の小学生の子供と同じ子供がアフリカでは……（「飢饉」と呼ぶ者あり）そうです。おなかをすかして死んでいくというのですね。もう耐えられないと。ですから、せめて小さいことだけでも、私は自分の子供4人と亭主と一緒にお米をつくって送りたいと言うのですね。へえと言いながらも、ではちょっと予算をつけるからみんなでやってみようかということで、

実は5月29日、ボランティア、子供たち、あるいは集落の人たち、あるいは鳥取大学からも若副学長さんも生徒を連れて来てくれました。みんながアフリカに送ろうぜということなのですね。

今度は何が次に起きたかという、そのグループが、これは民間ですよ、東京のアフリカ大使館まで行って、今度は大使を呼んできた。町長、お金がないからお金を出してちょうだいということなのですね。よし、来た、出しましょう。今度は、稲刈りをする。お米を送るだけではなくて、今度は交流をしようということなのですね。どんどんどんどん輪が広がり始めました。

そこで、私も疎開というテーマを、エスケープしていらっしゃいということで、2年たちました。4年スパンですから折り返し地点に入ったところで、今これからやろうとしていることは、疎開保険をやろうと、そういうことを考えています。どういうことかという、日本という国はいつ地震が起きてもおかしくない。そこで、東京、大阪、名古屋、あるいは福岡、あるいは京都、神戸、そういう都会に向けて、もしあなたのおうちが不幸にして地震に見舞われておうちが崩壊したら、智頭町に逃げていらっしゃい。仮設なんていうそういう接待ではなくて、ちゃんとおうちにみんなで寄り添いながら、そういう生活をしていただく。そのかわり、1年間に1万円お支払いください。そしてもし、ありがたいことに地震が1年間起きなかったら、そこでこのお預かりしている1万円を経費を引いてお返ししましょうということですね。本物のお米、あるいは本物の野菜をお送りしましょう。あるいは、智頭は杉の町ですから町有林がいっぱいあります。東京にいて、おれは鳥取という県の小さい町に山を持っているのだと、そういう望みの方は杉の木を10本ぐらい提供しましょうということですね。

どういうことかという、安心感とそれから1万円ですから、1万円払っても来年1年後には、おいしいお米が届けばそれでいいではないかという、そういうことですが、ここにはもう一つ大きな目的がございます。智頭町という小さい、93%が森で、畑が少ない。しかし、1万人集めて1万円もらうと、1億になるわけですね。これはばらばらでないとだめですね。一遍に東京に大地震が起きたら困りますから、東京、大阪、名古屋、福岡などいろいろ。

それで、経費を1億集めて、例えば経費を4,000万取りましょう。そうすると、6,000万円分の農家が必要になってきます。お米や野菜をつくる。それから、今度は荷物を送らなければいけないから、1万人分の荷物を月ごとに分けますけれども、ただ1人や

2人ではできない。そこに雇用が始まる。おばあちゃんたちのパートを呼ばなければいけない。4,000万ありますから、4,000万円のいわゆるパート代が入る。これをこれから今、プロジェクトを組んで、本気でいよいよ打って出ようと。こんな小さな町でもやればできるということを大いにほえてみたいと、時間が来ましたのでまた後ほどお話しさせていただきます。

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。（拍手）

智頭町長は、実は2回目の町長復活でして、これまでもいろんなアイデアの新しい取り組みをされています。鳥取県で地域づくりというと、やっぱり智頭町という時代がずっと続いていたと思います。そのお話は今なさいませんでしたけれども、今新しく百人委員会を立ち上げたり、今御報告になかったようなことも、さまざまな分野で新しい風を起こして、智頭町が今すごく全国的に注目されているということになっております。

それでは続きまして、中部、鹿野の長尾さん。今度は民間のNPOの立場で地域づくり、町づくりに取り組んでおられます。

では、長尾さんの方からよろしくお願いします。（拍手）

○いんしゅう鹿野まちづくり協議会（長尾） 皆さん、こんにちは。今、先生の方から中部というくくりですけれども、東部の西の端、中部との結節点というあたりだと認識しております。私はNPO法人いんしゅう鹿野のまちづくり協議会の長尾といいます。きょうはどうぞよろしくお願いいたします。

時間ありませんので、皆さんのお手元にありますNPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会の紹介という資料に基づきまして、だあっと流していきたいと思います。

まず、地域の概要ですけれども、言いましたように鳥取市1市8町の合併の中でも西の端です。大体人口が4,400人ぐらい。それから、この鹿野町というくくりの中で、実は昭和30年の合併で、小鷺河村、勝谷村、旧鹿野町、この3つが一緒になって現在の鳥取市鹿野町となっております。よく鹿野というときに、30年の合併当時の小鷺、勝谷も出てくるのですが、私たちまちづくり協議会がこの10年ほど事業する中で、特に旧鹿野、城下町地区に結果的には限られたような活動になっていますけれども、現在の鹿野町はとりあえずそういう3つの町、村が一緒になった地域であるということです。

それから、亀井さんと城下町鹿野と書いてあります。1581年から37年間にわたりまして、亀井茲矩さんという殿様がつくられた町でございます。二代目の正矩さんは、一国一城で、そういうことで津和野の方に行っておられます。そういうようなことで、城下

の近くには、城下町特有の侍屋敷、あるいは次は商人の町ですとか、その外は職人の町というようなことで、旧鹿野町がつくられております。

それから、2 ページ目ですけれども、N P O 法人の設立と組織、体制、会則というページがあります。鹿野町ですけれども、言いましたように城下町地区に限っての、実は平成6年、1994年ですけれども、鹿野らしさがなくなる。どこの地域でもそうだと思うのですけれども、少子高齢化に伴って、空き家を長く投げとくと解体されて空き地になる。鹿野も城下町らしさがどんどんなくなっていくということで、当時の町長さんと鹿野らしさがなくなるから何とかしようということで話をし、私ごとで申しわけないのですが、建設業にかかわっていました中で、建築屋として相談にちょっと乗れということで、街なみ環境整備事業を平成6年からスタートしています。その中で鹿野らしさ、鹿野の城下町らしさというのは何だろうということから始まっています。祭りの似合うまちとかそういうテーマを決めながら、計画、策定を2年間ほどやっています。そして、平成8年から一番初めに鍛冶町という町内の工事ができた。それに伴いまして、住民にその当時おりましたサラリーマンのグループでセクションドリームですとか、伝統工芸の匠の会ですとかいろいろボランティア団体がありました。その人たちが、これぐらいきれいになるんだったら、おい、何とかしょいやと、鹿野弁ですが、このでき上がってくる景観を活用して、何とかしょいやと、やらいなしょいな会というのが実はまちづくり協議会の立ち上げ時の一番初めの会の名前でございます。

そういう中でいろいろと工事は進んでいく。そして、その活用するがための住民の組織というものもだんだんできてくる。それから、平成12年ごろです。やる中でその有志、セクションドリームですとか匠の会の方たちで鳥取県の街なみ整備コンテストというのがありました。平成12年。ここでいんしゅう鹿野童里夢計画ということでプレゼンをさせていただいて、そして最優秀賞に輝いて何とその当時副賞200万円の現金いただいたと。さあ、飲んでしまわあかという話もありましたけれども、それでは後世の笑い物になるではないかということで、いわゆる先進地と言われるところをその当時勉強していったということで、経緯はそういうところです。

それから、組織、体制、会則ですけれども、今、大体協議会会員は40名ぐらいです。そのほか、応援団の会員ということで我々の活動を支援していただく方、これを町外、県外問わず、とにかく賛同いただける方の応援を求めようということで、大体ばらつきありますけれども80人ぐらいというところです。

それから、いろいろな部をつくっています。それから、年間事業費、2,500万円ほどということで書いています。これは、当初、1号店ゆめ本陣というコミュニティー施設をつくっています。その中でやはり立ち上げ時から、ボランティアでは絶対続いていけないという中で、2号店は絶対お金もうけの施設にしようと、そこでもうかった金を町づくりの運営費に充てていこうということで、1号店、2号店で大体2,000万円ぐらい売り上げています。それから、あといろんな受託事業、それから民間のトヨタ財団ですとかコミュニティー財団ですとか、いろいろな助成金をいただいています。とりに行っています。このあたりで大体平均で500万ぐらい。それから、会費ですが1万2,000円ぐらい。そういうことで今、運営をしています。

3ページ目ですけれども、その活用、街なみ環境整備事業の中で行政は何をやったか。民間、我々民間人は何をやったかというところは、街なみ環境整備事業の計画策定の段階で仕分けをしています。公的空間については行政がやる、私的空間の家屋の修景やあるいは新築については民間でやるということで仕分けをし、進んでいきました。

いろいろな活動をする中で地域住民の意識もだんだんと芽生えてきました。「足下行灯」を自分たちでつくったり、あるいは孟宗竹のプランターですとか、いろいろなことで人のお見えになることによって、鹿野の町が何でいいのだろうと、何でこんなに人がぼつぼつ歩き出されたのだろうかと。やはり自分たちの町のよさ、今まで気づかなかったもの、そういうものに住民の方々、気づいていくとともにどんどん事業も活発になっていっているということで、協議会の取り組みとしては、格子戸の風車を、風車飾ってみたいとか、それから孟宗竹のプランターをつくったりですとか、のれんをつるしてみたり、いろいろなことをやっています。最近では、屋号の残る町ということで、屋号をもう一度調査して、そしてかわらに焼いて飾っています。それから一番下に「蓮」と書いてありますが、これは、鳥取大学の農学部の方で、遺伝子研究に使われたハスというものを190何鉢だったのでしょうか預かっていただけないだろうかと。ここちょっとまた後でもお話ししたいのですけれども、これをもらって、ではそれをだれが守りするのか、どうやって株分けしたものを守りしていくのか、いろんな会合をやりました。そういう中でも、やはりその地域住民の結束力というものは、年を追うごとに活発になっていっているというところですよ。

それから、4ページ目ですけれども、空き家の整備、活用の取り組みということで、先ほどちらっと話しましたゆめ本陣、これは空き家の活用第1号店です。ここでは、特産品の開発、そばアイスですとか、2階は地域のギャラリーにもしています。それから、ここ

を活用して藍染め体験の工房とか、手づくり小物、今は発足当時よりたくさん出ています。出店者、お年寄りの方129名ぐらい出しておられる作品を集めています。年寄りの方の作品が多いですから、認知症にかかりかけていたばあちゃんが元気になって売れて、孫に小遣いをやり出して、うちのばあちゃん元気になったとかね、そういう話がだんだんと聞かれています。

それから2号店ですけれども、夢こみち。平成15年度にオープンしまして、NPOといえどもお金がないと運営できないということで、お金もうけの施設ということで開いた食事どころです。先ほどの2,500万円の事業費の中で、大体ここで1,000万円ほどの売り上げを上げていると。そのもうけを持って地域活動に頑張っておるようなところですよ。

次は5ページです。空き家整備の活用の取り組みということで、株式会社サラベル鹿野という施設名がしかの心。これも実は空き家です。昭和8年に建築された鹿野町の鹿野養蚕組合、蚕を育てた施設です。これをまち協のメンバーが中心になりまして、いろいろな呼びかけをして住民の出資を得て、この建物を取得し、そして株式会社ということで、今現在はカフェをオープンしています。それと同時に多目的ホールでいろんな勉強会とか展示会とかいろんなことに使って、コミュニティーの大きな輪にもなっております。

それから、新たな活用の取り組みということで、今まで10年ほどまちづくり協議会、あるいは行政、いろいろと皆さんの指導を仰ぎながら進んでくる中で、鹿野に住みたい、空き家がないだろうかという話が年にかかなりあります。一番原点に返って、空き家の活用ということもありましたので、ここを今、一生懸命掘り起こしをしています。それは、鹿野の古民家の再生プロジェクトということで、これもお金がないのでちょうど先ほど言ったようにトヨタ財団の2008年度の地域社会プログラムの助成金を持って帰っておるといいう状況です。

それから、次の6ページは、街なみに似合うイベントをいろいろやっています。鹿野の盆踊りですとか、河川敷での盆踊りですとか、城下町にちょうちんをつるして、それに似合った虚無僧行脚、あるいはレトロ市、こういうものをやりながら地域住民、また町外の方々とのつながりを広くとっているところです。わったいな祭についても行政との連携ということで、城下町地区についてはまち協でやっていますよという関係プレーの祭りです。

それから、いろいろな地域連携ということで、走り出してから実は今、10団体ぐらいのまちづくり団体ができ上がっています。そういう中で、当然一番早く上がっていたNP

〇が中心になるのですが、やはり一つの地域の問題があるときに、関係のない団体というのはない。地域住民すべての方、それぞれがかかわっておられる団体、あるいは個人も関係あるということで、いろいろな団体との連携をとっています。行政、商工会、それからふるさと鹿野ですとか、2006年にお見えになった鳥の劇場「しかの劇場」のスタッフの方と皆で連携、コミュニケーションをとりながら進んでいるところです。

それから、いんしゅう鹿野・地域連携プロジェクトということで、きょうちょうど企画部長がお見えですけれども、NPOはお金がありません。「鳥取力」創造事業の中で、鳥取県の方でこういうことが企画されている。では、応募しよう。ではこの助成金を使って、費用対効果はどうやったら一番元気になるのかなということで、今やっているところです。それで、その関係プレーの図を図示しているところです。それに伴いまして地域マネージャーの採用ということでやっております。

それから8ページはフォーラム等の開催。今まで鹿野のまちづくりについては、鹿野の親戚をどれだけつくるか、これがテーマです。やはり人と人はつながるということで、非常に大事にしているところです。ちょうど、きょう家中先生もお見えですけれども、鳥取大学さんとも4年ぐらい前からになるのでしょうか、今まで私たちになかった部分を、鳥取大学の地域学部の方々からいろいろとアイデア、あるいは知恵をいただいて、フォーラム等も拡大していっています。

時間がなかったのでわかりにくかったかもしれませんが、鹿野のまちづくり協議会の概要と活動はこれぐらいにとどめておきます。ありがとうございます。（拍手）

〇鳥取大学（野田） ありがとうございます。

お聞きになっておわかりのように、ほぼ20年前から、街なみ整備事業という外部資金を取ったことがきっかけとなって、次から次に外部資金を取ってこられています。とかくこういう田舎の共同体は年々高齢化し、外部の人、物、金が入ってこなくなる傾向があります。ところが鹿野の場合は、常に何か外部のお金とか視察する人とか情報が入ってくるのです。そういうことが町の方もおもしろくなったのではないかなと思うのですが、そういうある種のマネジメントのサイクルができていった。そのことで空き家がいろんな形で活用されていくことにもつながるし、結果としてはまちづくりにつながっていると思います。とかく補助金行政については、補助金が打ち切られたらどうなるのかといういろんな批判があるのですが、この鹿野について見る限り、非常にうまくいろんな外部の資源を活用して町づくりをされているなど、私は前から感心しております。そういうところに、な

ぜか鳥の劇場が来るのですよね。またこれが偶然なのですが。

それでは次に、鳥取県の西部の事例として米子の住田さん、住田さんはお話を聞いていただければわかるように、ありとあらゆる、今米子で起こっていることのかかなりの部分を始められた張本人の方ですから、ぜひ聞いていただきたいと思います。

では、住田さんよろしくお願いします。（拍手）

○米子「笑い通り商店街振興組合」（住田） 笑い通り商店街振興組合の理事長をしています住田です。

この新聞は14年に出た分で、笑い通り協議会のときの新聞ですけれども、なぜまちづくりなのかということがこれを読んでもらったら大体わかると思います。

まず、国の大店法がなくなって、地方にどんどん大型店が出ていく。漁でいえば、みんな小型船で一本釣りをしていた漁師がある日、トロール船団が来て魚をみんな持っていかれたということで、結局一本釣りの漁師は営業が成り立たないというのと同じで、これが全国のシャッター通りができる原因で、私は国の方針に対して反旗を翻して、何とか中心市街地をもう一回元気にしようということで10年前からまちづくりというものを始めたわけです。結局ここにしかないものでないと、大型店と物売りでけんかしても勝てないということで、その地域の特色のあるものに光を当てようということでまちづくりを始めたわけです。

そのまちづくりを始めるに当たって、やはり地域の人々の一体化がないとまちづくりはできないわけです。どうしたらみんなと一体化できるかということになれば、やっぱりコミュニティの場所をつくらなければならないということで、まず第一にコミュニティの場所を空き店舗を利用して、それで金がないから両町内が50万ずつ出し合って100万で笑い庵という休憩所をつくったわけです。そこが一つのたまり場となりまして、全国から視察に来られるときなども一つの観光の場所になったわけです。この笑い庵をつくるときに、やはり住民に話をしても、何ができるだろうかということで、なかなか両町内の住民に理解してもらえなくて、はっきり言ってコミュニティということ自身も何だかわからない人もおられるし、何でそんなものをしないといけないのかと、どこかに飲みに行つて金を使った方がいいではないかという、やはり町というのはさまざまな人がおられますので、それをどうまとめていくかということでコミュニティの場所をつくらないといけないなと思ったわけです。

何とか住民を燃えさせないといけないということで、平成11年の秋、9月ごろに、そ

れならうちにはお地藏さんがあるから、モデルは東京の巣鴨がいいではないかと。東京の巣鴨はにぎわっている年寄りの町ですね。そこに10人ほど連れて行って、燃えて帰ってきたところで、すぐこの笑い庵を、今つくらないと多分できないだろうと思って、クリスマスのちょうど12月25日に笑い庵のオープンをいたしました。やはり、（「去年のですか」と呼ぶ者あり）いやいや、平成11年……。 （「もう10年以上」と呼ぶ者あり）ちょうど10年ですね。12月ですから。一つのたまり場ができますと、そこで1杯飲みながら話をしたり、それからそこに観光客の方が来られていろいろ話をするという。その中で我々の町は、先人が残してくれたものは、お地藏さんと加茂川とあと百何十年たつような古い家ばかりが残っているような町ですので、まず先人が残してくれた加茂川を生かしたまちづくりを考えようということで、ここに船を浮かべたらどうだろうかということがみんなの話し合いの中で出てきて、それはおもしろいなということになったわけですが、船を浮かべることは容易なことではないので、ちょっと我々では無理だなと。何とか県とか市の行政の方でうまくやってもらえたらいいなということで、市とか県の課長級の人を我々がチャーターした船で加茂川からずっと中海まで案内して、ぜひ行政の方でこのまちづくりに協力してもらいたいと思ったわけです。結局どうも反応がなくて、これも多分できないだろうとあきらめていたのですが、ちょうどその翌年に、平成10……。翌年だから何年だ、たまたま10年で、13年ですね、13年の……。中海が物すごく汚れているのです。それを10年で泳げるようにしようという会がありまして、その中でたまたま内藤さんという方と初めて出会って、住田さん、船を浮かべたいと言っていろいろやっておられるみたいだが、船が余っているから使われませんかということから、また私もいいかげんなものだから、わかりました、いいですよと言ったところが、船の免許もないのに船だけ借りてもどうにもならないと。約束した以上はということで、老骨、ポンコツにむち打って、ちょうど60ですよ、船の免許取りにいつか何とか取れました。それから町の仲間と大方1年間、平成14年には、まず川の掃除もしないと米子の加茂川が何十年とごみ捨て場になっていましたから、あらゆるごみ、電気製品から建設材から、あらゆるものが投げ込まれておって、本当に店屋が開けるぐらいいろんなものが出てくる。それを1年かかって掃除して、それでようやく船がまともに動けるようになったわけです。素人だからできたかなということです。いざやっぱり中海出てみますと広々とした、島根半島とかあるいは大山、すばらしい景色が見えるものですから、やはり船に乗っていただいた方は、本当に喜ばれます。私もそれに魅せられてやっぱりよかったなと。こういうよそに

ないものを、よそではまねのできないオンリーワンのものをまちづくりにつくっていかうということで、船の方は始めたわけです。

そうこうしているうちに、笑い通りが人に優しいまちづくりということをコンセプトに出したので、たまたま福祉の関係の人が高次脳機能障害の人で、NHKの30分のドキュメントで、福祉の人がつくった物をどこかで販売してもらうのにうちの笑い庵が人に優しいということで、福祉の人がここで売ってくださいとお願いに来るドキュメントがあったわけですね。そういうことに協力して、それで私はもともと商売人ですから福祉のフの字もわからない、本当にわからない音痴だったですけれども、話を聞いてみると、なるほどなど、考えてみると町の中も高齢化率が40%、じいさん、ばあさんばかりの町になっているなということにそこで初めて気がついて、町の中に福祉も要るのではないかとということで、今までは郊外にみんな福祉の施設はありますから、車が来て町の中から年寄りを運んでいくと。私らも年をとるとどうせそうかなと思っていたのですが、この福祉の人の話を聞くと、町に福祉の施設をつくったらいいではないかとということで、田園プロジェクトというものが始まったわけです。それで、私が商店街の空き店舗を福祉に貸してもらえないかと頼んで、デイサービスと障害者の方がやっている喫茶店と、あとは町中の元気老人のリハビリのいろんな教室をそこにつくったわけです。

これは補助金を受けるときに、前例がないと。前例がないというのは福祉と商業とが一緒になってものをするという前例がないということで、補助金を受けるのに入り口を、商業の入り口と福祉の入り口と2つつくらないといけないとか、わけのわからないこと言うわけです。というのは縦割りなのです、だから福祉を町の中に入れるということについては我々が先端を切ったわけです。やっぱり行政もわからなかったということで、そういうことがあったと思いますが、ようやくそれはうまく話し合いがついて入り口は1つでいいということになったわけですが、やはり私のところが町中に福祉をしてから、全国からたくさん視察も来られて、今は日本全国でも町の中心に福祉の関係のそういう施設がたくさんできています。うちが一番しゅんだったのではないかなと思うのですが、そのころは本当に全国から視察に来られて、福祉の関係はすごかったですね。

そうこうしているうちに、笑い庵も10年になります。金がなかった関係で外装はよしずを張って、よしずというのはできた当時は情緒があっていいですが、3年もするとぼろぼろになるのですね。この写真を見てもらえばわかりますが、よしずがああしてぼろぼろになっていますね。うちのまちづくりというのは、いろんな人が集まってきて、協力して

くれます。それでこの写真は、笑い庵にすみついた妖怪たちというテーマでやらせていますが、これが今度3,500万かけて改築し、大体うちはお地藏さんを大切にしておりますので、8月23日の地藏盆に合わせてこれをオープンしようということで、今どんどん工事に入っております。

ここの笑い庵の再生は、今、専務という形でやっていますのが30歳の若者ですが、この人が全部取り仕切ってやってくれていますので、私は早く引退させてもらいたい。私は、スタートが遅くて、還暦から始めたもので、古希になってそろそろ引退の年です。

ですが、本当にありがたいことに、米子の優秀なまちづくりにかかわる人が全部うちに集まってきて、ほっておいても今はできるかなと。ただ、私の年寄りの役目として、銀行で金を借りるときに判が要るとか、そういうのはどうも我々の役目だと。それから、もめごとがあつてちょっと解決がしにくいようなことは私らの役目だと、困り事は我々でないと解決できない問題もありますので、まちづくりには老、壮、青が要るなど。それがうまく回り出すとまちづくりというものはしっかりできてくると。

もう日本が壊れるだけ壊れていますので、やはり地域学というのは本当に大切な学科になって、日本全国の地域を活性化してもらう柱になってもらう人材ではないかなと私は思っております。以上です。（拍手）

○鳥取大学（野田） 本当に多彩な活動されておられるので、ほんのその一部、さわりだけを御紹介いただいたわけですが、今キーワードで、例えば空き店舗を福祉施設にするときに、恐らく国は窓口が違うということで、補助金が違うということで入り口2つつくるみたいなばかげた話が出てくるのですが、そのようなことを克服して、全国初のモデルを作ってしまう。でも、国も結局そういうことを学習しながら変わっていくのですよね。だから、行政を変えていくのも大きなまちづくりの活動の一つだなと思います。実際に田園プロジェクトは、全国のモデルになっています。

今、3人の方からそれぞれの活動の紹介がありました。次に、県の企画部長、高橋さんの方から、県がどのように今事業を進めようとしているかということや、あるいは今までの活動に対してのコメントなどもございましたら、よろしくお願いします。

高橋さん、どうぞ。（拍手）

○鳥取県（高橋） ただいま御紹介をいただきました鳥取県の企画部長をしております高橋と申します。

きょうは、地域づくりと地域学というテーマでのパネルディスカッションということで

ございますけれども、私の方からは県という行政の立場で地域づくりについてどのように携わっているか、やっているかということについて御紹介をさせていただければと思っております。

今、住田会長のお話を聞いていて、さもありなんというところもあったのですが、どうしても行政というのはそれぞれのいろんな例えば保健分野の安全性を担保するためとか、建物の安全を担保するためとか、そういうそれぞれの何かこう目的から来る規制みたいなものがあって、何かしようとするをやっぱりどうしてもそういったところに当たってくるという話はいろいろ聞くところでございます。行政としては、そうしたことを地域づくりに向けて少しでも円滑に行えるようにしていくこととか、またサポートしていくことが役割なのかなと思っております。

私ども企画部というところでございますけれども、ここにいらっしゃる皆様は企画部が何で地域づくりなのだろうと思われるかもしれませんが、そうした行政間のいろんなセクショナリズムにまたがるような話が非常に地域づくりの関係は多いということがありますので、例えば中山間地域の振興の問題とか、いろんなNPOの方の活動を支援するような取り組みとか、そうした県庁全体にまたがるような話は私どものような横割り局というか、全体を調整するようなそういうところで担当させていただいているということでもあります。

私の方から全体の動きと、また県の置かれた状況ということでお話をさせていただきたいと思いますが、この地域づくりということについては、今全国的な大きなテーマになっております。皆様も地域主権改革とか地域主権という言葉をお聞きになったことがあるのではないかなと思いますが、政権交代前から地域主権、地方分権ということは大変重視されておりましたけれども、特にここ1年ぐらい、地域主権をより積極的に進めようという動きがうねりとなって出てきております。例えば、今でも地域主権の戦略大綱というのを夏までにつくろうとか、そんなことを取り組まれているということでありまして、その関係の法案なども今国会出ていて、昨日来のニュースを聞いていますと、どうも延長はなくてそのまま選挙ということみたいですので、そうした部分の政策づくりがどうなっていくのかなと若干心配もしておりますけれども、一つはやっぱり地域のことは、地域に住む住民が自分たちの責任を持ってこれからはどんどん決めていけるような、そういう社会にしていく必要があるのではないかと、そういうことが非常に大きな改革のテーマであります。例えば、権限関係とかいろんな財源の問題とか、そうしたことをなるべく地域の、

まさに現場でいろんな問題が起きているわけですから、そうした現場の近いところで判断をして、今の会長からあったような話などのときもさっと判断して解決できるような、そんな体制をつくっていかうというのが大きなうねりなのかなと思っております。

そうした中で、鳥取県でも去年の10月から地域主権研究会というのをつくりまして、神野先生という東大の先生をスーパーバイザーにしているいろいろ検討してきました、5月27日に、ちょっと名前があれなのですが、「三段ロケット型分権国家」モデルの提案という、そういう提案をさせていただきました。大きく3本柱でやっておりまして、そのうちの1丁目1番地にそうした住民の方の選択のもとで、住民参加で地域のことを決めていけるような、そういう社会の構築を県としても積極的にこれから社会に向けて提案していかうと、そんなことを行っておるところでございます。

では、具体的にどういうことをしているのかということですが、お手元に幾つか配付資料を配らせていただいております、一つは鳥取力の創造運動の関係のチラシを配らせていただいております。ちょうどたまたま私が会場で手にしたものが裏が落丁で白くなっていて、皆様の方は大丈夫かなと心配なのですが、裏にもその募集要項の関係とか書いてあるかと思いますが、一つにはこの鳥取力という活動を進めていかうという取り組みを今、県として一生懸命やっているということでございます。

これはどういうことかといいますと、やっぱり地域づくりを進めていく上で、キーワードが大きく2つあるだろうと。一つはやっぱり人であります。県内でも成功している住田さんのところとか長尾さんのところのお話を聞いておりますと、やっぱり全体を引っ張っていくようなリーダーの方がいらっしゃって、そうした中で新しいことをどんどんいろんな困難に当たりながらも取り組まれてきたということでもあります。そうした人という県内に持っている資源と、あとはやっぱり地域資源、特産物とか環境とか集落とかそうした地域資源がいろいろあります。そうした人と地域資源を結びつけて、顔が見えるネットワークでどんどん地域主体の取り組みを進めていかうと、そういうことについて行政としてもサポートしていかうという取り組みを行っておるところでございます。

特に本年度からは、行政からのサポート制度なので額は非常に些少にはなりますが、一定の支援金を支給させていただいて、資金的な課題に当たるというときに、こういった制度を御活用いただくことで少しでも前に進む御協力ができないかと、そのようなことをさせていただいております。

一次募集は、先般5月14日までで終わったのですが、これからまだ二次募集で来週か

ら7月9日まで募集もしていくということでもありますので、こうした制度もぜひ御活用
いただいて、地域づくりの一助としていただきたいなと考えているところでございます。

それと、もう一つ配らせていただいている資料で、ちょっとA3の横長で中山間地域振
興関係事業の概要と書いている紙をお配りさせていただいております。中山間地域という
と、ちょっと学生の皆様など耳なれない言葉かもしれませんが、例えば鳥取県の場合
は、県土の約9割が中山間地域に当たると言われております。例えば、山があつて山に
囲まれた谷地があつて、そういういわゆる里山という日本の一番伝統的な姿が残っている
ような、そういう地域のことを中山間地域と言っておるわけですが、そうしたきれ
いな自然な環境が残っている一方で、やっぱり町から遠いとか交通基盤がなかなか難しく
て、例えばバスなども1日2本、3本しか走ってないとか、またはそうしたバスも来てな
いとか、買い物するところがなかなか近くにないとか、そういういろんな課題も抱えてい
るという地域でありまして、そうしたところで少しでも住民の方の生活をきっちりと確保
していくとか、また新しい地域づくりの動きを起こしていくと、そんなことをやっていか
ないといけないのだろうという観点での政策に取り組んでいるということでございます。

これは、平成20年10月に、鳥取県みんなで取り組む中山間地域振興条例という条例
もつくりまして、県を挙げて取り組んでいこうというそういう取り組みをしているところ
でございます。

ちょっと最初に裏側の右側のところを見ていただきたいのですが、広域的な地域単位で
の地域運営組織の設置状況と書いてある分がでございます。最近の一つの新しい動きとして
ちょっと御紹介をしたいと思いますけれども、これまでももちろん集落集落単位でいろいろ
共助の仕組みがあつて、生活の確保、そうしたことはその単位で成り立ってきたという
ことでありますけれども、非常に過疎高齢化が進んできているという中で、例えば高齢化
という問題などでも、県内でもある町、日南町などですと、65歳以上の高齢者の方が4
8%とかですね、非常に高い高齢化の率とかにあつて、なかなか一つの集落だけではこれ
までのように、例えば水路の維持とか、そうした集落活動がなかなかできにくいというこ
とがあります。最近の大きな動きとしては、例えば小学校区単位ぐらいで、より少し大き
な地域の運営する組織をつくって、そうしたところでいろんな活動をやっていこう、また
地域振興の取り組みもやっていこうという活動が県内でもいろいろ起きてきております。

ここに2市5町で行われているというふうにありますけれども、寺谷町長の智頭町など
でもそうした取り組みも2地区でされていたりとか、非常に大きな一つのうねりとして出

てきているということがございます。

こうしたものに対する県としてのいろんな支援制度とか、また地域の生活を確保する上での、例えば移動販売車、ショッピングセンターが集落にないということで、お年寄りが買い物もできないということがあったりするので、移動販売で来てくれるようなそういう車について少し御支援をして、買い物ができるようにするとか、あと交通関係で過疎地有償運送というのですが、そういったところを少し御支援するとか、そんな取り組みをしている状況であります。

それと、資料は入れておりませんが、もう一つ最近地域づくりということで力を入れておりますのは、私ども「鳥取来楽暮」という言い方をしておるのですけれども、鳥取に来て、楽しんで、暮らすというふうに書いて「来楽暮」と言っておるのですが、一つは最近田舎暮らしというのが、これまでのようなマイナスのイメージではなくて、むしろブランド価値化してきているというふうに私どもは思っておりまして、高度成長期以来ずっと3大都市圏に人口が集中していった、日本の人口、東京圏だけ関東圏だけでも3,300万とか、大阪、名古屋圏など合わせると多分半分近くの人口が都会に集中しているという中で、やっぱりこのきれいな環境、空気の中で、また海が近くて山が近いというところで、そういうところで暮らしたいと考えられる方というのが大変最近多くなっているということがございます。また、私ども地域側にとっても、そういう地域づくりをしていく上でも、いろんなところで違う経験をされた方が地域に入ってきていただくことで、触媒的な格好で新しい取り組みが生まれたり、例えば長尾会長のところの鳥の劇場なども、そうした1回外に出ていかれた方が戻ってこられて活動されたり、またIターンの方が活動されたりとか、そういったことがありますし、智頭町長のところでも、森のようちえんなどもたしかそうだったかと思えますけれども、そんな活動もされているということもありますので、県としても各市町村さんと一緒になって連携して、少しでも多くの方に鳥取を知っていただいて、鳥取に来ていただけるような取り組みをしようということで頑張っているというところでございます。

持ち時間の関係もありますし、まず県の取り組みということで御紹介をさせていただきました。（拍手）

○鳥取大学（野田） 今、企画部長の高橋さんからは県にこういう制度があるよということをお紹介いただきました。

地域づくりというのは、基本的にそこに住んでいる住民が主体的になっていくというこ

となのですが、それをバックアップするのはやっぱり行政であろうと。それも基本的に市町村なのですね、基礎自治体としての市町村。ですから、県はまたその一つ後ろに下がりながら自治体を応援していく関係になります。非常に中間支援的な、あるいは間接的な形のものが多いかもしれませんが、そういうインフラがあって、いろんな取り組みも可能になってくる。鳥取県の助成制度である鳥取力などもそうですけれども、非常に画期的な取り組みだなと思って私も見ております。

例えば、10万円のスタートアップ型の事業というのは、10万円ですから額は大きくないですけれども、たくさんの応募があったようですし、とにかく何か活動始めようというときのスタートアップのインセンティブにはなるのかなと思っております。

今、4人の方々からそれぞれの活動について、本当にさわりだけだったのですが、御紹介があったと思います。これからの進め方ですが、あと1時間弱になりました。きょうのタイトルは、「大学に何ができるか」という疑問形になっておりまして、これが終わる段階でその疑問に答えを出さなければいけない。やっぱり大学には何もできないのか、あるいは何かできるのかということをこれから議論していきたいと思います。

そこで、先ほどと同じ順番でまたマイクをもう1回だけ回させていただきますけれども、寺谷町長から順次、これからどういうことをお考えになっているか、これは夢物語でも何でも結構ですから、これからやりたいこと、やろうと思っておられることについてお話しいただくと同時に、その際に大学が何かかかわるところあるのかどうか、お話ししたいと思います。少々、我々耳の痛いことも含めてどんどん御自由に御発言ください。よろしくお願いします。

○智頭町（寺谷） 大学に何ができるかということですが、できることがいっぱいあるのですね、実は。きょう、私はここにお招きいただいて本当にありがたかったです。いいものは、これからお話しすることでこっちもお願いしなければいけないかなということがございます。

まず、今の日本という国を見たときに、平成の大合併というのがありましたね。国の政治として、合併をすると今までの町村の借金もチャラにしてあげよう。いわゆるこれがあめですね。それからむちは、合併しないところはこれから交付金とかそういうものでちょっと苦労しますよという、そういうあめとむちでがんがんいわゆる国が合併推進に走ったわけです。今、一応安泰的な顔をしていますけれども、実は各地区で非常に弊害が出てきた。パイを大きくすることによって、では本当にその大きいパイがどどんうまく機能し

ているかという、実はむしろ合併しないで小さいけれども一生懸命汗をたらし、頑張っているところの方が、結構ステータスに映るのですね。（「岩美町もですよ」と呼ぶ者あり）それで、今国は本来ならば検証しなければいけない、平成の大合併を。しかし、しようとしな。なぜか。やっぱりこれは失敗だったなというのが大方の見方なのですね。

そういう状況で、正直に言いまして、政治家は地域学ということは頭の中にこれっぽっちもないと思いますよ。要は、自分たちの票とか、そういう世界の中で私はあえて政治家に物申したいのは、もういいかげんにしろと。テレビを見ても新聞を見ても、今のやり方、日本の国をどうしようとか、こうあらねばならんという人が一人でもいますか。内輪もめとかそういうことばかり。そういう中で、今地域学の先生方、いわゆるプロフェッショナルが立ち上がっていただく、ちょっと遅いですね、ちょっと遅きに失した面がありますけれども、まあまあまだ間に合う。そういう立ち上がりをしていただかなければいけないと、私はそんなことを思っております。

これは一例ですが、おとしし私は環境大学の学長さんとお酒を飲んでおりまして、学長いいですねと、環境大学というのは今もうぴたっと世の中にはまっているネーミングですねと。今、環境が世界的に注目されていると、いいですねと言ったら、学長いわく、いや、それがね、なかなか生徒が来ないんだよとおっしゃるのですね。どうして来ないのですか、でも環境というテーマで学生諸君と野を駆け山を駆けいろんなことができるではないですか、そのフィールドはどこにあるのですかと聞いたら、驚くことに、いや、フィールドがないんだよとおっしゃったのですね。私はびっくりしました。では、学生諸君にコンクリの机の上で環境を教えているのですかということですね、それは学生がかわいそうでしょうと。私だったらそういう学校に行かない。やっぱりフィールドがあって、環境というテーマで野外でいろんな経験をしながら、机の上だけの勉強ではなくてやるのが私は学問だと思いうことで、では、私が一肌脱ぎましようということで、芦津地区に財産区が1,500町歩の山を持っています。膨大な山ですね。そこで、その財産区の議員の皆さんとそれから智頭町と環境大学で、この環境大学の先生方、植物、動物、あるいは空気、水、何でもいい、要するに先生方のいわゆる学問のフィールドとして学生たちと一緒にしてもらったらいかがなものかということで調印をいたしました。今、環境大学のいろんな先生方が生徒を連れて、山や森に入ってもらっています。

今度はその学生諸君と地元の若者たちの交流が始まるわけですね。そうすると、おらの村には、宿泊はごろ寝でもできるのですけれども、おふろがないと。町長、何とかしてく

れよと、やっぱりふろがないと山を歩いた後、学生さんもかわいそうだということで、国の方からお金を引っ張ってきて、今度1, 500万でおふろをつくることになりました。地元も出すのですよ。そうして、五右衛門ぶろとか女性用とか男性用とか、もうちゃちなふろをつくるなど。やるならもう一発行ってしまえということですね。そういう状況でやっぱり学生諸君が生き生きとしてきている。

今、智頭町に小学校が6つございます。これが生徒が少なくなってきた。どうしたらいいかということで、けんけんごうごうやりましたけれども、結果的に平成24年度、小学校を1校に統合するという結論を出しました。ということは、5つ学校が余るのですね。そこで、今私が各地区の小学校跡地の財産区とか公民館とか、皆さん集まっていて、これから競争しようと、競争社会に入るぞと。町としては、この学校の跡地をああしろこうしろとは言わないと。全部自分たちで考えなさいと。しかし、例えばここに5億あったら、1億ずつ満遍なく各地区に出すことは一切しません。要は、元気印で本気で向かってくるところだけしか予算をつけない、こういう宣言をしました。その中で、ある人が、町長、では負けたところはどうするのかと。負けたところは町長、あんたの票を入れないぞ、そういうこと言うのですね。どうぞ入れなくて結構。要するに、5つ全体を伸ばそうと思ったら、全体のグレードを上げようと思ったら、1つか2つ元気印があったら全体が上がってくるのですよ。ただ、満遍に票稼ぎのばらまきをすると、みんな安気をこく。まあ、町長が考えてくれる、だれかが考えてくれるだろう、そういうことなのですね。

それでいい機会ですから、今地区が5つ、これから平成24年度はもうあくわけですね、小学校のグラウンドも体育館も。競争をこれから指示していますので、でき得ればここにも例えば野田先生の野田ゼミの方や、家中先生のゼミ、あるいは藤井先生のゼミ、藤田先生もいらっしゃいますけれども、そういうゼミの諸君がいると思いますけれども、ここで突発なことを言いますけれども、この各地区に例えば那岐地区というところには野田ゼミが入り込むと。それから、土師地区というところは家中チームが入ると。山郷は藤井先生、あるいは藤田先生。競争が始まるわけですね、先生方。それは先生、怖いですよ。負けたら先生、八つ裂きですよ。（笑声）それで、集落に学生の皆さんも入り込んで、それぞれが切磋琢磨したアイデアを出すと。なぜこういうことを言うかということ、田舎の人間というのは大体発想が決まっているのですね。例えば、うちの地区はでは福祉を大事にしようと言ったら、隣の地区もおじいさん、おばあさんがいるから必ず福祉が出てくるわけですね。（「まねする」と呼ぶ者あり）そうそう。ところが、また隣もおれたちもでは福祉だ、

負けたらだめだと。ということは、5つ同じことやらないとだめなのですね。そうすると何の意味もないということですね。では、うちの地区は福祉で徹底してやろうとか、うちは教育を徹底しようとか、うちは何々をやろうとか、そういう柱を立ててやらないとだめなのです。

ところが、今ここにいらっしゃる皆さんも、やっぱりこういう元気印の皆さんがいらっしゃるから地域というのはどんどん動いていくわけですね。今ごろ、町長がおれについて来いという時期ではないのです。町長というのは、いわゆる町民の本気度をじっと見ながら、それに予算をつけるとかそういうことなのですね。おれについて来いというような、そんなおこがましいことはできませんし、第一町長が地域を動かすことはできません。絶対できない。要は、いかにタクトを振って、住民を本気にさせてそれに予算をつけるという手法でないといけない。そこに、強烈な助っ人で、野田先生や家中先生や藤井先生、藤田先生が入り込んで、学生諸君が入り込むともう想像しただけでもすごいパワー、町じゅうパワーだらけ、競争ですから。そういう意味でしたら、私は各地区に予算をつけてもいいなと本当に思っています。矢部学部長もいらっしゃいますから、部長の方でも予算つけていただいて、それから私ども町も各地区に予算つけて、さあやろうぜと、そういうことをやると楽しいでしょうね、先生。やりますか、本当に。それで企画部長もくわえ込んで、予算はもうむしり取って。政治家には任せておけないと、地域づくりは。地域はいわゆる学問のプロ、そして学問のセミプロの学生諸君、学生諸君もいろんな県外から来ている皆さんもいらっしゃるでしょうが、鳥取県の智頭町のあの集落をおれたちがつくったんだってことになるのですよ。私はそう思いますよ。ちょっと真剣に考えてください。（笑声）これぐらいにしておきます。（拍手）

○鳥取大学（野田） 具体的な提言をと言っていましたけれども、何かいきなり結論みたいで。（笑声）私もまじめに考えたいと思います。あと学生とも十分議論します。

ということで、次にでは、大学という関連でお話を続けていただければと、長尾さん、よろしくお願いします。

○いんしゅう鹿野まちづくり協議会（長尾） 町長さんの迫力ある話の後で、非常にしゃべりにくいのですけれども、初めは少し冷静に。（笑声）

まちづくり協議会の鹿野の資料で、7ページ見ていただけますか。もう一度開いてみてください。実は鹿野のまちづくり協議会は、非常にお金のない団体です。そういう中で、本当に知恵をいただいているのが鳥取大学です。実は、きょうの地域学研究大会、大学に

何ができるのかと。十分にこの3年、4年お知恵をいただいております。

このきっかけとなったのが、さっき私が言いました人と人のつながりということで、実は日南に行きましたときに、鳥大のこういう事業で応援していただいていると。ちょっと待てと、鳥大も知らないわけではない。それから、大学に出かけまして、先生、こういう授業があるらしいですが、鹿野もお金のない中、やりたいことがいっぱいあるのですが、お金がなくてできませんと。何かいいお知恵はありませんかと言って助言をいただいたのが、今お世話になっている鳥取大学地域貢献支援事業です。金額的には本当に知れています。100万円の申請を出しても50万円ぐらいしかつきません。金額ではないのです。知恵を、地域学部の先生の持つておられるお知恵、これをいただいています。これを多分、まちづくり協議会が謝金でお支払いするということになると、年間通せば莫大なお金になってくると思います。それだけ地域学部の先生方、野田先生にしろ家中先生にしろ、そしてまた途中に鳥の劇場という芸術文化活動が地域の新しい文化資源として加わった。その中にまた、芸術文化の先生にも入っていただいています。

そういう中で、やはり勉強してない私、もしくは私たちスタッフが本当に知らない部分での知恵をいただいている。大学で学んでおられる、教えておられる、そして学生さんの実践の場としての人的支援もあるかと思います。先生方のお知恵を本当にいただいています。考えられないような、なるほどな、さすが先生だなという発想で、本当にこの3年、4年、どんどんと輪が大きくなっています。

ちょっと話を変えますけれども、2006年に鳥の劇場という劇団が鹿野に来て拠点施設をつくられました。民間の劇団です。そういう中で、鹿野の城跡公園にお堀があります。そこに石をぽつんと投げて、そしてその石がどういうぐあいに輪をかいて大きくなっているのか、ちょうど当時商工会長をしていた関係で、鳥の劇場のスタッフの方々が商工会長頼みますと、こういう理由で鹿野を選びましたと。ふるさとミュージカルが22年続いているという歴史、文化の深い鹿野でやりたいと。たまたま学校もあいていると。そこでやりたい。わかりましたと。演劇文化活動では絶対食っていけないから、地域とともに歩む演劇文化活動。演劇文化がどれだけ地域を元気にするかというテーマで行きましょうというのが2006年の合い言葉です。

そういう中で、やはり先生方、それから学生さん方、本当にたくさんのお知恵、あるいは力をいただいて、10年近く活動する中で馬力アップしているというのが今の鹿野だろうと思います。

行政との話もありました。鹿野町役場、当時平成6年、街なみ整備協定の策定委員会から私もかかわっています。そういう中で、鹿野の進め方というのは、計画をつくるまでに住民の意見をほとんど平成6年からは持ち上げています。その当時行政からトップダウンでこういうことをやるからこうだよという落とし方でした。ところが、鹿野はそうではない。平成6年から、こうこうでこういうらしさをつくろう、どういう町にしよう、それがためにはどういうことが必要なのか、これを実行するためにはどういうことを住民で解決しなければいけないのかということからかかっています。だから、計画は2年半ほどだったのです、環境整備事業。ところが、進み出したらどんどん進んでいます。その進み出すまでには、住民の意識というものはもうそこに向いているわけですね。だから、非常に工事、整備、景観の保全、こういうものも非常に早かったです。そこで今度まち協に目を転ずれば、起こしたとき私も環境整備事業の策定委員会で引き込まれ、そして1回手を離れて、平成12年に童里夢計画をつくった後から、これをやるから仲間に入れとって引き込まれました。それから、現在まではまっているのですけれども、12年の童里夢計画をだれが考えたかと。自分たちの生活をしながら、仕事をしながらこれだけのものをプレゼンする。その作業に感動して入りました。引き込まれました。よし、やろう。これをやるがために、ではどういう仕掛けをしていくのか、私はたまたま鹿野に拠点があるので、昼間はこの仕事をしようと。あなたたちは、ほかへ勤めに出ているのだからと。そういうことでスタートした時点、情けなかったのは、やはりこれボランティア団体です。責任がない。集まりました。毎月1回、夢会という定例会するのですが、皆さん責任がないのですよね。集まってきて、あんたこうこうで特産品開発のここの部分を保健所に行って話してきてくれよとかね、いろんな分担をするわけですよ、必要なことを。そうすると次の夢会までに多分調べてきてくれているだろうと思って出るのです。そうしたところが、いや、今週は忙しいで何にもできてなあてないということが毎回のように実はあったのです。これはだめだと。それで、労災の報告書みたいなものですよ。いつ、どこで、だれがどのようにするかを全部決めようと。会合は全部これでいこう、そうしないとこの会が進まない。できない人は事前に連絡してくれということで、平成12年とか立ち上げの13年のころはこうして走ったような記憶があります。

途中、今大学に何ができるかという中で、17年ごろからですかね、大学の先生方に本当に力をかしていただいて、今まで地域の人たちだけで考えられなかったような発想、そしてこの問題についていろんなやっぱり知識を持っておられる先生方の意見もちょうだい

しながらどんどん輪が大きくなっている。城跡公園に落とした石の輪が初め少しでしたけれども、その輪がどんどん大きくなって、そしてそういう地域のいろんなところから人のつながり、そういうことによって地域の発信もできる。

自分なりに統計をとっている中で、鳥取市鹿野町というタイトル、全国紙とかあるいは雑誌ですとか、いろんな中で鳥取市鹿野町を取り上げていただく記事というものが大体年間にして8,000万円、9,000万円ぐらいのパブリシティ効果、平成16年ぐらいから今でも多分継続できているのではないかと思います。

お金のない地域でも、やはりいろんな工夫、知恵、そういうものをいただきながら今まで何とか来られているかなということです。

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。（拍手）

鹿野町はいろんな形で我々もかかわっておりまして、鳥の劇場というのをちょっと説明させていただくと、鳥取市出身の中島諒人という演出家が、東京で演劇活動をやっていましたが戻ってきて、鹿野小学校、それから鹿野幼稚園という廃校・廃園になった施設で演劇活動を行っているNPOです。10数人の雇用をしています。この鳥取で10数人のNPOの雇用、雇用といっても本当に少ない月給ですが、これを払っているというのは本当に驚異的なことであります。このことによって地域が大分変わってきたということがいろんなレポートで明らかになっていますし、芸術文化の持っている力が、実は地域の活性化にもものすごく下支えになっているということが言えると思っています。

それでは、住田さん、同じテーマで。ちょっと米子は、ここから100キロぐらい西になりまして、大学は医学部と附属病院はあるのですが、私ども本部がないものですから、つつい西部までなかなか行き切れないこともあります、住田さんの立場から大学へのコメントを。

○米子「笑い通り商店街振興組合」（住田） そうですね、ちょっと遠いものですからね。本当は学生さんたちと一緒にまちづくりをしたらもう最高だなと思うのですが、やっぱり若い人がどんどんまちづくりに入ってくれると町が一気に元気になります。本当に来てもらいたいですが、宿から用意しないとどうにもならないものですから。今度の笑い庵の再生には、何日か鳥取大学の地域学部の生徒さんが来ていただけるようになったのですけれども、うちのまちづくりというのは本当に自慢ではないですけれども、私は大したことはないですが、優秀な人がたくさんうちに集まってきていますので、多分うちに来られたら相当な中心市街地の関係ではすごく勉強になるのではないかなと思います。ただ、遠いの

で泊まり込みで来られないといけません。船の休憩所は、この間、家中先生も来ていたのですが、寝泊まりもできます。酒もたくさんいつも用意してありますから、飲んで話すにはいい場所ですけども、今度家中先生が夏休みぐらいに来ていただいて、ごろ寝だったら10人ぐらい寝られますので、さっきも町長さんが言っておられましたが、やはり現場を知らないとなかなかいろんなことが目に見えてこないわけですね。

私も中海のことに關しても、最初はただ船を浮かべるという程度しかなかったのですが、やはり中海に出るとカモメがおったり、それにえづけしたりとか、それから場所によってはボラが一気に50も100もはね上がると、船の中に飛び込んできたりするのですよ。そういうものをちゃんと見て、お客さんがはっと喜ばれるようなところを考えていくわけですね。ただ、船を浮かべるだけだったらそういう発見はないのですが、やっぱ自分が操縦して出ることによって、いろんなことを発見すると。ですから、やっぱり学生さんも現場に出られていろいろされたら、全国から多分来ておられると思いますけれども、また自分の地元に帰られて、まちづくりに参加されれば、やはり現場を知って勉強されたらいい指導者になれるのではないかなと思います。

先ほど言いましたように、もう地方が壊れていますので、地域学科の学生さんというのは、本当にこれからは出番がたくさん出てくると思います。やはり寺谷町長さんがおられますけれども、こういう地域学科の人を役所の中にどんどん入れていくと、それで日本の各地域を元気にしていくと。そのためには、やはり現場に出てしっかり勉強されないと、ただ机の上だけのことで多分目に見えないと思いますので、そういうことでは寺谷町長みたいに、うちの米子の市長はしぶちんで金はよう出さないと思いますけれども、私も帰ってからこういう話があったよと話をしてみたいと思います。米子市長によく言うのですよ、まちづくり課をつくりなさいと。まちづくり課をつくってもらうと、今まちづくりというのは、観光もあれば商業もある、土木もある、あらゆるものにまたがるわけですね。そうすると、縦割り行政ですから、それはうちの管轄でないからあっち行ってくれ、こっち行ってくれ。（「そうそう、たらい回しですわ」と呼ぶ者あり）たらい回しになるのですよね。

だから、まちづくり課をつくって、そこにそれぞれ担当を呼んで、こういう問題で来ておられるけれどもということで、そこの中でいろんなことを解決していくという課を米子市もつくれと市長に言ったのですが、いや、必要はないですということで、結局けられてしまいました、そういうまちづくり課という、町が壊れているから、またそういうとこ

ろに地域学で勉強された方々を入れていくという行政になってくると、やっぱり町も変わってくるのではないかと。

例えば私ら観光でも商業でも市に相談に行くと、我々がやるよりあんたやちの方が詳しいだから、わしは要らんこと言わん方がええという、行政の考え方が浅く広くということですから、こっちの方が専門家になっていますからね。これからはしっかりと地域、現場で磨かれた地域学の方々が行政に入ってきていただければ我々も話ができるのですが、なかなかそういうことで話が通じないわけですね。大学とどう結びつくかというのは、やはり現場に来ていただかないとどうにもね、多分1週間でも泊まり込みで来られたら大分変わると思いますので、ぜひ米子にも来てください。（拍手）

○鳥取大学（野田） 米子の商店街は本当に閉まっています、あれだけ空き店舗があったらサテライトキャンパスなどもすぐできるかなと思っているのですが。

○会場発言 ちょっとね、聞くのですがね、住田さんにね。

○鳥取大学（野田） すみません。ちょっと今、時間が押していますので。

それから、では最後になりますが、高橋部長からコメントをいただきたいと思います。

○鳥取県（高橋） 地域づくりに関して大学に期待することという大変大きなテーマをいただきました。地域づくりにとってどういうことが必要なのかなということから答えが出てくるのかなと思うのですが、地域づくりにはよく攻めの地域づくりと守りの地域づくりがあると言われると思います。守りというのは、例えばいい悪いということではなくて、例えば自治会などで活動されているような財産区の管理とかいろんな農業用水路の維持管理とか清掃活動とか、それぞれの神社のお守りとか、そういうのは非常に重要なことで、それはきっちりと自治会の皆さんが全員合意の中できっちりと維持管理をしていかないといけない部分と、一方できょうの長尾さんとか住田さんたちがやられていることは、多分攻めの部分でありまして、どちらかというとなんかみんなで全員がやるという、もちろん全員でやるというところもあると思いますけれども、というよりもむしろ何かやりたい、何かやっついこうぜという方が積極的なリーダーシップを発揮してやっていく、そういう部分。そういったところは、多分全員合意で進めていくというよりも若い人がいろんな提案を出して、またこんなことやろう、あんなことやろう、恐らくいろんな激しい議論のぶつかり合いの中で、ではこういう方向でやっついこうということが出てきたりする。あと、よく村は男社会と言いますが、むしろそういうところは女性の方が女性のパワーで、自分たちなら例えばこんな特産品がつかれるぞと、伯耆町などでかあちゃんそばとかそん

なことをやられている方もいますけれども、自分たちでこんなことがやれるからやろうよという動きが出てきたり、そういった地域づくりの部分があるのかなと思います。

では、大学に何を期待するかというと、特に攻めの部分でやっぱりいろいろ攻めていくときには、軍師に当たる方というのが要るのではないかなと思います。やっぱり自分たちにはない知識、また自分たちにはないいろんな情報を提供いただくことによって、また違う議論が起きて、ではこういう方向に進めるかなとか、こんなやり方をしていったらなかなかクリアできなかったバリアを超えて一步進んでいけるかなとか、やっぱりそんなことができていくのではないかなと思います。やっぱり大学というのは知の集積なわけでありますから、そうした部分で軍師的にいろんな地域にぜひどんどん入って行っていただいて、議論の中にも一緒に加わっていただいて新しい一步を踏み出す、そういったお助けをしていただけるといいのかなと思います。

地域の側にとっても、やっぱりウイン・ウイン・シチュエーションではないといけないと思います。一方的にお恵みをいただくだけということでは、逆に地域の側も恐縮してしまって、先生方に注文もつけられないということになると思いますので、やっぱり大学が入ってこられる以上は、フィールド研究の一環として入ってこられると思いますし、それは大いにフィールド研究としていろんな学術論文なり、また学生さんであれば卒業論文なりにどんどん成果を生かしていただいて、大学側としての活動としてもそれをうまく使っていいただければいいのではないかなと。そうすると、やっぱり地域側も大学側もお互い真剣になって議論をするということで、よりいいコラボレーションが生まれてくるのではないかなと感じました。

県の関係では、大学の先生方には大変いろんな場面でお世話になっておりまして、先ほどちょっと申しました鳥取力の関係などでも、こういうことあんまり言っていないのかどうかわかりませんが、野田先生にもいろんな面で大変お世話になっておりますし、あと例えばきょう、私ここに来るのにも公共交通機関を利用しようという取り組みもやっていますので、バスを利用して来てみました。皆さんバスネットというのは御存じですかね。

（「知りません」と呼ぶ者あり）知らないですか。携帯電話とかパソコンのコンピューターの中で、バスの経路検索ができるようなそういうシステムがありまして……（「それは知っていますよ」と呼ぶ者あり）それ、知っていますか。それがですね……（「バスネットというか携帯で出るのはわかります」と呼ぶ者あり）ああ、そうですか。バスの停留所などにQRコードというのがあって、それを呼んで携帯で出せるようになっているのです

けれども……（「でも、バス来ないでしょ、それは。時間でないと」と呼ぶ者あり）今は時刻表まで検索できて、経路が検索できるのですが……（「それはできるのですがね、大阪などだったら5分に1回とか電車も来ますよね。鳥取は1時間とかでしょう、30分とか。よくあっても30分に1回でしょう」「一対一で話ししないでください」と呼ぶ者あり）はい、済みません。

今は、例えば確かに鳥取の場合は1日何本しかない。時刻がわかってないといけないということで、時刻表の検索機能しかありませんけれども、今改良していただいています、位置情報もこれから入れられるようなことをやっています。

例えばこれなども、地域学部さんではないのですが、鳥取大学の工学部の先生に初期のころからいただいているというか、むしろ工学部の先生が自分の研究テーマとしてやられていることを地域の方で活用させていただいている例でありまして、まさにそういった形で実際、生活が便利になるという、そういう大きな恩恵を受けているということでもありますので、県行政の立場からすると大学の今後の地域へのかかわりということに大きく期待をしているということでございます。（拍手）

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。

私の進行がうまくないので、時間が大分押してしまいました。

では、家中先生、皆さんの発言を聞いた上でコメントをお願いします。

○鳥取大学（家中） まとめというのはとても大変で、高橋部長含めて4人の方から大変大きいメッセージをいただいたので、それから学ぶことは多いのですが、一つ二つだけ言えば、例えば高橋部長が鳥取力と言うけれどもキーワードは2つある。人と資源だとおっしゃったのですが、特に人だと思うのですね。その人という中で、地域が持っているのはやっぱり人を育てる力であろうと。それから、今ここの3つの地域の方がもう一つ強調していたのは、人を呼び寄せる力を持っている。資源というのはあればいいのですが、でもそれは人を見出すもの、つくり出すものだとも思うのですね。例えば、笑い通りにおける地蔵さんとか、加茂川遊覧なんてまさしくつくり出している。あるいは鹿野らしさというのも、これ行政の人にはわかりませんよね、鹿野の人でないと。一方で、外から来る方との対話の中でそういうのがまた見えてくる。あるいは、智頭においてはまさしく今、お荷物と言われかねない森をかつての金になる森というだけではなくて、子供たちが育まるとかそういう森として、もう一回見出して森と人の関係を見直そうというようなことをしている。そういう人を呼び寄せる力があって、そこになぜか、当たり前かもしれません

が、鹿野であれば次から次へと人材が寄ってくる。笑い通りもそうでしたね。僕は一昨日行ったのですが、若いお店のオーナーたちがどんどん入ってきて、それを住田さんであるとか、あるいは鹿野では長尾さんであるとか、こういう方々が受け入れている。それを町衆と言ってもいいのですが、きっぷがいいと、若い人たちを育てる力が本当にあるなと思っています。

だから、そういうところで、地域学部なり地域学というのは、5年、6年やって、なぜ地域に着目するのだろう、その後何をするべきだろうということはそれなりに考えてきたところだと思いますが、僕はそのもう一歩先へステップアップができるだろうか、ぜひしなければいけないだろうというものがあって、例えば地域で必要とされる人材とか地域で必要とされる学問、あるいはその相手といっても、その相手がいることです。一緒にその地域の中に入って、その地域の側の持っている人を育てる力をかりながら、大学と一緒に若い人たちと活動していくというのがとても重要なステップとなっているだろう。

例えば、昨日から地域学関連の大学での協議会などもやっていましたが、今日もこの場にいらっしゃいますが、例えば金沢大学であるとか山形大学はどんどん地域の研究員とか駐村研究員という、いろんな形での連携ができています。そういうことの次のステップ、オン・ザ・ジョブ・トレーニングではないですが、そういうことができるかどうか。そのことを通して、もともとある学問がさらに幅があるものにできるかどうかというのをすごく感じているところです。

一方、この地域学の次のステップとして、これは紹介だけになると思いますが、県の事業をうまく組み込んだり、ほかの事業もやりながら、学外の人材とも少しずつですが一緒に何か連携できるようになる。例えば、土井先生が進めているものづくり道場であるとか、あるいは最近の県の事業、地域マネージャー配置事業とかがありますけれど、そういう県の事業で人材が配置できるような、それで地域づくりのエキスパートの方々と大学がどんどんつながっていくこともできるのではないかなと。大学としては、こんな言い方は誤解を招くかもしれませんが、地域に使ってもらえる大学になったらどうだろうということを思って、それはまさしく今日、智頭町長がばしっと言われましたから、これですごくしたら大変だなと思っています。ちょっと手短ですが、あとマイクを返します。

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。本当なら家中先生しゃべり出すと1時間ぐらいとまらない人なのですが、きょうは協力いただいてありがとうございました。

お待ち遠さまで。フロアの方々もさまざまな御意見、御質問あると思います。できる

だけたくさんの方からいただきたいので、手短に30秒ぐらいで発言をお願いしたいと。
では、どうぞ。では、前の方。

御所属とお名前をお話しいただいた上でお願いいたします。

○会場発言 農業しております西尾です。この地域の活性化ということに大変関心を持っております。といいますのが、自分の家がつぶれるかどうかということもかかわっておりますので、一つ聞きますけれども、日本全体、中山間地を初めとして、都市に人口が集中しております。この大きなうねりの中で地域が残る、すなわち村が撤退するか生き残るかという岐路に立っております。うちの村を見ても20戸ぐらいの村ですけれども、20年もしたら半分になるなど。というのが、跡取りが鳥取市に住んだり県外に住んだりしております。その中において地域の活性化とは何か。老人を生き生きと楽しく過ごさせるのが地域づくりなのか。若者が定住するには、そこに収入源となる就職口がない以上は、絶対生き残れません。このことは、岩波から出ておるブックレット、1/0にもそのようなことも書いてあったように思います。ですから、この定住をするということが基本ではないかこのように思います。どのようにお考えなのか、老人の楽しく生き生き生きるのが地域づくりなのか、若者を定住させるのが地域づくりなのか、どちらに重点を置いておられるのかということを知りたい。

それから2番目に、この地域学部というのは日本の課題において非常に重要な学問であります。これが学問として成立したということを午前中の講義で聞いて私はうれしく思っております。しかし、この地域学部を出た卒業生、これの就職口を親としては心配します。といいますのは、どこに就職するかによって学部の発展もあるし、学生の将来もあるわけです。ですから、現在の地域の学生たちに、まず就職試験のペーパーテストを塾でもつくっていただいてやっていただく。そして、ちょっと見ましたところが、国家公務員の二種に受かっておる人がありますね。わしは二種ではだめだと思う、一種でないといけない。

(「関係ないでしょう、一種」と呼ぶ者あり) いや、大いにありますよ、発展において。

それから、次に行動力をつくってやりたい。それから、終わりに大学がこの生徒ならば立派だと、間違いないと思われる生徒を地方自治団体に推薦していただきたい。就職をかつちりしていただければ、地域学部の発展は将来あります。これがない以上は、衰退するのではないかと、このように思います。以上。

○鳥取大学(野田) ありがとうございます。

それでは、逐一をお願いしたい、どなたでも結構です。今、ありました老人福祉に重点

を置くのか、あるいは若者定住なのか。どっちかと、二者択一かどうか。

○いんしゅう鹿野まちづくり協議会（長尾） 初めにでは。鹿野のまちづくり協議会は、実は住んで誇りに思える町というのを整備協定策定委員会の中で決めました。そのときから、それからまちづくり協議会、ここを出てきていますのは、地域の活性化、あるいは地域振興というのはどういうことで元気になるのか、達成できるのかと。それは経済の活性化しかないよと。ところが、経済の地域活性化を表に出していくとね、まちづくり協議会の中でなかなかボランティア団体のボランティアの方々の力が受けられなかった。隠された部分というのは、私はまちづくり協議会でも実は商工会でも、いろんな中で言っているのは、こういう田舎では地域経済の活性化なくして地域の元気は出てこないよと。では、そのためには雇用の場だとか産業再生だとか、農業の再生もひっくるめて。今、我々、鹿野のまちづくり協議会の役員だけの中では、今まで、景観保全だとか、それから鹿野らしさを追求して10年ほど過ぎた。今まで保全をやっていた。今後、この地域資源を活用してどうやって地域の産業再生を行っていこうかと。本当に微々たる力かもしれませんが、いわゆる亀井茲矩さんの産業振興だとか、そういうものをお手本にしながら、歴史をひもときながら鹿野の地域経済の循環を少しずつやっていこうよと。では、たまたま鹿野には、株式会社ふるさと鹿野と、いわゆる三セクで運営している山紫苑だとかそば道場、ホットピア、それから今度できました鹿野往来交流館、そういうものを運営しながら交流の地域資源を活用して、そしていろんな人とつながり、人の交流で地域に人を呼び込み、そういう方々のお金も落とさせていただきながら、そして滞在、着地型観光の商品メニュー開発だとか、ではそこで入ってこられて、では例えば山紫苑の農業委託はだれだれさん、頼むよというところまで、やはり地域づくりというのはあるべきではないだろうか。そういうところでやはりきょうの大学に何ができるのかという部分でも、我々は専門的な知識がない、地域学部に限らずいろんなところからお知恵をおかりして何とかこいで行きたいなど、鹿野地域、鳥取市鹿野地域は思っています。

○鳥取大学（野田） 寺谷町長。

○智頭町（寺谷） 西尾さんのお話は、農業をおやりになりながら、高齢者になってちょっと寂しいというニュアンスでお聞きしたのですが、今智頭町に東京のある大手からこういうオファーが実はございます。ある大手の会社がもう40代ぐらいになるとリタイアし始めたと言うのですね。なぜかという、今まで日本の経済を引っ張ってきたIT産業とかいろんなコンピューターとか精密機械、いわゆるゲージの中で仕事をさせますから、40

代ぐらいでストレスがたまる。それから、食事もめっちゃめっちゃだからメタボ、それからうつ。そういうので、会社としてはそういうどんどんふえてくる人間を簡単に首にすることができないと言うのですね。使い捨てはできない。組合とかいろいろあります。

そこで、まず田舎を探せ。田舎に病院があるかどうか。田舎には山と田んぼ、畑がある。たまたま智頭町が農業、林業を軸にしていますので、ある会社から我々にオファーがあったのは、ぜひ智頭町と組むことができないだろうかということです。そういうちょっと疲れた連中に半日は農業させてくれ。あるいは、半日は山に入らせてくれ。そして、あとの半日で給料は少し安くするけれども東京の仕事、いわゆるパソコンでやらせるということですね。

そうすると、皆さんはよく企業誘致と言いますが、企業誘致というのは会社が来て、地元の人を働かせてくれということでしょ。ところが、私は、これは新しい企業誘致になるのではないかと今研究して、また返事を返すことにしていますけれども、大会社との福利厚生と智頭町がタイアップするわけですね。そして、ちょっと疲れた、あるいは疲れるであろう人たちを責任持って町が受け取りましょう。そこに今度は、パソコンを1台持ってやってくるわけですね。

大体60過ぎて、うちの長男はもう東京に出てもう帰ってこない、あるいは大阪で仕事しているからもう鳥取に帰ってこない。60過ぎのお父さんとお母さんが農業をしながら、田んぼをしながら盆に帰ってくるのを楽しみに待つぐらいの方いっぱいいらっしゃるのですよ。そこに、ただいまと言ってパソコン1台持って、例えば西尾さんのところのお子さんと同じような方が、ただいま、お父さん、ちょっと農業を教えてください。白菜の作り方はどうですか、一緒に遊びながら、楽しみながら半日過ごす。そして、午後は仕事をさせる。そうすると、どのうちにもお子さんの小学校のときの机が1つぐらいあるでしょ。そこにパソコン1台だけ置けば、朝、昼、晩、食事が要りますね。それから下宿代といいますかね。そういうのは町が大会社と組んで責任持てば、おうちもいいし、それから会社もいいし、町もいろんな若者が入ってくるわけですね。今言いました疎開保険というのをやったら、ではこれから野菜を送らなきゃだめだからお兄ちゃん一緒に手伝ってくれということも可能ですわね。

ですから、今おっしゃった老人を大事にするのか若者を大事にするかとおっしゃいましたが、これはイコールですね。老人と一緒に若者、それから若者が来ることによって老人というのは非常に刺激があって元気になる。その学生の皆さんも、そういうパワーを持っ

ているわけですね。ですから、私も今、これをある大会社とどういうふうにしたら確実に責任を持ってできるか、今、やりとりをしています。そうなれば新しい企業誘致というのができてくるのではないかなと思っています。農業は、絶対大事だと。農業を半日させてくれという条件つきです。山にも半日入らせてくれ、野と山ですね。そういうことですの
で、これはおもしろい仕掛けになるのではないかなと思っています。（拍手）

○鳥取大学（野田） それから、2点目の西尾さんからの御質問で、地域学部の卒業生の就職口が大事だということで、全く同意見ですし、大変ありがたい御意見ということで承らせていただきます。実際に3回、卒業生を出しましたけれども、そこそこの就職率を保っておりますし、量、質の点でそんなに悪くないです。非常に僕は期待をしています。

それでは、ちょっと時間も少ないのですが、もうお一方、お二方、もしいらっしゃったら。

○会場発言 いいですか。

○鳥取大学（野田） 済みません、手短に質問をお願いします。質問をお願いします。

○会場発言 住田さんに質問したいのですが、米子がデイサービス始めましたね。私も来年、還暦なのです。これからは年寄りの人がふえるのが目に見えていますね。だから、本当デイサービスというのは年寄りの入浴とかのあれですよね。米子が始めたのですか、最初に。それだけ聞きたいのですが。鳥取も盛んにふえていますが。

○米子「笑い通り商店街振興組合」（住田氏） 始めたのは全国で始まっていますけれども、商店街にそういうものを入れたのはうちが一番初めです。

○会場発言 商店街のときに反対が起きなかったのですか。年寄りばかりで。

○米子「笑い通り商店街振興組合」（住田） いや、そうは起きないですね。それはお地藏さんのおかげで大丈夫です。（笑声）

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。

ほかにおいででしたら。では、どうぞ。

○会場発言 鳥取城北高校のヤトベという者ですが、廃校になった小学校を活用していろいろするということだそうですが、もしそれで若者がたくさんやってきて、それで夫婦ができたり子供ができたりして、子供が多くなったら小学校はどうするのですか。（笑声）

（「またつくればいいではない」と呼ぶ者あり）

○智頭町（寺谷） いや、いい御意見だと思いますよ。例えば、5つ学校が残るわけですから、教室がたくさんありますから、ある程度とんとんと教室をバス、トイレをつけ

て、それから簡単な料理ができる、そういうところに宿泊に何個か変えてしまう。そういう中で、私はでき得れば6つの学校を1つにするわけですからね、私はもう非常に罪人なのですね。今まで智頭町の歴史のときずっと6つあったのを、子供が少ないからやるのですけれども、やっぱりせつない気がします。そこで、今おっしゃったそういう都会から来ることによって子供がふえれば、一つのいわゆるコンパクトな非常に木造の小さい学校があります。それをもう一回、学校にチェンジという、そういうことも当然あるわけですね。それはうれしい悲鳴ですから。ですから、そうなるようなそういう仕掛けというのととても大事ではないかと思いますので、今いい意見をいただいたなと思ってうれしいです。（拍手）

○鳥取大学（野田） はい、ありがとうございました。

それでは最後になりますが、パネラーの方々から全体的なことを踏まえて、きょうのやりとりを踏まえて、最後のメッセージを一言ずつお願いします。

順番でまた、寺谷町長からお願いします。

○智頭町（寺谷） 野田先生以下、ゼミの学生の皆さん、どうぞ智頭町に入り込んで、地域づくりと一緒に、そうすると年寄りも皆さんの刺激によって町が元気になる。もう一つは、恥ずかしい話ですけれども、智頭町だけではないのですが、役場の職員というのが往々にして刺激がないのですね。地元で生まれて、地元から育って、地元の役場に入るわけですから、なかなか動きが、フットワークがよろしくない。ですから、そういう学生の皆さんに入っていていただくことによって刺激、そういうものも必ず生まれると思っていますので、ぜひ地区に入っていていただいてそのまちづくり、本物の村づくりをと。私のコンセプトは、最後ですけれども、お待たせしました、いよいよ田舎の出番です。これが私のコンセプトです。（拍手）

○鳥取大学（野田） では、長尾さん。

○いんしゅう鹿野まちづくり協議会（長尾） 今日、参考になるお話ができないまま、私の方が実は勉強させていただいたかなと。実は、今日10時の碓井先生の講演も2時間ほど聞かせていただいた中で、地域学というのですか、地元学。本当に人間活動の舞台としての地表空間と、やはり先生はすばらしい言葉使われるなど、我々民間人にはなかなか出てこない言葉だなという中で、本当に小さな、人口が4,000人そこそこだからできること、大きな町にできないこと。やはり鹿野の場合には、4,400人だから決まったら早いですし、方向も、そこに行くまでの協議、いろいろな地域づくりする中で、実行する

ようになったら早かったです。そこまでの方向にするまでのプロセス、これが本当に我々鹿野の地域づくりの携わった財産かなと思う中で、先ほど保全、それから活用という、いわゆる成長期、成熟期に何とか整備事業の企画段階からの構想を実行していきたい。そういう中で、やはりきょうのテーマ「大学に何ができるのか」とか、そういう中で非常に今後とも鳥取大学のお力、そして多方面にわたる先生方のお力、そして実践の教育の場としての学生さんのお力もぜひお願いをしたいと思います。以上です。（拍手）

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。

では、住田さん。

○米子「笑い通り商店街振興組合」（住田） 先ほどの質問にちょっと。うちのこの町中直売所というのは、農家の人と手を組んで、農家の人の商品を町中に持ってきていただいて、今度そういう販売所をつくるのです、笑い庵の再生の中で。そういうことで、農家の人とつながる。

それから、休耕田に小豆を今つくって、寿製菓に買ってもらうような話になっております。だからやっぱり農家と町というのも、そういう交流をする中で田舎に住みたいという人も出てくるわけで、やっぱり交流というものが一番大事ではないかなと。町と田舎と交流する、そういうことが大事ではないかなと思います。

本当にきょうは、米子に来てもらいたいということですね。ちょっと言い残したのですが、去年ちょっとかっぱをつくりましてね。加茂川がすごく汚れていたのが少しきれいになったもので、加茂川にかっぱ伝説があって、よし、それならもうちょっときれいにするために加茂川にかっぱをつくらうということで、これは気高の池原工業、池原建設ですか、工業……。それをたまたまテレビで見つけまして、それですぐ電話したらつくってあげるよということで、鳥取とうちとはそういうことでは交流があります。それで最初のかっぱは加茂川が汚くなったために、一応日野川の上流の方に疎開していたという設定で、ちょっときれいになったからおやじと長男が帰ってきたと。加茂川をもうちょっときれいにするというストーリーで、うちも金がなかったものでそれしかよう帰さなかったところを、そういう話を合銀の支店長にしたら、なら母親と子供2人はうちで帰してやろうということで、去年のクリスマスの日に間に合わせてくれて、クリスマスと正月は家族でさせないといけんわという話で、それで合銀の方が66万ほどかかったのですけれども、かっぱの次男と長女と母親をつくってくれまして、そうこうしているうちに今度は水木しげるさんの方から、河童の三平を寄附させてくれということで、やはり世の中に金がないというの

ではなくて、あるところにはあるという、上手に金を引き出すことが町づくりかなということで、今、かっぱのおかげで、みんなかっぱの前で写真撮ったりしております。

最後になりますけれども、米子に来てごしない、1回ね。船に乗って、かっぱでも見てください。以上です。（拍手）

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。

では、高橋さん。

○鳥取県（高橋） きょうは地域づくりに向けたこうしたパネルディスカッションを大学側の御提案で、この大学の中でやれたということが大変素晴らしいのではないかなと思います。地域の側からすると、やっぱり大学の知の資源に対する期待は大変大きいものでありますので、ぜひ地域づくりに向けた取り組みをお願いしたいと思います。

この3月にちょっとまとめたばかりで、実はもうこれはなくなったので今増刷中なのですが、鳥取県の中に地域の宝とか、そうしたものがどんなものがあるかなということで、市町村の皆さんと一緒にいろいろ集めましたら、ざっと集めただけでも100事例ほど出てきました。いろんな方々が、それぞれの地域でいろんな活動をされているという、そういったものを取りまとめたものがこれで、ちょっと冊数はないのですがホームページなどには出ておりますので、ぜひ御活用いただきたいのと、ぜひ学生の皆様には若い力を生かして、県内にはまだまだ埋もれている地域資源、地域の宝がいっぱいあるかと思しますので、この本がもうすぐ古くなって、いや、こんなものがいっぱいあるではないかということがどんどん出てくるぐらい、ぜひフィールドワークに頑張っていたきたいなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。

家中さん。

○鳥取大学（家中） では一言ですが、地域学部の卒業生のアンケートですか、就職部会の方でとったらしいですが、就職先に。コミュニケーション力があるとか、コーディネート力があるとか、あるいは発想力、企画力というところで大変評価されている。これはありがたいことだなと思います。専門的な知識ということではないかもしれないけれども、一番地域で暮らしていく中で大切なことが評価されているなと思ったりします。

ちょっとお笑いで自慢話をしますが、これは僕が鹿野のことを書いた都市計画学会の学会誌論文ですね。これに卒業生の文献も紹介しています。普通そんなことはしないのですが、ほかの雑誌論文よりよく書けているので紹介しています。学部の授業に来てもらって、

地域貢献もやって、卒論も書いて、研究論文もできるという、大変美しいストーリーになっています。ほかにも、ものづくり道場もそうですし、ほかの県の事業などもやりながら、森と村の学校プロジェクト、ここにも地域マネージャーの丹羽さんがいますが、あるいは鰻絵なまこ壁文化推進協議会の宮本さんもいますが、どんどん連携しながら本当に地域のニーズに合った学問とか教育、あるいは地域の教育力をお借りして本来の教育というのをもう一回ここから立ち上げていけることができるのではないかと、そんなことを今日の方々のお話からすごい勇気をいただいた、励みをいただいたという感じがします。どうもありがとうございました。

○鳥取大学（野田） ありがとうございます。（拍手）

これで閉じるわけですが、最後に私、手短かにコメントします。

まちづくりというのは、だれがやるのかという話ですが、基本的には住民がやるのですが、これまではお上がやることだとみんな考えてきたと思うのですね。お上とは、すなわち国であって、それが都道府県、市町村とおりてきて、市町村の人たちが実際現場でやると。住民はそれを傍観者で要求だけしていればよいという時代が長いこと続きました。ところが、それはもうできませんし、お金ももうありません。これからは、地域主権という言葉がありますけれども、地域で、自分たちで頑張っていくしかない。頑張るというのは、汗をかくというよりは知恵を出すということだと思うのですね。知恵というのは、なかなかこれが出るようで出ないものですから、そこに地域多様な価値観があって、それがぶつかり合いながら新しいもの、知をつくり出すということが必要です。それは大学が実はお得意とするところなのですが、大学もほっておくと画一化が進みます。ですから、大学が地域に出ていくことは、大学の本来の活動、教育研究、地域連携の観点からとっても大事なことです。

それで、地域活性化といいますと、専ら例えば経済的な面とか雇用の問題と考えられがちですし、それは非常に重要なことなのです。それがまずないと、地域が維持可能ではありませんから。しかし、鹿野で紹介されたように、住んでいることが誇りに思える町というのが、僕はキーワードのような気がするのですね。もちろん、そこで生活ができないと誇りも何もないわけですが、そこに住むことができれば、本当にいい町でしょうと、どうですかと、これが本当に言えるということが最後の何か目標かなと思っていまして、最近シビックプライドという言葉があります。まあ市民の誇りという意味ですが、住んでいる人たちが自分たちのコミュニティに対して誇りと自信と愛着を持っていると、こうい

うことを目指してやっていくべきだろうと思います。

今、きょう御発言いただいた方々の地域行ってみたいと思いますよね。地域づくりのキーパーソンに会いたいからです。つまり、魅力的な地域というのは、なぜか人がいるのです。人が寄ってくるのですね。そこはお金も寄ってくるのですね。そこが、そこにいる人おもしろいし、外からも評価をされることになると思います。これが逆のサイクルに入り出すと、全部悪い方向にまわっていきます。うまくいき出すと非常にうまくいく、それが続いていくのですね。ジェイン・ジェイコブスという都市計画の人が言っていますけれども、都市計画というのは非計画的に、偶発的に起こったことが連鎖反応を起こしてよくなっていくということを言っています。しかし、非計画性というのは、行政に最も不得意な分野です。行政は計画的に物事を進める場所ですから。一方大学などは、あるいは民間の方々のやり方は、住田さんの例がいいわけですが、船を買ってしまったと。でも、気がついたら操縦はできないよと、これがいいなと思うのです。行政はそういうことあり得ませんから。でも、もらったからもうやろうよ、そういうことが行政とうまく組み合わせることによって新しいことを切り開いていくのだと思います。

ですから、まちづくりというのは最終的には住民の力でやるのだけれども、行政やそれから大学などもがっちりスクラムを組んでやっていくことで持続可能な形になっていくのではないかと思います。そういう意味で大きな宿題もいただきましたけれども、きょう、私も司会をやってよかったなと思いました。私も勉強になりました。どうもありがとうございました。（拍手）

○鳥取大学（渡部） どうもありがとうございました。

それでは、片づけをしている間に私の方から4つほどアナウンスしたいと思います。どうぞ下の方におりていただいて、ありがとうございました。

まず、お手元のアンケートですけれども、鳥取大学が法人化しまして地域連携を始めて6年、地域学部を立ち上げて、地域学を探究して6年になりました。その節目としてきょうはこういった研究大会を持ちましたけれども、いかがでしたでしょうか。期待どおりでしたでしょうか。お手元にアンケートがありますので、ぜひ御記入をいただきたいと思います。それで、アンケートは無記名ですけれども、例えばきょうありましたように、関係をつけたい、大学ともっと連携を結びたいということで、お名前とか連絡先とか、こういうふうな関係をつけたいということがありましたら、そういうことも書いていただければ後で連絡ができるかと思います。アンケートは帰りに出口の方に箱がありますので入れて

いただけたらと思います。

2点目ですけれども、途中できょうのシンポジウムで資料が若干なかった部分があるか
と思います。例えば、鹿野の2枚目の資料が届いていなかったような方があると思います
けれども、入り口のところに資料の残っているものがありますので、お受け取りいただき
たいと思います。

それから3つ目ですけれども、きょうの朝の碓井先生の基調講演でも、住民参加型の実
践学ということがありました。鳥取大学では、冒頭に紹介しましたように公開講座という
ことで、毎週水曜日午前中のところの公開をしておりますので、その案内も入っておりま
す。そのほかに、鳥取大学では聴講生であるとか社会人大学院生であるとか、さまざま
形で地域の社会人や住民の方々をつなげる機会があると思いますので、ぜひチラシに入っ
ております連続講演会「地域を創る」の方を活用いただきたいと思います。

それでは最後ですけれども、この後、学生主体になりました地域連携活動の発表会がご
ざいます。この2階の第2会議室というところで、倉吉淀屋サミットのグループ、倉吉明
倫小学校のグループ、茶屋二区えんがわ事業のグループ、隠岐島海士町グループ、因幡の
手作りまつりのグループ、それに金沢大学の学生が参加してということになっております。

若干時間が押しておりますので、10分ほど休憩とりまして、3時30分ぐらいから開
始できればと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、アンケート回収の方、出口の方で何とぞよろしくお願いいたします。どうも
ありがとうございました。（拍手）

どうも失礼いたしました。まことに失礼いたしました。地域連携の方の林理事さんの方
から総括的なごあいさつをいただくというのを失念しておりまして、申しわけございませ
んでした。

○鳥取大学（林氏） 鳥取大学で地域貢献を担当しております林でございます。

きょうは、朝早くから長時間にわたって、多数の皆様に御聴講いただきまして大変あり
がとうございました。

午前中の奈良大学の碓井先生の基調講演では、地域学の将来展望について大変示唆に富
むお話をお聞きすることができました。また、地域学について学術的かつ体系的な理解を
深めることができたように思っております。

これは個人的に不勉強なのですが、思いましたのは、こういう講演をもう少し早く、何
年か前にお聞きすることができたらよかったのかなという、そんな感じもいたしました。

また、午後のシンポジウムでは、各パネラーの皆様から鳥取大学に縁の深いパネラーの皆様から、地域での意欲的な実践活動に裏打ちされた数多くのユニークな提言をいただきました。地域学部や大学全体に対する心強いエールも送っていただいたように思います。

本日いただきました御意見や御提案を鳥取大学の今後の教育研究活動や、あるいは社会貢献活動の中に積極的に取り入れることができたと感じたところであります。

先ほどお話がありましたように、国立大学の第2期目の中期計画、6年間の計画でありますけれども、2回目の計画がこの4月にスタートしたばかりであります。こういった時期に開催されました本日の大会は、地域学部のみならず大学全体にとっても非常に貴重な、あるいは有意義な大会であったように思っております。

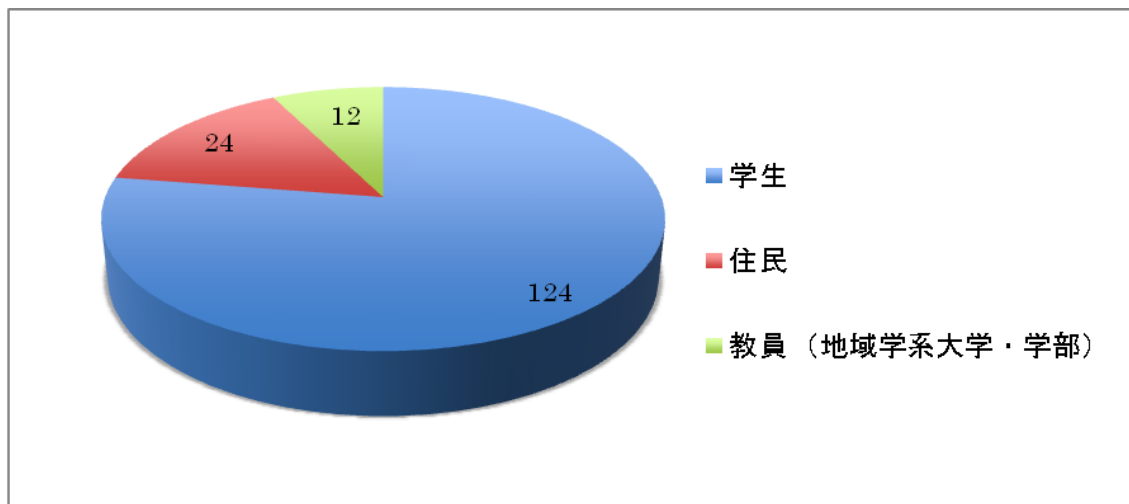
基調講演の講師の先生、そしてパネラー、コーディネーターの皆様にご心よりお礼を申し上げます。

終わりに本日の大会開催に当たり、滞りなく諸準備を行っていただきました地域学研究会事務局スタッフの皆様にご心よりお礼を申し上げて、閉会のごあいさつといたします。どうもありがとうございました。（拍手）

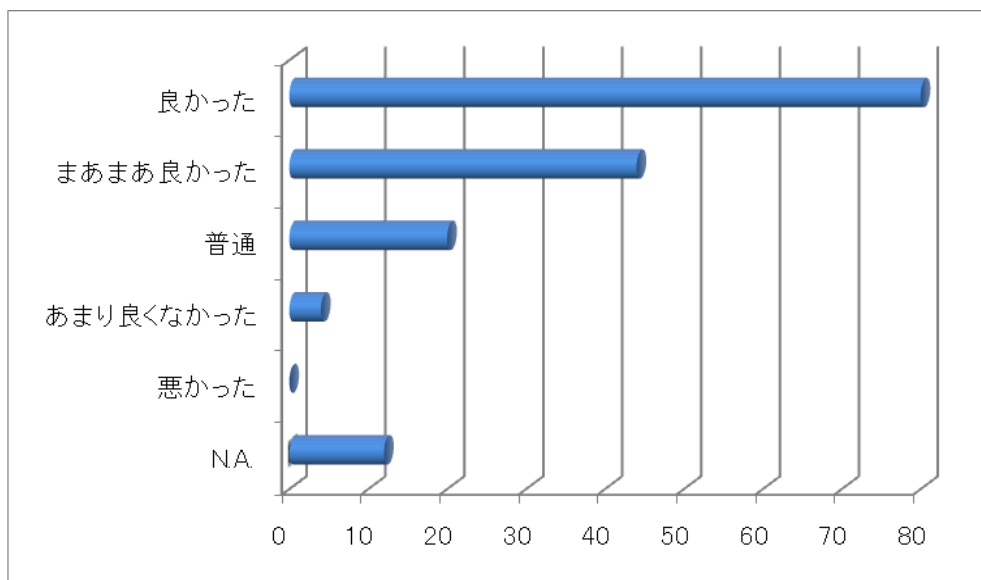
○鳥取大学（渡部） それでは、どうも失念しまして申しわけありませんでした。これにて終了したいと思います。ありがとうございました。（拍手）

4. 参加者アンケート結果

(参加者属性) 単位：人



(基調講演とシンポジウムの評価) 単位：



5. おわりに（今後の方向性）

本報告書は、鳥取大学で2010年6月11日に開催された第6回地域学系大学・学部等連携協議会シンポジウム「知の交差する場としての〈地域〉」と同12日に開催された第1回鳥取大学地域学研究会大会の報告書である。

地域学系大学・学部等連携協議会は、「各大学の教育、研究、地域貢献活動の交流を通して、それぞれの大学における地域学研究の質を向上させ、わが国における地域学確立に向けて貢献するため」（地域学系大学・学部等連携協議会設立趣意書）平成17年度に設立された。現在次の7大学が加盟している。

北海道教育大学函館 山形大学地域教育文化学部

金沢大学人間社会学域地域創造学類 宇都宮大学国際学部

岐阜大学地域科学部 鳥取大学地域学部

徳島大学総合科学部／大学院総合科学教育部（地域科学専攻）※

※この時点ではオブザーバー参加。

11日の協議会シンポジウムでは、6大学から地域と連携した教育、研究、地域貢献の取り組みの報告がなされた。ここでは各大学ともそれぞれのやり方で地域との連携を積極的に推進していること、大学の持つ「知」と地域の持つ「知」を融合させることで、地域に根ざした教育研究活動の成果が生まれつつある状況とそこにおける課題意識を参加校間で共有することができた。

また、12日の大会は鳥取大学地域学研究会初の取り組みである。地域学研究会は、鳥取大学が地域学部を開設した平成16年度に「地域学の体系や内容を学際的見地から研究することにより、学問としての地域学の確立をめざすとともにその普及を推進し、もって本学および地域の発展に寄与する」ため（鳥取大学地域学部地域学研究会規則）設置した組織であり、学部教員全員で構成されている。大会は、日本学術会議地域研究委員会副委員長碓井照子先生（奈良大学文学部地理学科教授）の基調講演「地域学の未来－日本学術会議地域研究委員会からの提言－」で口火を切った。碓井先生は、日本学術会議も「地域学」に大いに期待していることを述べられた。

基調講演に引き続き、鳥取県内の各地で地域づくりに関わっておられる方々を招いてのシンポジウム「大学に何ができるか～地域づくりと地域学～」を実施した。ここでは県内各地で地域づくりへの大学の積極的な参画が期待されていることがあらためて確認された。また、智頭町長からは具体的な提案をいただくなど白熱した議論が展開された。また、これらと並行して、鳥取大学地域学部学生による地域活動に関するポスターセッションも別教室で行われ、シンポジウム終了後の金沢大学から参加した学生のセッションも含め、金沢大学生と大会参加者や鳥取大学生が交流した。

最後に、鳥取大学地域学部が今後目指すべき方向性について述べたい。

鳥取大学地域学部ではこれまで、地域政策学科、地域教育学科、地域文化学科、地域環境学科、芸術

文化センターがそれぞれ教育・研究・地域連携活動を展開してきた。教育面では、地域学入門（1 年生）地域調査実習（2 年生）地域学総説（3 年生）卒論（4 年生）という学部必修科目を柱とした地域学教育の体系にもとづいた教育を実施している。また、研究面では、これまでの学部における地域学研究成果をまとめた『地域学入門』（仮称）を 2011 年 3 月に出版することになっている（ミネルヴァ書房）。このような成果をふまえつつ、地域学の教育研究を今後一層発展させていくためには次の点が必要だと考えられる。

1. 具体的な地域課題の解決など地域が大学に求めることと大学が学生の教育プログラムとして地域で展開する活動との間の溝をどのようにとらえ対処するかといった点を研究する。
2. 学科共同で新たなフィールドワーク授業や研究プロジェクト等を立ち上げることで学科間の垣根を低くし、学科間での学生交流、教員交流を促進する。
3. 地域学系大学・学部等連携協議会の共同プログラムとして「学生地域インターン制度」（仮称）を検討する。
4. 金沢大学で実施されているような県内等で地域づくりに関わる人を例えば「地域研究員」として位置づけ、大学で講義を実施してもらったり、『地域学論集』へ論文の投稿をしてもらうなど研究面における地域との協働関係を確立・強化するシステムを構築する。
5. 中心市街地や中山間地におけるサテライトキャンパスの設置による地域連携拠点を創出する、などである。

さらに、これらを実現し活動を促進するための条件整備としては次のことが必要だろう。

1. 地域連携教育、地域連携研究を体系的・総合的に推進するため、産学・地域連携推進機構や学部事務部門の専門性を高めるなど学内組織の強化が必須である。将来的には、地域連携教育センターや地域再生研究機構といった大学と地域や自治体等が共同で設立する教育研究組織を検討すべきである。
2. 学内と学外をつなぐための組織として、例えば「地域・大学連携センター」といった中間支援組織（NPO）の設置も検討すべきである。
3. これらの事業を実施、発展させるためにはその財源として大型の外部資金の導入が求められる。

いずれにしてもこれからの鳥取大学地域学部が目指すべき方向は、地域の「知」と大学の「知」を融合させることで「地域学」を深化・発展させながら、その成果にもとづいたフィールドワークなど様々な地域連携型の教育・研究メニューの充実を図り、地域づくりに積極的に参画すること、そして地域を支える人材育成を行い地域に貢献することである。

（鳥取大学地域学研究会副会長 野田邦弘）

